

鳥羽離宮跡Ⅰ

金剛心院跡の調査

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊

2002 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



鳥羽離宮跡の空撮（2001 年撮影）



第 102 次調査 園池復元（池 14 灌水状況）



金剛心院跡出土の飾金具



金剛心院跡出土瓦による屋根葺き上げ復元



同 細部

序 文

鳥羽離宮跡の発掘調査は、昭和 35 年 (1960) に名神高速道路建設予定地の事前調査として実施されたことに始まり、今日まで 144 次の多くを数えます。(財)京都市埋蔵文化財研究所は昭和 51 年 (1976) 秋に創設され、その年に実施しました第 21 次調査を最初に、今日まで継続して鳥羽離宮跡の調査を行っています。

この報告書で取り上げています金剛心院は、鳥羽院が久寿元年 (1154) に造営された鳥羽離宮内の田中殿と馬場殿の間に所在したと伝えられています。境内には九体阿弥陀堂、釈迦堂などの仏堂や寝殿が営まれたことが文献から知ることができますが、その配置などは明らかではありませんでした。金剛心院関係の調査は、昭和 57 年 (1982) の第 74 次調査から昭和 60 年 (1985) の第 109 次調査まで毎年継続的に調査を実施しており 18 回にわたっています。また立会調査は、昭和 58 年 (1983) 年から平成 3 年 (1991) までに 6 回を重ねています。これらの調査では、金剛心院跡に関係した多くの遺構、遺物が出土しています。これまでに調査成果の概要を紹介していますが、ここに当研究所が刊行しています報告書の第 20 冊として『鳥羽離宮跡Ⅰ 金剛心院跡の調査』を刊行することになりました。

本書に収録しました内容は、初めに調査結果と概要を述べ、調査成果の遺構や遺物などについての詳細を報告し、それを総括してまとめとしています。あわせて、付章に鳥羽離宮跡出土の仏教遺物の形状と技法、自然遺物の内容について検討しています。

金剛心院の全容を解明するうえで、今後の調査の進展に待つところ少なくありません。これまでの多次にわたる既往の調査成果のすべてを収録しました本報告書が寄与するところが少なくないことを願い、ご参考にしていただければ幸いかと存じます。

この調査の実施ならびに本報告書を刊行するに際しまして、関係各方面の多くの方々からご指導、ご協力いただきましたことに厚く感謝いたします。また、ご寄稿賜りました各位に厚くお礼申し上げます。なお、本報告書の内容について、ご批判やご助言をいただけますように、お願い申し上げます。

2002 年 3 月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が鳥羽離宮跡において昭和 57 年（1982）から平成 3 年（1991）にかけて実施した金剛心院跡の発掘調査、試堀・立会調査の報告書である。
- 2 図中の方位・座標値は、日本測地系（改正前）平面直角座標系Ⅵによる。ただし、単位（m）は省略している。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した。
- 3 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の都市計画基本図（1:2,500）「城南宮」を調整して使用した。
- 4 遺構番号は通し番号を付し、頭に遺構の種類を付した。
- 5 遺構番号は種類ごとに通し番号を付した。
- 6 本書で使用した層名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
- 7 付章 1 鳥羽離宮跡出土の仏教遺物については、文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官の伊東史朗氏に、執筆と関連遺物の写真を提供していただいた。
- 8 付章 2 鳥羽離宮跡出土の自然遺物は、『鳥羽離宮跡発掘調査概報（昭和 57 年度）』に掲載したものを再録した。
- 9 表 2・3 の住所は、土地区画整理事業に伴う地名・地番の変更（昭和 9 年 8 月 30 日付）が実施される以前の呼称を用いた。変更後の新地名・地番は、表 16 に掲載した。

目 次

第1章	序 言	1
第2章	位置と環境	
	1 地理的環境	3
	2 鳥羽離宮の沿革	4
第3章	調査経過と調査概要	
	1 調査経過	9
	2 調査概要	11
第4章	遺 跡	
	1 層序	19
	2 遺構	19
第5章	遺 物	
	1 瓦類	35
	2 土器類	46
	3 土製品	50
	4 金属製品	51
	5 木製品	53
	6 玉類	54
	7 石製品	55
第6章	ま と め	
	1 遺構	57
	2 遺物	63
付章1	鳥羽離宮跡出土の仏教遺物	
	はじめに.....	80
	1 木製品	80
	2 金属製品	83
	まとめ.....	85
付章2	鳥羽離宮跡出土の自然遺物	
	1 第79次調査洲浜21植物遺体の分布と植生の復元.....	87
	2 第79次調査池内(洲浜21・石組22)の石材の岩石学的検討	91
付章3	鳥羽金剛心院の堂舎の規模について	95

図 版 目 次

巻頭図版 1	遺跡	鳥羽離宮金剛心院跡の空撮 (2001 年撮影)
巻頭図版 2	遺跡	第 102 次調査 園池復元 (池 14 灌水状況)
巻頭図版 3	遺物	金剛心院跡出土の飾金具
巻頭図版 4	遺物	金剛心院跡出土瓦による屋根葺き上げ復元・同細部
図版 1	遺跡	金剛心院跡調査位置図
図版 2	遺跡	調査区配置図
図版 3	遺跡	第 75 次・76 次・79 次・89 次・90 次・98 次・102 次・106 次調査 No. 1 平面図
図版 4	遺跡	第 75 次・76 次・79 次・89 次・97 次・109 次調査 No. 2 平面図
図版 5	遺跡	第 79 次・97 次・102 次調査 No. 3 平面図
図版 6	遺跡	第 39 次・74 次・75 次・80 次・99 次・103 次調査 No. 4 平面図
図版 7	遺跡	第 97 次・100 次・101 次・107 次・109 次調査 No. 5 平面図
図版 8	遺跡	第 75 次・79 次・97 次・109 次調査 建物 1 (釈迦堂) 実測図
図版 9	遺跡	第 75 次・109 次調査 建物 2 (九体阿弥陀堂) 実測図
図版 10	遺跡	第 97 次調査 建物 1・建物 6 (釣殿廊) 実測図
図版 11	遺跡	第 79 次調査 建物 4 (東渡殿)・柱列 47 実測図
図版 12	遺跡	第 101 次調査 建物 7・溝 35・溝 36 (一間四面堂・南限両側溝) 実測図
図版 13	遺跡	第 79 次調査 建物 1 (釈迦堂) 地業実測図
図版 14	遺跡	第 109 次調査 建物 2 (九体阿弥陀堂) 地業実測図
図版 15	遺跡	第 80 次調査 築地 13・溝 32・溝 33 (西限築地と側溝) 実測図 (1)
図版 16	遺跡	第 99 次調査 築地 13・溝 32・溝 33 (西限築地と側溝) 実測図 (2)
図版 17	遺跡	第 79 次調査 池 14・石組 22 実測図
図版 18	遺跡	第 97 次調査 建物 6・池 14・石組 23・船着場 26 実測図
図版 19	遺跡	第 97 次調査 池 14・滝組 18 実測図
図版 20	遺跡	第 102 次調査 池 14・出島 19・船入 20 実測図
図版 21	遺跡	第 109 次調査 池 16・洲浜 24・橋 17 実測図
図版 22	遺跡	第 109 次調査 池 16・洲浜 25・井戸 29 実測図
図版 23	遺跡	第 79 次調査 井戸 27 実測図
図版 24	遺跡	第 79 次調査 井戸 28 実測図
図版 25	遺跡	第 109 次調査 井戸 29 実測図
図版 26	遺跡	第 109 次調査 井戸 30 実測図
図版 27	遺跡	第 75 次・97 次・102 次・109 次調査 断面図 (1)

- 図版 28 遺跡 第 79 次・97 次・100 次調査 断面図 (2)
- 図版 29 遺跡 第 80 次・97 次・101 次・106 次調査 断面図 (3)
- 図版 30 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 (1)
- 図版 31 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 (2)
- 図版 32 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 (3)
- 図版 33 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 (4)
- 図版 34 遺物 軒丸瓦拓影・実測図 (5)
- 図版 35 遺物 軒平瓦拓影・実測図 (1)
- 図版 36 遺物 軒平瓦拓影・実測図 (2)
- 図版 37 遺物 軒平瓦拓影・実測図 (3)
- 図版 38 遺物 軒平瓦拓影・実測図 (4)
- 図版 39 遺物 軒平瓦拓影・実測図 (5)
- 図版 40 遺物 鬼瓦実測図
- 図版 41 遺物 丸瓦拓影・実測図 (1)
- 図版 42 遺物 丸瓦拓影・実測図 (2)
- 図版 43 遺物 丸瓦拓影・実測図 (3)
- 図版 44 遺物 丸瓦拓影・実測図 (4)
- 図版 45 遺物 軒平瓦平瓦部拓影 (1)
- 図版 46 遺物 軒平瓦平瓦部拓影 (2)
- 図版 47 遺物 平瓦拓影・実測図 (1)
- 図版 48 遺物 平瓦拓影・実測図 (2)
- 図版 49 遺物 平瓦拓影・実測図 (3)
- 図版 50 遺物 平瓦拓影・実測図 (4)
- 図版 51 遺物 平瓦拓影・実測図 (5)
- 図版 52 遺物 平瓦拓影・実測図 (6)
- 図版 53 遺物 平瓦拓影・実測図 (7)
- 図版 54 遺物 平瓦拓影・実測図 (8)
- 図版 55 遺物 平瓦拓影・実測図 (9)
- 図版 56 遺物 平瓦拓影・実測図 (10)
- 図版 57 遺物 平瓦拓影・実測図 (11)
- 図版 58 遺物 平瓦拓影・実測図 (12)
- 図版 59 遺物 平瓦拓影・実測図 (13)
- 図版 60 遺物 金属製品実測図 (1) 飾金具
- 図版 61 遺物 金属製品実測図 (2) 飾金具・銅製小型釘
- 図版 62 遺物 金属製品実測図 (3) 鉄製釘

図版 63	遺物	木製品実測図 (1) 仏教遺物	
図版 64	遺物	木製品実測図 (2) 卒塔婆	
図版 65	遺物	木製品実測図 (3) 卒塔婆・呪符	
図版 66	遺物	木製品実測図 (4) 井戸枠	
図版 67	遺跡	鳥羽離宮跡 (金剛心院周辺) 航空写真 (右が北)	
図版 68	遺跡	第 76 次・89 次・90 次調査	1 全景 (北から) 2 溝 31 (北西から) 3 溝 31 (北東から)
図版 69	遺跡	第 106 次調査	4 建物 62 (第 2 面) (北から) 5 第 3 面全景 (南東から)
図版 70	遺跡	第 80 次・99 次調査	6 東半部 (西から) 7 築地 13 地業と柱列 46 (北から) 8 築地 13 地業 (南から)
図版 71	遺跡	第 80 次調査	9 築地 13 東側の暗渠 52 (北東から) 10 築地 13 地業細部 (南から) 11 築地 13 地業・地鎮 49 (北西から)
図版 72	遺跡	第 101 次調査	12 全景 (北から)
図版 73	遺跡	第 100 次・101 次調査	13 溝 35・36 (北東から) 14 全景 (東から) 15 建物 8 礎石と地業 (北東から)
図版 74	遺跡	第 107 次調査	16 全景 (東から) 17 池 14 洲浜細部 (東から) 18 池 14 (北東から)
図版 75	遺跡	第 75 次調査	1 東半部 (東から) 2 建物 3・建物 9 (南東から)
図版 76	遺跡	第 75 次調査	3 建物 3 (南から) 4 北半部 (北から) 5 東半部 (西から)
図版 77	遺跡	第 75 次調査	6 建物 1 北西隅地業 (北西から) 7 建物 1 地業 (北西から) 8 建物 1 地業断割 (北西から)
図版 78	遺跡	第 75 次調査	9 建物 1 地業細部 (西から) 10 建物 1 北側の雨落溝 58 (東から)
図版 79	遺跡	第 75 次調査	11 建物 2 北辺の礎石列・雨落溝 57 (北から) 12 建物 2 雨落溝 57 周辺の瓦出土状況 (東から)

図版 80	遺跡	第 79 次調査	1	西半部（北から）
図版 81	遺跡	第 79 次調査	2	全景（南東から）
図版 82	遺跡	第 79 次調査	3	建物 3（南東から）
			4	建物 3 土壇断割断面（南東から）
図版 83	遺跡	第 79 次調査	5	建物 1 北東部基壇上面（北東から）
			6	建物 1 地業（東から）
図版 84	遺跡	第 79 次調査	7	建物 1 地業（北から）
			8	建物 1 地業細部（北から）
図版 85	遺跡	第 79 次調査	9	建物 1 地業（東から）
			10	建物 1 地業細部（東から）
図版 86	遺跡	第 79 次調査	11	建物 1 地業細部
			a	地業最下層の石敷検出状況（西から）
			b	地業単位を示す玉石積上状況（北西から）
			c	玉石除去後の状態（西から）
			d	玉石積上状況（北から）
			12	建物 1 地業下部状況（北東から）
図版 87	遺跡	第 79 次調査	13	建物 1 地業中央隅細部（北から）
			14	建物 1 地業北東隅細部（北西から）
			15	建物 1 地業内礎石根固（西から）
			16	建物 1 基壇化粧（凝灰岩）（南東から）
図版 88	遺跡	第 79 次調査	17	建物 4・雨落溝 61（北から）
			18	柱列 47（南東から）
図版 89	遺跡	第 79 次調査	19	建物 4 根石据付状況（南東から）
			20	建物 4 礎石根固検出状況（西から）
			21	雨落溝 61（北から）
図版 90	遺跡	第 79 次調査	22	池 14 西岸（北から）
図版 91	遺跡	第 79 次調査	23	池 14 西岸部の石組 22（北から）
			24	洲浜 21（北から）
			25	池 14 西岸北部の灌水状況（南から）
			26	建物 4 北東部の景石（北西から）
図版 92	遺跡	第 79 次調査	27	建物 4 北東部の景石据付状況（南から）
			28	池 14・石組 22（南東から）
図版 93	遺跡	第 79 次調査	29	池 14 西岸の井戸 27（北西から）
			30	井戸 28（南上から）
			31	井戸 28 断割（南西から）

図版 94 遺跡 第 79 次調査

図版 95 遺跡 第 97 次調査

図版 96 遺跡 第 97 次調査

図版 97 遺跡 第 97 次調査

図版 98 遺跡 第 97 次調査

図版 99 遺跡 第 97 次調査

図版 100 遺跡 第 97 次調査

図版 101 遺跡 第 97 次調査

図版 102 遺跡 第 97 次調査

図版 103 遺跡 第 97 次調査

図版 104 遺跡 第 97 次調査

図版 105 遺跡 第 97 次調査

図版 106 遺跡 第 102 次調査

図版 107 遺跡 第 102 次調査

図版 108 遺跡 第 102 次調査

図版 109 遺跡 第 102 次調査

32 土壌 42(北東から)

33 溝 41(北西から)

1 全景(西から)

2 建物 1 南東部の地業(南東から)

3 建物 1 南東部の地業下部(南東から)

4 建物 1 南東部の地業完掘状況(南東から)

5 建物 1 地業断面(南から)

6 建物 6(東から)

7 池 14 と堤(南東から)

8 石組 23 と瓦出土状況(北から)

9 建物 6 の根石検出状況(南西から)

10 池 14・滝組 18(西から)

11 滝組 18 立石復原後の石組(北東から)

12 滝組 18 復原前の立石(南東から)

13 滝組 18 立石復原状況(南西から)

14 滝組 18 下流の遺水遺構(北西から)

15 滝組 18 立石復原状況と遺水遺構(南西から)

16 船着場 26・滝組 18(北西から)

17 船着場 26(北東から)

18 建物 6・船着場 26・池 15(北東から)

19 池 15(北東から)

20 池 14(北から)

21 池 14(東から)

22 池 14 と堤(北から)

23 堤(北東から)

24 堤基底部(西から)

1 全景(東から)

2 池 14 北端部の出島 19(南東から)

3 出島 19 と船入 20 灌水状況(西から)

4 出島 19 西半部の景石(北西から)

5 船入 20 細部(南から)

6 出島 19 の南端部(北西から)

7 出島 19 の南端部の景石据付状況(北から)

8 船入 20 の景石据付状況(北から)

9 出島 19 の景石(北東から)

図版 110 遺跡 第 102 次調査

図版 111 遺跡 第 102 次調査

図版 112 遺跡 第 109 次調査

図版 113 遺跡 第 109 次調査

図版 114 遺跡 第 109 次調査

図版 115 遺跡 第 109 次調査

図版 116 遺跡 第 109 次調査

図版 117 遺跡 第 109 次調査

図版 118 遺跡 第 109 次調査

図版 119 遺跡 第 109 次調査

図版 120 遺跡 第 109 次調査

図版 121 遺跡 第 109 次調査

図版 122 遺跡 第 109 次調査

10 出島 19 東半部の景石（南西から）

11 出島 19 西半部の景石（南東から）

12 景石据付状況（西から）

13 池 14 の溝 40（西から）

14 金剛心院整地層および景石除去後の全景（北東から）

15 古墳時代竪穴住居群（北から）

1 全景（南西から）

2 建物 2（南東から）

3 池 16・建物 2（東から）

4 建物 2 東面礎石列と基壇（東から）

5 建物 2 地業（東から）

6 建物 2 地業（東側上空から）

7 建物 2 地業完掘状況（東から）

8 池 16（南から）

9 池 16 の灌水状況（南から）

10 池 16・洲浜 24（北から）

11 洲浜 24 細部（東から）

12 洲浜 24（南東から）

13 洲浜 25・井戸 29（東から）

14 建物 2 東面の礎石列（南から）

15 洲浜 25・井戸 29（南から）

16 景石据付状況（南から）

17 景石据付状況（東から）

18 橋 17（北から）

19 橋脚断割断面（北から）

20 暗渠 53（北から）

21 井戸 29（北から）

22 井戸 30（南東から）

23 拡張区全景（東から）

24 拡張区 池 16 の洲浜と景石（東から）

1 池 16 仏教遺物出土状況

2 池 16 仏教遺物（垂飾）出土状況

3 池 16 仏教遺物（垂飾）出土状況

- 図版 123 遺物 軒丸瓦 (1)
- 図版 124 遺物 軒丸瓦 (2)
- 図版 125 遺物 軒丸瓦 (3)
- 図版 126 遺物 軒丸瓦 (4)
- 図版 127 遺物 軒丸瓦 (5)
- 図版 128 遺物 軒丸瓦 (6)
- 図版 129 遺物 軒平瓦 (1)
- 図版 130 遺物 軒平瓦 (2)
- 図版 131 遺物 軒平瓦 (3)
- 図版 132 遺物 軒平瓦 (4)
- 図版 133 遺物 軒平瓦 (5)
- 図版 134 遺物 軒平瓦 (6)
- 図版 135 遺物 軒平瓦 (7)
- 図版 136 遺物 鬼瓦
- 図版 137 遺物 軒平瓦・丸瓦・ヘラ記号
- 図版 138 遺物 軒丸瓦・軒平瓦細部
- 図版 139 遺物 軒丸瓦・丸瓦 (1)
- 図版 140 遺物 丸瓦 (2)
- 図版 141 遺物 軒平瓦平瓦部
- 図版 142 遺物 平瓦 (1)
- 図版 143 遺物 平瓦 (2)
- 図版 144 遺物 平瓦 (3)
- 図版 145 遺物 平瓦 (4)
- 図版 146 遺物 平瓦 (5)
- 図版 147 遺物 平瓦 (6)
- 図版 148 遺物 平瓦 (7)
- 図版 149 遺物 土師器 (1)
- 図版 150 遺物 土師器 (2)
- 図版 151 遺物 土師器・瓦器・灰釉陶器
- 図版 152 遺物 鴛鴦文金具・飾金具
- 図版 153 遺物 銅製小型釘・鉄製釘・仏教遺物 (垂飾)
- 図版 154 遺物 仏教遺物 (光背・台座等段片) 表面・仏教遺物 (光背・台座等段片) 裏面
- 図版 155 遺物 仏教遺物 (八葉蓮花)・卒塔婆・井戸 29 出土木製品・玉類・線刻仏
- 図版 156 遺物 土製円塔・孔雀文金具 (参考資料 第 118 次調査出土)

挿 図 目 次

図 1	金剛心院跡位置図	3
図 2	鳥羽離宮跡位置図	4
図 3	鳥羽離宮金剛心院跡周辺主要遺構配置図	7
図 4	区画整理以前の鳥羽離宮跡航空写真(1965 年)	9
図 5	調査区配置図(1:2,500)	10
図 6	土壌 64(南から)(第 74 次調査)	11
図 7	古墳時代の竪穴住居跡(北から)(第 102 次調査)	14
図 8	平安時代中期の木棺墓(第 102 次調査)	14
図 9	建物 3 東側礎石(南から)	17
図 10	建物 3 西側礎石(東から)	17
図 11	廊東側礎石(西から)	17
図 12	廊西側礎石(西から)	17
図 13	立会調査位置図	18
図 14	橋 17 実測図(第 109 次調査)	26
図 15	柱列 48(北東から)(第 89 次調査)	33
図 16	地鎮 49 実測図(第 80 次調査)	33
図 17	KH9A 型式の瓦	43
図 18	讃岐系平瓦成形台と叩き板の復元図	44
図 19	軒平瓦・丸瓦・平瓦のへう記号拓影・実測図	45
図 20	第 80 次調査出土土器実測図	46
図 21	第 80 次調査 地鎮 49 出土土器実測図	47
図 22	第 97 次調査出土土器実測図	47
図 23	第 97 次調査出土土器実測図	48
図 24	第 109 次調査 池 16 出土土器実測図	49
図 25	第 109 次調査 井戸 30 出土土器実測図	49
図 26	土製円塔実測図	50
図 27	第 79 次調査 建物 1 出土銭貨拓影	52
図 28	井戸枠連結模式図(上)と転用前復元図(下)	53
図 29	第 109 次調査 井戸 29 出土木製実測図	54
図 30	第 75・79・97・109 次調査 玉類実測図	54
図 31	第 80 次調査 玉類実測図	54
図 32	第 92 次調査 滑石小椀実測図	55

図 33	第 101 次調査 温石実測図	55
図 34	第 109 次調査 緑刻仏実測図	55
図 35	池復元図	61
図 36	第 97 次調査 景石据え付け状況実測図	62
図 37	垂飾の X 線透過写真	81
図 38	光背の唐草模様 阿弥陀如来像所用 円成寺	83
図 39	三連蓮 中尊寺弁	83
図 40	光背の頭光中心 勢至菩薩所用 七寺	84
図 41	天蓋の八葉蓮華（裏面）大日如来像所用 金剛峯寺	84
図 42	天蓋の垂飾 大日如来像所用 金剛峯寺	84
図 43	方形金具	85
図 44	瓔珞	85
図 45	舌	85
図 46	鈴	85
図 47	須弥壇の格狭間文様 金色堂（中央壇）中尊寺	85
図 48	孔雀 第 118 次調査出土金具	86
図 49	近畿地方の地質構造図	92
図 50	池 14・石組 22 石材の岩石種類分布と据え付け図	95

表 目 次

表 1	鳥羽離宮関係略年表	8
表 2	調査一覧表	16
表 3	立会調査一覧表	18
表 4	軒瓦の分布グラフ	36
表 5	軒瓦 HH1 型式の叩き文の比率	40
表 6	播磨系丸瓦グラフ	43
表 7	播磨系・讃岐系平瓦グラフ	44
表 8	出土瓦一覧表	64
表 9	遺構別瓦出土点数表	65
表 10	軒丸瓦計測表	67
表 11	軒平瓦計測表	71
表 12	土製円塔計測表	75
表 13	仏教遺物・木製品計測表	76
表 14	金属製品計測表	77

表 15	錢貨計測表		78
表 16	調査地一覧		79
表 17	第 79 次調査	Y674 ライン上木本分析結果.....	90
表 18	第 79 次調査	Y674 ライン上草本分析結果.....	91
表 19	第 81 次調査	池 植物遺体分析結果	91
表 20	第 79 次調査	石材の岩石学的特徴	94

第1章 序 言

この報告書は、(財)京都市埋蔵文化財研究所が昭和56年(1981)度から平成2年(1990)度にわたって鳥羽離宮金剛心院跡で実施した18次におよぶ発掘調査・立会調査の成果をとりまとめたものである。

鳥羽離宮跡は、名神高速道路京都南インターチェンジのある京都市伏見区竹田・中島地区一帯に所在する平安時代後期の遺跡である。第1次調査は、昭和35年(1960)に当時奈良国立文化財研究所に在籍されていた杉山信三氏によって名神高速道路建設予定地内で実施された。その後、この周辺部の発掘調査は、名神高速道路の開通を期に徐々に増加した。

なかでも、昭和57年(1982)から昭和59年(1984)にかけての4年間は、名神高速道路京都南インターチェンジ南側一帯で民間による再開発が相次いだため、調査の件数・面積は急増した。これらの調査では、大規模な建物跡を始め庭園遺構などを良好な状態で次々に発見し、今までその所在地が知られていなかった金剛心院跡を明らかにすることができた。

鳥羽離宮跡の発掘調査は昭和35年7月に実施した第1次調査から平成14年(2002)4月までに146次にわたる。その間に、行政指導機関や調査組織も変遷した。行政指導については、昭和35年度から昭和44年(1969)度まで京都府教育委員会文化財保護課、その後は京都市文化観光局文化財保護課(現京都市文化市民局)があたった。調査組織については、昭和51年(1976)度までは鳥羽離宮跡調査研究所、その後は、(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施している。金剛心院跡関係の調査はすべて(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

昭和56年度実施第74次調査以降の金剛心院跡関係調査回数・住所・調査機関・調査面積などについては調査一覧表(表2)に示した。また昭和58年(1983)度から平成2年度にかけて実施した金剛心院跡の立会調査成果も併せて報告する。

以下、今回報告する発掘調査責任者、発掘担当、発掘調査関係者を列記する。

回数	年度	所長	調査担当者
第74次Ⅰ	1982	杉山信三	鈴木久男、木下保明
第74次Ⅱ	1982	杉山信三	鈴木久男、木下保明
第75次	1982	杉山信三	上村和直、鈴木久男、木下保明
第76次	1982	杉山信三	鈴木久男、木下保明、中村 敦
第79次	1982～83	杉山信三	鈴木久男、木下保明
第80次	1982～83	杉山信三	前田義明、丸川義広
第89次	1983	杉山信三	長宗繁一、前田義明
第90次	1983	杉山信三	長宗繁一、前田義明
第92次	1983～84	杉山信三	前田義明、堀内明博、鈴木久男
第97次	1984	杉山信三	吉崎 伸、鈴木明博
第99次	1984	杉山信三	前田義明、堀内明博

第100次	1984	杉山信三	辻 純一
第101次	1984	杉山信三	中村 敦、辻 裕司
第102次	1984～85	杉山信三	吉崎 伸、鈴木久男
第103次	1984～85	杉山信三	堀内明博、前田義明
第106次	1985	杉山信三	堀内明博、吉崎 伸
第107次	1985	杉山信三	鈴木久男、前田義明
第109次	1985	杉山信三	鈴木久男、前田義明
立会調査			
次数	年度	所長	調査担当者
1	1985	杉山信三	家崎孝治
2	1985	杉山信三	百瀬正恒、磯部 勝
3	1984～85	杉山信三	磯部 勝
4	1985	杉山信三	百瀬正恒
5	1987	杉山信三	磯部 勝
6	1990～91	杉山信三	鈴木久男、綱 伸也、磯部 勝、百瀬正恒

本調査報告書の作成にあたっては主に以下の職員が分担した。

原稿執筆 第1章 前田義明
第2章 前田義明
第3章 前田義明
第4章 前田義明
第5章 前田義明
第6章 1 鈴木久男 2 前田義明
付章1 伊東史朗（文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官）
付章2 1 岡田文男（現京都造形芸術大学）
2 橋本清一（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）
付章3 川上 貢

編集作業 川上 貢が指導し、鈴木久男・前田義明があたった。

製 図 櫻井みどり・能芝妙子・宮下則子

復元作業 村上 勉・出水みゆき

写真撮影 村井伸也・幸明綾子・牛嶋 茂（現独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所）

保存処理 岡田文男・ト田健司・大槻明義・竜子正彦

調査中および報告書作成にあたっては、以下の方々からご指導、ご助言を頂いた。記して感謝申し上げます。（敬称略） 伊東史朗、市川三次、牛川喜幸、岡本東三、黒崎 直、河原純之、
橋本清一、村岡 正、森 蘊、安原啓示

地元協力者 阿野益太郎、小山益一、斉藤亮秋、高木清一、林 芳造、平塚良一、福井秀雄、
山内庄太郎、山内芳高、山内義嗣、山田亀次、山本伝次

以降徐々に明らかになってきた。今までの調査で確認したもっとも古い時期の遺構は、第102次調査で検出した縄文時代晩期の土層である。弥生時代では、中期・後期の溝や土壌から土器、石器、木製品などが多数みついている。古墳時代では、円筒埴輪や形象埴輪が出土する古墳や土壌墓、竪穴住居などが数多く発見され、かなり大規模な集落が営まれていたことが想像される。飛鳥・奈良時代の遺構・遺物は認められるがその数は少ない。

都が長岡京から遷都されると、この地は平安京への玄関口ともいえる場所に変貌する。特に平安京と瀬戸内を結ぶ水路・陸路が交差する地となる。また、水閣なども営まれたこともあり、平安時代中期頃の遺構・遺物なども数箇所で見られている。

鳥羽離宮の造営は11世紀後半に着手され院政の舞台ともなったが、13世紀中頃からあまり使用されなくなり徐々に荒廃して行ったらしい。14世紀前半以降、鳥羽離宮の名は史料にみられなくなる。時期は特定できないが、離宮内の建物や施設は荒廃し、園池も徐々に埋まり水田となった。

2 鳥羽離宮の沿革

鳥羽離宮造営の地は、平安京九条大路から南へ約3km離れ、交通の要衝で水利にも恵まれた景勝地であった。鳥羽離宮の造営は11世紀後半から12世紀中頃にかけて、白河天皇と鳥羽天皇によって約70年間継続された。

離宮は広大で敷地内には、南殿・北殿・泉殿・馬場殿・東殿・田中殿などの御所と証金剛院・勝光明院・成菩提院・安楽寿院・金剛心院などの御堂が営まれた。さらに、御所や御堂の周辺には様々な意匠の池を中心とした庭園も造られた。その主な御所と御堂の造営について概要を述べる。

離宮の造営は応徳三年(1086)の中頃、白河天皇による院政が開始される直前に着手された。離宮造営の有様を記したことで著名な『扶養略記』^{註2} 応徳三年十月二十日の条には「公家九条以南鳥羽山荘に新たに後院を建つ。凡そ百余町をトす。近習の卿相、侍臣、地下、雑人等各家地を賜う。舎屋を造営すること宛ら都遷りの如し。讃岐守高階泰仲、御所を作るにより、巴に重任の宣旨を蒙る。備前守藤原季綱同じく以て重任す。山荘を献ずる賞なり、五畿七道六十余州皆共に課役す。池を掘り山を築き、去る七月より今月に至る。其の功未だ了らず。…池広

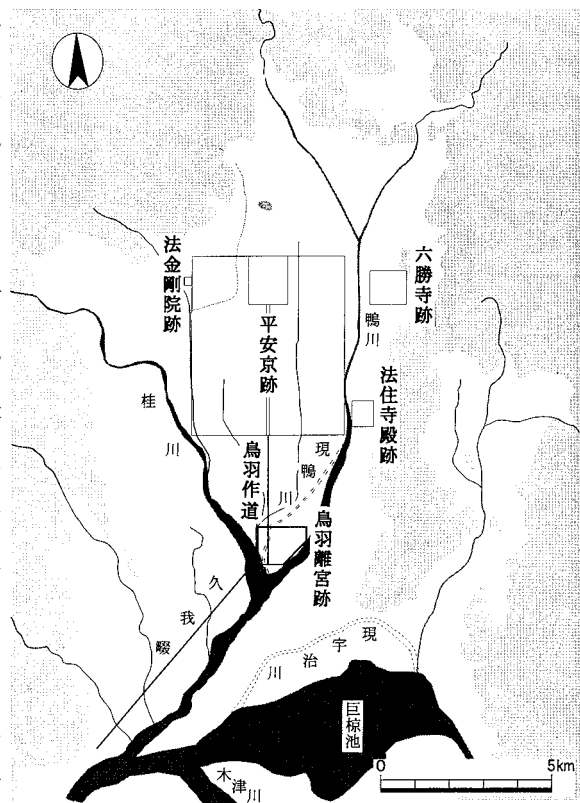


図2 鳥羽離宮跡位置図

さ南北八町、東西六町、水深さ八尺有余、ほとんど九重の淵に近し」とある。

鳥羽離宮は白河天皇の後院として造営され、その面積は百余町と広大であった。土地は備前守藤原李綱が寄進し、御所は讃岐守高階泰仲が造進し、庭の池や築山は諸国の課役によって造られた。また、近習、侍臣、地下、雑人などにも土地が与えられ舎屋を建てたため、その様子はさながら都遷りのようであったと述べている。この様子は、鳥羽離宮に最初に造営された御所である南殿造営のもようを述べたものであるが、いかに大規模な造営であったかが想像される。

白河天皇が初めて鳥羽離宮に行幸したのは翌年の寛治元年（1087）二月五日のことである。^{註3}

承德二年（1098）には閑院の建物を移築し北御所を造営し、先の御所は南殿、新御所は北殿と呼ばれた。鳥羽離宮内には後年いくつかの御堂が営まれるが、康和三年（1101）南殿に初めて証金剛院が造営された。^{註4}

天仁元年（1108）六月三日に白河法皇は東殿に三重塔を建立する地を訪ねられている。その後、白河法皇は東殿に3棟の棟を営まれた。天仁二年（1109）八月十八日東殿に三重塔供養、次いで天永二年（1111）三月十一日東殿に多宝塔供養、天永三年（1112）十二月十九日東殿に多宝塔を供養されている。ここまでが白河法皇による離宮の造営である。^{註5}^{註6}^{註7}^{註8}^{註9}

大治四年（1129）七月七日に白河法皇は三条室町第で崩御された。そして二年後の天承元年（1131）に、白河法皇の遺言により遺骨を天仁二年に供養した三重塔におさめ山陵とした。これが現在の白河天皇陵（成菩提院陵）である。鳥羽上皇は、白河法皇が崩御された三条室町第の西対を移築し九体阿弥陀堂（成菩提院）として供養している。九体阿弥陀堂は御陵に近接して建立されたが、『長秋記』には鳥羽殿が水難の地であるため成菩提院の法号を決める際、浄菩提院の「浄」の字を「成」に改めたことを記している。^{註10}^{註11}^{註12}

続いて鳥羽上皇は勝光明院の建立に着手される。造営を押し進めた源 師時が記した『長秋記』に、その様子が詳しく著されている。長承三年（1134）四月十九日に阿弥陀堂の立柱・上棟が行われ、保延元年（1135）になると作庭に着手、保延二年（1136）三月二十三日に宇治平等院阿弥陀堂を模した阿弥陀堂が供養された。ほぼ同じ頃に、宇治平等院経蔵を模した宝蔵の造営が始められ、保延三年頃には完成したらしい。^{註13}^{註14}^{註15}

鳥羽上皇は、保延三年（1137）十月十五日に安楽寿院を、保延五年（1139）二月二十二日に三重塔、保延六年（1140）十二月十二日に炎魔天堂を供養した。さらに鳥羽法皇は、久安三年（1147）八月十一日に安楽寿院の南に九体阿弥陀堂を供養している。なお、安楽寿院は鳥羽離宮衰退後大きな変遷を遂げながらも現在にその法灯を伝えている。^{註16}^{註17}^{註18}^{註19}

仁平三年（1153）鳥羽法皇は金剛心院の造営に着手される。同年四月二十日に木作始め、同年十月十八日に立柱・上棟が行われた。翌久寿元年（1154）七月二十九日には新造された御所（田中殿）が完成、八月七日には金剛心院の供養の習礼や御堂法名（金剛心院）が定められた。そして、二日後の八月九日に金剛心院の供養が執り行われた。金剛心院はその位置や建物の規模、荘厳などについて豊富な史料がある。それによると金剛心院の九体阿弥陀堂は備後守家明が造進し、播磨守頼親が釈迦堂を造進したことが判る。^{註20}^{註21}^{註22}

安楽寿院には久寿二年（1155）に不動明王堂が供養される。^{註23}保元元年（1156）七月二日、鳥羽法皇は安楽寿院で崩御し、同日に安楽寿院境内の三重塔（安楽寿院陵）に葬られた。^{註24}この後もまもなく、保元の乱（1161）と平治の乱（1159）が起り武士の時代へと進む。

応保元年（1161）に北殿が焼亡し、^{註25}仁安元年（1166）に再建されるが、鳥羽離宮は、^{註26}この後修理は行われるものの、新しく堂舎が造営されることはなく衰退して行く。

註1 『安楽寿院古文書』 康治二年八月十九日条

註2 『扶養略記』 応徳三年十月二十日条

註3 『百鍊抄』 寛治元年二月五日条

『兵範記』 保元元年七月二日条

『中右記』 寛治元年二月五日条

註4 『中右記』 承德二年四月二日条・十月二十六日条

『百鍊抄』 承德二年十月二十六日条

註5 『百鍊抄』 康和三年三月二十九日条

『殿 暦』 康和三年三月二十九日条

註6 『中右記』 天仁元年六月三日条

註7 『殿 暦』 天仁二年八月十八日条

註8 『中右記』 天永二年三月十一日条

註9 『中右記』 天永三年十二月十九日条

註10 『中右記』 大治四年七月七日条

註11 『長秋記』 天承元年七月九日条

『百鍊抄』 天承元年七月九日条

註12 『長秋記』 天承元年七月八日条

註13 『長秋記』 長承三年四月十九日条

註14 『長秋記』 保延元年七月八日条

註15 『中右記』 保延二年三月二十三日条

註16 『百鍊抄』 保延三年十月十五日条

註17 『百鍊抄』 保延五年二月二十二日条

註18 『百鍊抄』 保延六年十二月十二日条

註19 『百鍊抄』 久安三年八月十一日条

註20 『兵範記』 仁平三年十月十八日条

註21 『台 記』 久寿元年七月二十九日条

『兵範記』 久寿元年七月二十九日条

註22 『台 記』 久寿元年八月九日条

『兵範記』 久寿元年八月九日条

註23 『百鍊抄』 久寿二年二月二十七日条

『兵範記』 久寿二年二月二十七日条

註24 『百鍊抄』 保元元年七月二日条

註25 『園太暦』 応保元年正月七日条

註26 『兵範記』 仁安元年十一月七日条

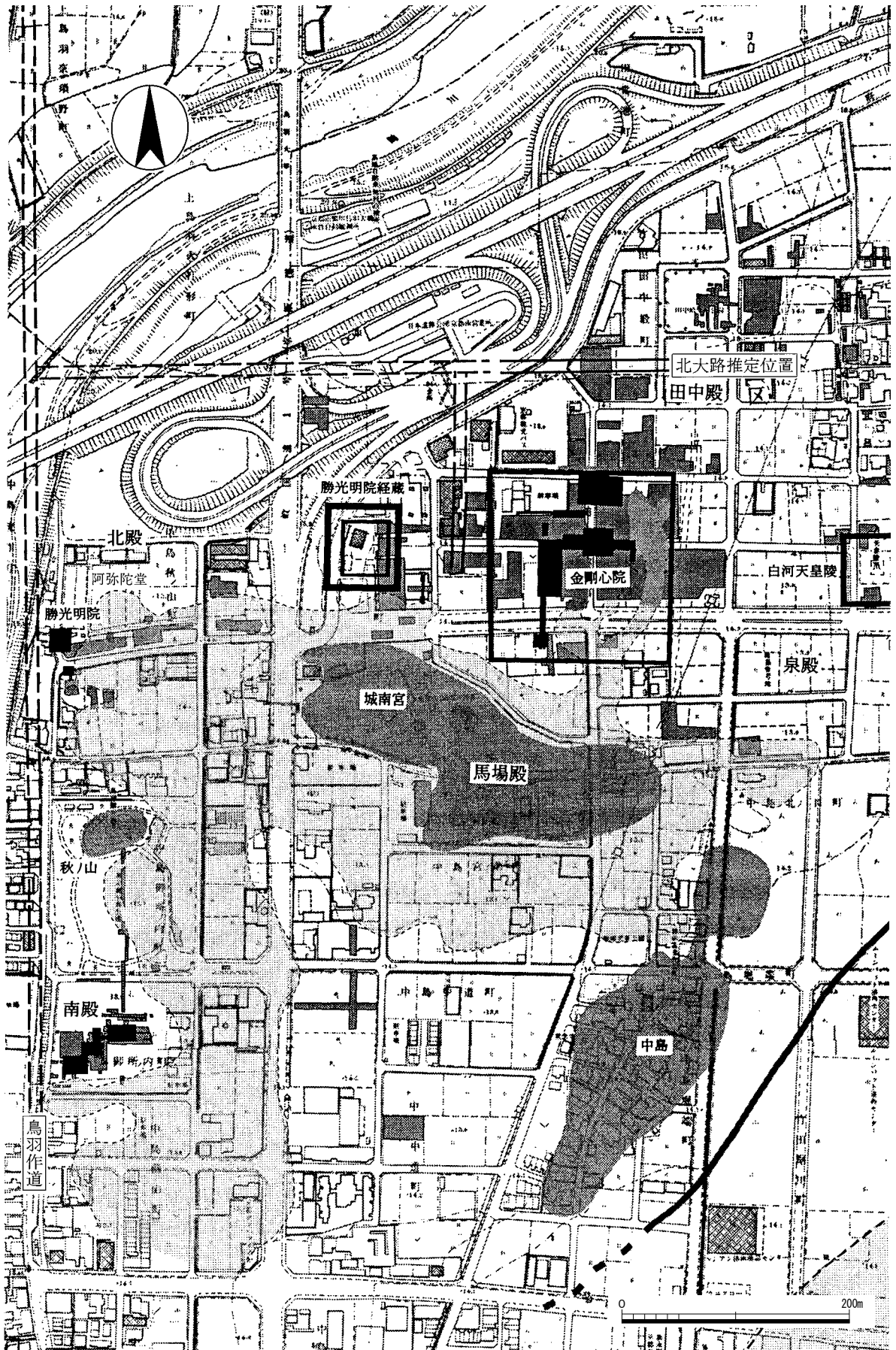


図3 鳥羽離宮金剛心院跡周辺主要遺構配置図 (1:5,000)

表 1 鳥羽離宮関係略年表

年号	西暦	記事	文献
応徳 三年 十月 二十日	1086	白河天皇、洛南鳥羽に鳥羽殿の造営、都移りのごとし	扶桑略記
寛治 元年 二月 五日	1087	白河上皇初めて鳥羽離宮へ行幸	中右記、百鍊抄
寛治 四年 四月 十五日	1090	鳥羽殿馬場で競馬	中右記
嘉保 二年 八月 二十八日	1095	白河上皇、鳥羽殿において前栽合わせ	中右記、古今著聞集
永長 元年 六月 三日	1096	白河上皇、鳥羽殿以南伏見以北を院領とする。	中右記
承德 二年 四月 二日	1098	閑院の舎屋を鳥羽殿に移す	中右記
承德 二年 十月 二十六日	1098	北御所（北殿）の造営が成り、白河上皇が移る	中右記、百鍊抄
康和 三年 三月 二十九日	1101	白河法皇、鳥羽御堂、（証金剛院）を供養する	百鍊抄、殿暦
康和 四年 三月 十八日	1102	白河法皇、五十賀	中右記
長治 二年 五月 十四日	1105	鴨川、桂川が氾濫し、鳥羽殿が浸水する	中右記
天仁 元年 三月 二十三日	1108	三重小塔、供養	中右記
天仁 元年 六月 三日	1108	白河法皇、東殿で塔の場所を見学	中右記
天仁 二年 八月 十八日	1109	白河法皇、鳥羽御塔を供養する。	殿暦
天永 二年 三月 十一日	1111	白河法皇、鳥羽殿御塔を供養する。	中右記
天永 三年 十二月 十九日	1112	白河法皇、鳥羽東御所で多宝塔を供養する。（合わせて3基）	中右記
永久 元年 八月 二十一日	1113	大風雨で鳥羽殿の築垣が崩れる	殿暦
大治 五年 十二月 二十六日	1130	鳥羽泉殿、寝殿を建てる	長秋記
天承 元年 七月 八日	1131	泉殿内に九体阿弥陀堂（成菩提院、元の三条殿西対）が供養される	長秋記、百鍊抄
天承 元年 七月 九日	1131	白河法皇の遺骨を香隆寺から鳥羽殿三重塔に移す	百鍊抄
長承 三年 四月 十九日	1134	鳥羽御堂（勝光明院）の上棟が行われる	中右記
保延 元年 七月 八日	1135	鳥羽御堂（勝光明院）の造園に着手	長秋記
保延 二年 三月 二十三日	1136	鳥羽御堂（勝光明院）の落慶供養、宇治平等院を写す	中右記、本朝続文粹
保延 三年 十月 十五日	1137	鳥羽上皇、鳥羽東殿御堂安楽寿院を供養	百鍊抄
保延 五年 二月 二十二日	1139	鳥羽上皇、鳥羽東殿の三重塔を供養	百鍊抄
保延 六年 十二月 十二日	1140	鳥羽上皇、鳥羽殿内に炎魔天堂を供養	百鍊抄
久安 元年 十二月 十七日	1145	鳥羽法皇、鳥羽東御所（安楽寿院）に移る	台記
久安 三年 八月 十一日	1147	安楽寿院の南に九体阿弥陀堂を供養	百鍊抄
仁平 二年 三月 七日	1152	鳥羽法皇、五十賀	兵範記
仁平 三年 十月 十八日	1153	鳥羽新御堂（金剛心院）が上棟	兵範記
久寿 元年 七月 二十九日	1154	鳥羽新御堂（金剛心院）御所造営成り、鳥羽法皇が移る	兵範記、台記
久寿 元年 八月 九日	1154	鳥羽金剛心院供養	兵範記、百鍊抄
久寿 二年 二月 二十七日	1155	安楽寿院の不動明王堂を供養する	兵範記、百鍊抄
保元 元年 七月 二日	1156	鳥羽法皇、安楽寿院にて崩御	百鍊抄、兵範記
保元 元年 七月	1156	保元の乱	
平治 元年 十二月	1159	平治の乱	
応保 元年 正月 七日	1161	北殿焼亡	園太暦
仁安 元年 十一月 六日	1166	北殿新造	兵範記
嘉応 二年 八月 八日	1170	大風により、鳥羽殿の北楼門が倒れる	百鍊抄
治承 三年 六月 二十八日	1179	後白河上皇、修理後の鳥羽南殿に渡御	玉葉
治承 三年 十一月 二十日	1179	後白河法皇、鳥羽殿に幽閉	山槐記
建仁 元年 四月 十九日	1201	後鳥羽上皇、鳥羽南殿修理後初めて行幸	猪隅関白記
承久 三年 五月	1221	承久の乱	
承久 三年 七月 十三日	1221	後鳥羽上皇、鳥羽より隠岐国に配流	吾妻鏡
安貞 元年 三月 三十日	1227	鳥羽堤を築き、鳥羽を修理	明月記
仁治 三年 七月 一日	1242	鳥羽勝光明院、焼亡	百鍊抄
建長 二年 七月 二十七日	1250	後嵯峨上皇、鳥羽北殿に移る	百鍊抄
天正 十三年 十一月 二十一日	1585	豊臣秀吉、安楽寿院に五百石の寺領を与える	安楽寿院文書

第3章 調査経過と調査概要

1 調査経過

鳥羽離宮跡における最初の現地調査は、名神高速道路建設計画が発表された昭和33年(1958)に当時奈良国立文化財研究所に在籍されていた森 蘊氏^{註1}によって実施された地形測量である。この時に実測された範囲は、東西1,500m、南北1,800mにもおよんでいる。その地形図には、史料などにみられる主な殿舎や道路などの位置が具体的に示された。金剛心院跡についても示されているが、その位置はほとんど誤っていない。

発掘調査は、杉山信三氏によって昭和35年(1960)春に第1次調査^{註2}が、同年の秋には第2次調査が実施され金剛心院と関係する田中殿の遺構がこの時に発見された。昭和53年(1978)から昭和55年(1980)にかけて実施した第43次・第45次・第65次調査で発見した南北方向の雨落溝や礎石建物などを、調査当時は金剛心院の九体阿弥陀堂ではないかと推定していた。また、第39次調査で検出した南北方向の溝も金剛心院に關係する遺構と考えた。しかしながら、周辺部での発掘調査が進展するにしたがって、先に九体阿弥陀堂と考えた遺構は北殿に造営された勝光明院経蔵であることが徐々に判明してきた。

今回報告する遺構を金剛心院跡に伴うものではないかと考えるようになったのは、第75次調査頃からである。そして、ほぼ金剛心院跡と確定できるようになったのは第109次調査からである。以下、年度ごとに調査成果の概要を簡単にまとめて記述する。

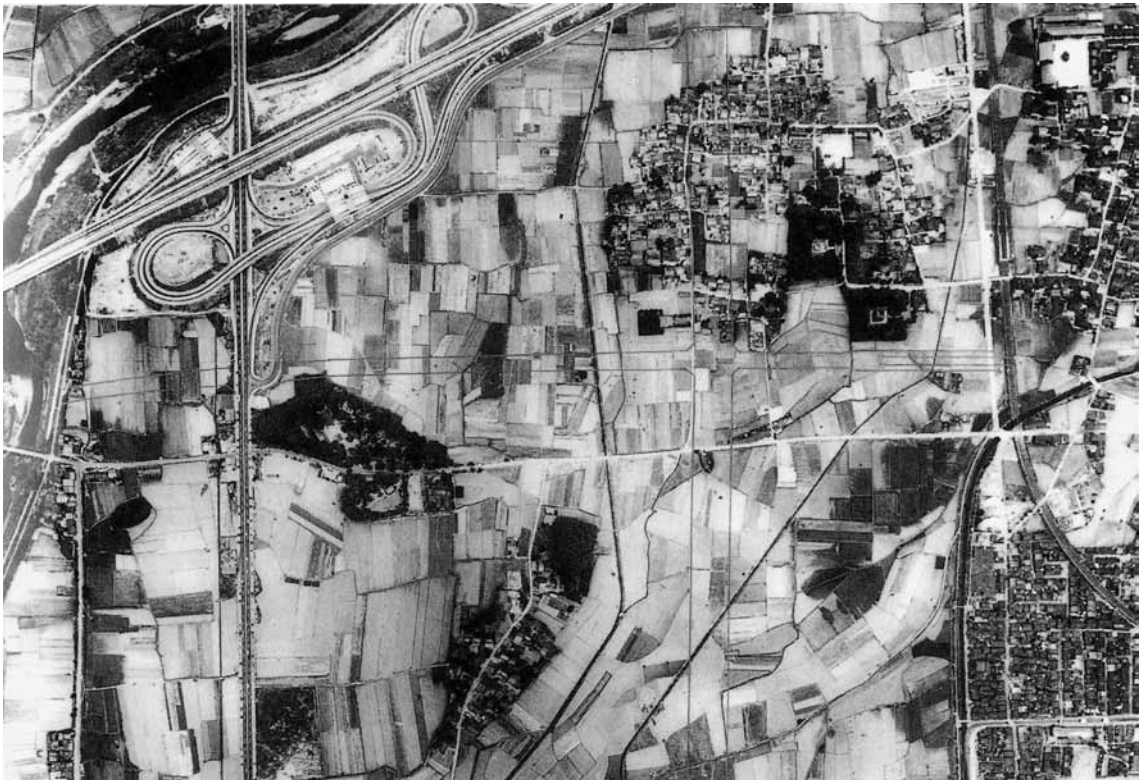


図4 区画整理以前の鳥羽離宮跡航空写真(1965年)

2 調査概要

1) 1981 年度の調査

第 74 次調査

金剛心院跡で最初に実施した調査である。第 74 次調査は第 39 次調査の東に隣接した水田で、三箇所調査区を分けて実施した。東側の調査区は第 75 次調査地に接した調査区となった。鳥羽離宮関係の遺構は南北方向の溝（溝 38・39）や瓦溜（土壌 64）、下層では古墳時代の竪穴住居を検出した。南北方向の溝は瓦が多く出土しているが、当初は溝の性格が不明であった。その後、周辺の調査が進み建物が多数検出された結果、金剛心院の西を限る築地塀の側溝と特定するに至った。



図 6 土壌 64(南から)
(第 74 次調査)

2) 1982 年度の調査

第 75 次調査

第 75 次調査区は、第 74 次調査の東側調査区のすぐ東に位置する。検出した遺構は、建物基壇（建物 3）の一部・礎石列（建物 9）・礎石据付痕跡（建物 12）・雨落溝（雨落溝 58・59・60）などである。調査区内で完結するものは小規模建物（建物 12）と廊（建物 10・11）と思われる細長い建物である。他の遺構は南側や東側の調査区外に展開し、この調査区では規模や柱間を確定できなかった。また、中央部で礎石を持った礎石据付穴と雨落溝を検出したが、削平されたのか礎石据付穴が不明な箇所がある。調査区の西方では盛土（築山 67・68）を二箇所検出したが、その性格を建物基壇と推定した。

第 76 次調査

第 75 次調査の北側に位置し、調査区の南端で東西方向の溝 31 を検出した。溝から北側は中世以降の耕作溝が多数あるだけで、鳥羽離宮に関係する遺構は検出できなかった。この溝が築地に伴う側溝になるか否かは不明であるが、金剛心院の北を限る溝であると推定した。

第 79 次調査

第 75 次調査の東側に位置する。第 75 次調査地からのびる亀腹状基壇（建物 1・3）を検出した。2 棟の建物は共に東西棟で南北に並立し、廊（建物 4）で連結しているが、建物基壇は、まったく異なる工法を用いている。北方亀腹状基壇（建物 3）は土を盛り上げただけの単純な亀腹状基壇であるが、南方亀腹状基壇（建物 1）はこれまで東殿や北殿の経蔵で検出している川原石を積み上げた頑丈な工法を用いた基礎地業を行っている。北方亀腹状基壇は上部が削平を受けたと思われる、柱痕跡が認められないが、基壇の構築からみて寝殿に想定される。南方亀腹状基壇の礎石は残存していないが、花崗岩製の礎石が風化し砂状となって残っており、その位置が判明した。柱間は身舎が二間三間で^{注 3}庇と孫庇が四方にめぐ^{注 3}る。金剛心院に関する史料に釈迦堂が「瓦葺二階三

間四面堂」^{注4}と明記されており建物の規模が一致した。また、この建物群の東側には庭園（池 14）が設けられていることが明らかになった。調査区の南半、建物 1 の東面は景石を多用し荒磯風の意匠に仕上げ（石組 22）、北半の建物 3 近くでは玉石を敷いた洲浜 21 としている。

第 80 次調査

調査地は金剛心院跡の西側にあたり、寺域の西を限る施設の存在が予想された。調査は当初、調査地の西半部から開始し、その後反転して東半部も調査した。西半部は金剛心院跡から西に外れている調査区にあたり、溝（溝 38・39）を 2 条検出した。溝は南北方向に平行して通り、西側の溝 39 は途中で止まる。東側の溝 38 は西側の溝 39 を囲うように直角に西へ折れ曲がる。第 80 次調査の北側の第 74 次調査でも、連続する溝を 2 条検出しており、金剛心院跡の西側を南北に通る道路の側溝とも考えられる。東半部では、南北方向に拳大の石を敷き詰めた遺構が検出された。これは単位を持って何層にも積み重ねられていた石敷で、建物の基礎地業と思われる。両側には側溝（溝 32・33）を伴うことから、金剛心院跡の西側を限る築地遺構（築地 13）と考えられる。東側溝をまたぐように掘立柱の柱穴（柱列 46）が並び、門や橋の施設とも考えられる。また築地地業の下部からは、灰釉陶器の壺（図 21）を埋納した地鎮祭祀の跡（地鎮 49）を発見した。

下層では、古墳時代前期の竪穴住居 1 棟、後期の竪穴住居 5 棟が検出され、鳥羽遺跡の集落にあたることが判明した。

3) 1983 年度の調査

第 89 次調査

第 76 次調査の東側、第 79 次調査の北側にあたり、金剛心院跡の北側にあたる。調査区の南端部では東西方向の溝 31 を検出した。その溝に接して掘立柱の柱穴を 4 基（柱列 48）並んで検出した。溝にかかる橋の可能性がある。柱列の北側は中世以降の耕作溝が多数みられるのみで、平安時代の遺構は確認できなかった。溝 31 は第 76 次調査で検出したものと同じで、溝から北では金剛心院に関連する遺構はみられず空地を示していた。そのため、溝 31 は金剛心院の北を限る溝と想定した。

第 90 次調査

第 89 次調査の東隣に位置する調査区である。第 76 次・89 次調査と同様に、調査区の南端で東西溝 31 を検出した。この結果、調査で明らかになった溝の総延長は 75m となる。溝 31 に、築地塀が伴うかどうかについては、築地想定位置が現在の道路内に位置するため確認していない。第 89 次調査と同様に溝より北側では離宮に関わる遺構は検出しておらず中世以降の耕作溝を確認しただけである。

下層では弥生時代の流路や古墳時代の竪穴住居、方墳、土墳墓などを多数検出している。

第 92 次調査

調査区は第 79 次調査地の南側にあたる。遺構確認を目的とした試堀調査区を 5 箇所設定した。その結果、第 75 次調査や第 79 次調査でみつかった建物、園池、景石などの存在が各調査区で判明した。また園池は当初の予想より複雑な形状を呈することが判った。この調査は試堀調査であっ

たため、遺構確認後直ちに埋め戻した。

4) 1984 年度の調査

第 97 次調査

金剛心院跡で実施した発掘調査の中で、最大規模の調査面積であった。調査対象地の西半部は、試掘調査（第 92 次調査）を実施し遺構の存在を確認している。第 75 次調査と第 79 次調査で確認した建物 1 の南辺部と建物 1 から東へのびる建物 6 に接して池 14 を検出した。建物 1 はこの調査によって南北の規模が確定した。池 14 は建物 6 周辺では荒磯風の石組 23 であるが、その南側は景石をまばらに配し、対岸の東岸には滝組 18 を設ける。また、建物 1 南側には別の池 15 が展開する。長方形を呈し、底が浅く異質な池である。調査区の東方には南北方向の溝 34 が検出された。この溝から滝組へ水を落としている溝 63 も検出した。また、この溝より東には遺構が検出できず、金剛心院の東の境界と思われる。建物周辺では土壇 44 や瓦溜（土壇 43）を検出しており、土壇 45 は景石を据え付けた痕跡と推定した。

下層では古墳時代前期の竪穴住居を検出している。また、滝石組みの周辺部から古墳時代の組み合わせ式石棺の一部が出土した。

第 99 次調査

調査地は金剛心院跡の西端部、第 80 次調査の南側に位置する。第 80 次調査と同じように築地遺構（築地 13）を検出した。両側に側溝（溝 32・33）を伴い、拳大の石を数段に突き固めた地業を確認した。第 80 次調査と合わせると全長約 50m となる。

下層では古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴住居 5 棟を検出している。

第 100 次調査

調査地は新城南宮道の南に位置し、城南宮境内の北側にあたる。掘込地業を伴う建物 8 を検出した。花崗岩の礎石二箇所と礎石抜取穴を検出し、金剛心院の建物 1 などの中心的な建物との関係や礎石の配置からみて、南門と推定した。なお、門に取り付く築地遺構などは認められなかった。

第 101 次調査

調査地は、第 100 次調査の西隣に位置する。当初、南北方向に幅 5m の調査区を設定し、その後、遺構の広がりを確認するため部分的に拡張した。柱跡を予想して拡張したために変則的な形の調査区となった。調査の結果、建物 1 棟（建物 7）と溝 2 条（溝 35・36）を検出した。建物は、平面形から一間四面堂と推定した。また、2 条の溝は、金剛心院の南限を示すと考えた。

第 102 次調査

調査地は第 79 次調査の東、第 97 次調査の北に位置し、池 14 の検出が予想された。調査の結果、園池北岸は北から南へ半島状（出島 19）に張り出し、川原石を並べた船入状（船入 20）の意匠や景石を点々と配していたことが判った。北東部では水を引くための導水路と思われる溝 40 があつた。この調査区と第 79 次・97 次調査で検出した園池（池 14）の形状は南北に細長い弓状を呈する。

下層では縄文時代晩期の土壇、弥生時代後期から古墳時代前期の流路や竪穴住居（図 7）、古墳時代後期の方墳、平安時代中期の木棺墓（図 8）・溝を検出した。古墳時代前期の流路内から



図7 古墳時代の堅穴住居（北から）
（第102次調査）

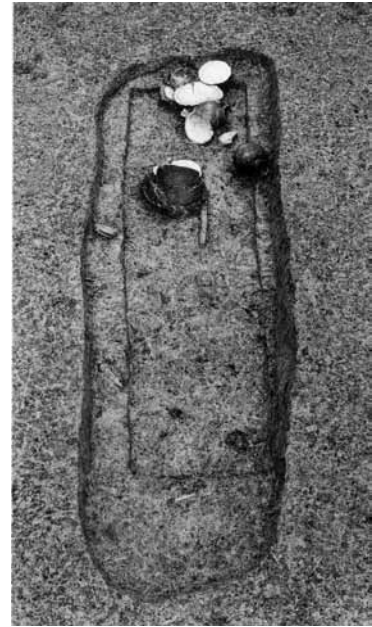


図8 平安時代中期の木棺墓
（第102次調査）

は、多量の土器が投棄された状態で出土している。土器は庄内式から布留式併行期が中心をなし、胎土に角閃石を含む河内産や東海系の土器も出土している。方墳は主体部が遺存していないが、木棺直葬と思われる。また、平安時代中期の木棺墓には銅鏡・刀子・土器などが副葬されていた。

第103次調査

調査地は第74次調査の北方に位置し、金剛心院の寺域西側に隣接する調査区である。当該期の遺構は南北方向の溝（溝37・38）を2条検出したにとどまるが、第74次調査と第80次調査で検出した溝に延長する。

下層では古墳時代後期の堅穴住居、飛鳥時代の堀立柱建物を検出している。

第106次調査

金剛心院跡の北東部に位置する調査区で、第76次・89次・90次調査と同様、金剛心院北限の溝（溝31）や東限の溝（溝34）などを検出した。東限の溝は北限の東西溝よりさらに北へのびることが判明した。この調査は、小規模な建物や柵列を検出した。

下層では弥生時代中期の流路と古墳時代後期の円墳と推定される墳丘の基底部と周濠を検出した。周濠からは形象埴輪、円筒埴輪がまとまって出土したが、なかでも巫女形の人物埴輪は注目される。

第107次調査

調査地は第97次調査の南側に位置し、当初は遺構確認のための試掘調査であった。しかし調査の結果、第97次調査の池（池14）の延長遺構を検出したため、発掘調査に移行した。池の汀は北東から南西方向へのび、汀の傾斜面は約10度と緩やかである。汀線には洲浜や景石は一切認められなかった。

第 109 次調査

調査地は金剛心院跡推定地のほぼ中央に位置し、調査地の北西隅には後宮塚と呼ばれる宮内庁管轄の陵墓参考地がある。調査は敷地の南半部から開始し、その後反転して北半部を調査した。最終段階で、敷地南端に小規模な調査区を設けた。調査の結果、南北方向の建物（建物 2）、池（池 16）、井戸（井戸 30）などを検出した。第 75 次調査区南端で確認した礎石列は、建物 2 北辺の礎石であることが判明した。礎石は建物 2 の縁束になると思われ、その内側には亀腹状の盛り上がりが見られた。高い部分の礎石は認められずすべて抜き取られていたが、建物 2 は東西 4 間、南北 11 間の建物であることが判明した。第 75 次調査では縁束に近接した石組みの雨落溝 57 がめぐっていたが、この調査区では確認できなかった。また、建物 1 の南西と建物 2 の北東に別の建物（建物 5）の礎石を東西方向に検出した。

建物 2 の東、建物 1 の南では弓状に展開する池 16 がみつかった。この池は第 97 次調査の池（池 14）とは別の池である。さらに建物 2 の東側正面にあたる位置には橋（橋 17）を架けていた。建物 2 の地業は建物 1 と同様に何段にも石を積み上げた堅固なものであることも確認した。

この調査で注目される出土遺物には、鴛鴦文を飾る框の金具（図版 60）や漆と金箔を施した仏像の破片がある。また、飾金具に伴うガラス玉なども出土し、往時の様子を知る重要な資料を得た。

なお、陵墓参考地（後宮塚）は建物 2 の基壇上に所在していることが判明した。おそらくこの塚は、耕作の障害となった基壇使用の川原石を拾い集め一箇所に集積したものと思われるが、成立年代は不明である。

註 1 森 蘊 「鳥羽離宮跡の調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』京都府教育委員会 1959 年

註 2 杉山信三 『院の御所と御堂－院家建築の研究－』奈良国立文化財研究所学報第 11 冊 奈良国立文化財研究所 1962 年

註 3 『兵範記』仁平三年四月廿日条

註 4 『本朝文集』仁平四年八月九日 鳥羽天皇供養金剛心院御願文〔藤原永範〕〔願文集一〕5

表 2 調査一覧表

番号	調査次数	住所	担当者	調査機関	面積 (㎡)	文献
1	74 次 I	伏見区竹田小屋ノ内町 22、56、59-1	鈴木久 木下	1982/02/04 ～ 1982/4/10	390	a 木下保明・鈴木久男「第 74 次調査」『鳥羽離宮跡調査概要』昭和 56 年度 1982 年 b 鈴木久男・木下保明「第 74 次調査」『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』1983 年
2	74 次 II	伏見区竹田小屋ノ内町 64-3	鈴木久 木下	1982/06/01 ～ 1982/6/26	330	a 上村和直ほか「第 74 次 II・75 次・76 次・79 次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 57 年度 1983 年 b 鈴木久男・木下保明「第 74 II 次調査」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984 年
3	75 次	伏見区竹田田中殿町 42-1、竹田小屋ノ内町 63-1、64-1、66-1	鈴木久 木下 上村	1982/04/01 ～ 1982/6/17	1,764	a 上村和直ほか「第 74 次 II・75 次・76 次・79 次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 57 年度 1983 年 b 鈴木久男・木下保明・上村和直「第 75・76・79 次調査」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984 年
4	76 次	伏見区竹田小屋ノ内町	鈴木久 木下 中村	1982/06/28 ～ 1982/9/3	712	a 上村和直ほか「第 74 次 II・75 次・76 次・79 次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 57 年度 1983 年 b 鈴木久男・木下保明・上村和直「第 75・76・79 次調査」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984 年
5	79 次	伏見区竹田小屋ノ内町 66-2、67	木下 鈴木久	1982/09/17 ～ 1983/3/9	1,800	a 上村和直ほか「第 74 次 II・75 次・76 次・79 次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 57 年度 1983 年 b 鈴木久男・木下保明・上村和直「第 75・76・79 次調査」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984 年
6	80 次	伏見区竹田小屋ノ内町 55	前田 丸川	1982/09/20 ～ 1983/1/22	930	前田義明・丸川義広「第 80 次調査」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984 年
7	89 次	伏見区竹田田中殿町 29	長宗 前田	1983/06/29 ～ 1983/8/15	520	前田義明・長宗繁一「第 89 次調査」『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1985 年
8	90 次	伏見区竹田小屋ノ内町 80	長宗 前田	1983/07/12 ～ 1983/11/1	1,136	長宗繁一・前田義明「第 90 次調査」『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1985 年
9	92 次	伏見区竹田小屋ノ内町 45-1、46 ～ 48、竹田浄菩提院町 42-1	鈴木久 前田 堀内	1983/11/28 ～ 1984/1/19	590	a 前田義明・堀内明博「第 92 次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 58 年度 1984 年 b 堀内明博・前田義明「第 92 次調査」『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1985 年
10	97 次	伏見区竹田浄菩提院町 42-1、小屋ノ内町 6、26, 33, 34, 45-1 ～ 48-2	鈴木久 吉崎	1984/04/09 ～ 1984/9/4	4,860	吉崎 伸・鈴木久男「鳥羽離宮第 97 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
11	99 次	伏見区竹田小屋ノ内町 53-1, 54-1	堀内 前田	1984/06/15 ～ 1984/9/22	940	前田義明・堀内明博「鳥羽離宮跡第 99 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
12	100 次	伏見区竹田小屋ノ内町	辻純	1984/08/16 ～ 1984/8/31	348	a 辻 純一・辻 裕司・中村 敦「第 100・101 次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 59 年度 1985 年 b 中村 敦・辻 純一「鳥羽離宮跡第 100・101 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
13	101 次	伏見区竹田小屋ノ内町 44	中村 辻裕	1984/09/17 ～ 1984/10/3	267	a 辻 純一・辻 裕司・中村 敦「第 100・101 次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 59 年度 1985 年 b 中村 敦・辻 純一「鳥羽離宮跡第 100・101 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
14	102 次	伏見区竹田小屋ノ内町 68-1・2・3	鈴木久 吉崎	1984/10/01 ～ 1985/2/12	1,480	鈴木久男・吉崎 伸「鳥羽離宮跡第 102 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
15	103 次	伏見区竹田小屋ノ内町 61-2	堀内 前田	1984/10/23 ～ 1985/1/21	398	堀内明博・前田義明「鳥羽離宮跡第 103 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
16	106 次	伏見区竹田小屋ノ内町 77	堀内 吉崎	1985/02/12 ～ 1985/4/20	582	堀内明博・吉崎 伸「鳥羽離宮跡第 106 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
17	107 次	伏見区竹田小屋ノ内町 43-1・2	鈴木久 前田	1985/02/19 ～ 1985/3/2	270	a 鈴木久男「第 107 次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 60 年度 1986 年 b 鈴木久男「鳥羽離宮跡第 107 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
18	109 次	伏見区竹田浄菩提院町 79、小屋ノ内町 49	鈴木久 前田	1985/03/28 ～ 1985/9/7	1,246	鈴木久男・前田義明「鳥羽離宮跡第 109 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年

5) 立会調査

昭和 59 年 (1984) 度から平成 2 年 (1990) 度にかけて、下水道敷設工事に並行して立会調査を実施した。その結果、城南宮境内の北側においては、東西方向にのびる流路状の池を発見した。これにより、南殿・北殿そして金剛心院一帯に池が広がっていたことを証明することができた。

これらの立会調査の中でも特筆すべき成果があったのは、昭和 59 年度に実施した立会調査 (表 3-4) である。ここでは、二箇所で花崗岩の礎石 (図 9・10) を確認することができた。これらの礎石は、長径 35cm、短径 18cm 以上のもので、地表下約 1.55m で検出した。検出地点は、建物 3 (第 79 次調査) の北辺にあたり、2 個の礎石は東西方向に並んでいた。これは建物 3 に伴う礎石の一部と推定した。また、平成元年 (1989) 度の下水工事に伴う立会調査 (表 3-6) でも、二箇所で礎石 (図 11・12) を確認した。これらの礎石は建物 2 (第 109 次調査) の南側、建物 7 (第 101 次調査) との中間に位置した場所で検出したため、両者を結ぶ南北廊の礎石と判断した。



図 9 建物 3 東側礎石 (南から)



図 10 建物 3 西側礎石 (東から)



図 11 廊東側礎石 (西から)



図 12 廊西側礎石 (西から)

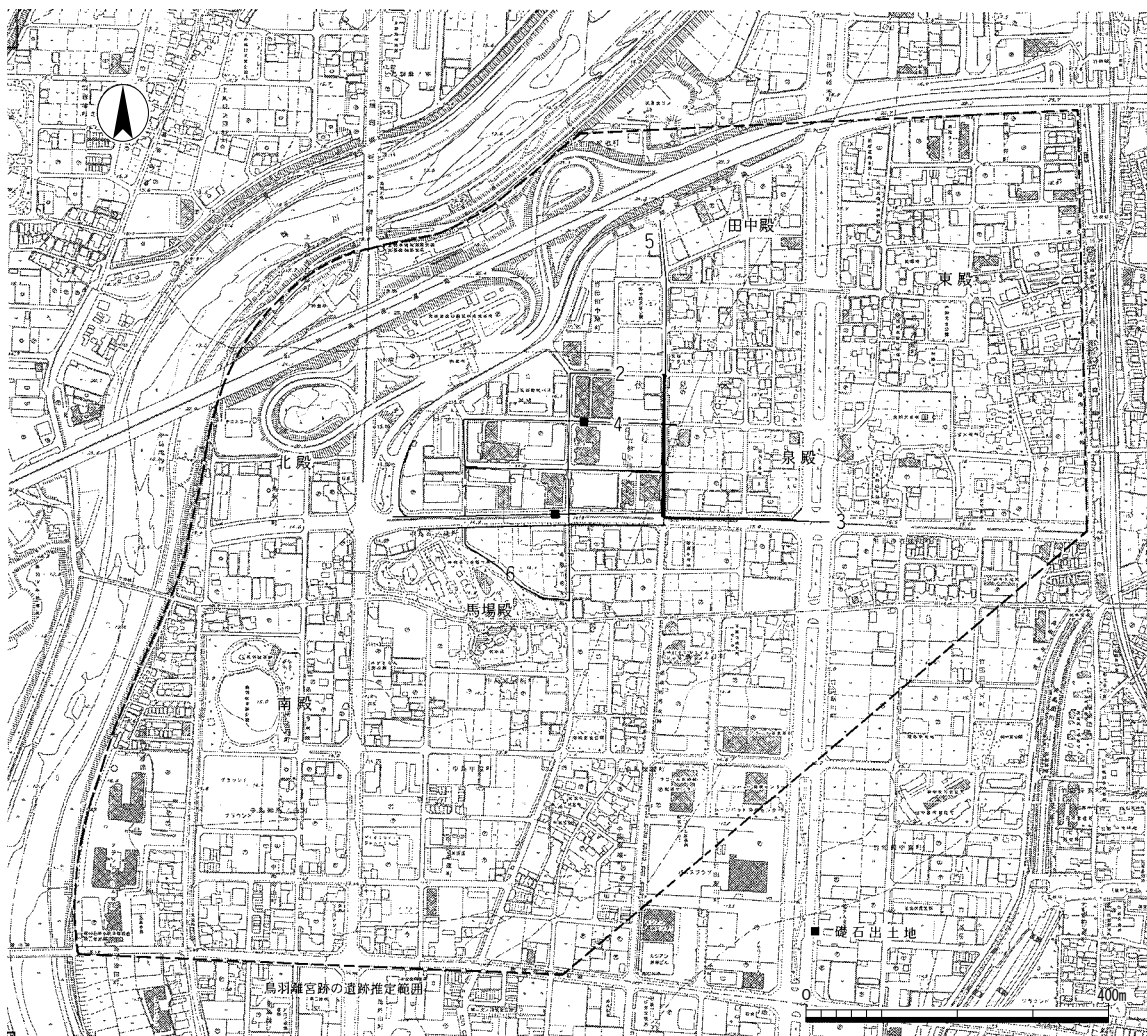


図 13 立会調査位置 (1:10,000)

表 3 立会調査一覧表

番号	調査記号	住所	担当者	調査期間	面積 (m^2)	文献
1	83TB-W-044	伏見区竹田小屋ノ内町・他	家崎	83/10/12 ~ 10/19	151	家崎孝治『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1985 年
2	84TB-G-9307	伏見区竹田小屋ノ内町	百瀬・磯部	85/01/14 ~ 03/31	692	百瀬正恒ほか『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
3	84TB-SW-035	伏見区竹田浄菩提院町・小屋ノ内町	磯部	84/11/24 ~ 85/03/09	320	磯部 勝『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
4	84TB-W-010	伏見区竹田小屋ノ内町・田中殿町	百瀬	85/01/28 ~ 02/05	155	百瀬正恒『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年
5	87TB-OG-001	伏見区竹田中島御所ノ内町・古屋ノ内町・他	磯部	87/07/15 ~ 07/28	延 300m	磯部 勝『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1991 年
6	89TB-SW-075	伏見区竹田内畑町・田中殿町・小屋ノ内町 中島宮ノ後町・宮ノ前	鈴木久・綱 磯部・百瀬	90/03/12 ~ 91/01/26	6,946	鈴木久男ほか『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1994 年

第4章 遺 跡

1 層序（図版 27・29）

調査地が広範囲にわたるため、調査区ごとにその代表的な層序を部分的に取り上げて記述する。

第 106 次調査地、第 102 次調査地は金剛心院跡の北東部にあたる。第 106 次調査区では、現代盛土層 50cm、現代耕作土 20cm、床土 5cm、時期不明の暗灰色砂泥層（以下、旧耕作土）10 ～ 15cm、その下層が遺構面となる。地表面の標高は 15.0m、遺構面の標高は 13.8m を測る。第 102 次調査区東側では、耕作土 15cm、旧耕作土 45cm、その下層が遺構面になり、池 14 や溝 40 を検出した。地表面の標高は 14.4m、遺構面の標高は 13.8m を測る。

第 75 次調査地・第 109 次調査地は寺域のほぼ中央部にあたる。第 75 次調査区では耕作土 20cm、床土 10cm、砂礫層 15cm、旧耕作土 20cm、灰褐色砂泥層 10cm、灰色砂泥層 10cm で建物遺構が検出できる遺構面となる。地表面の標高は 14.5m、遺構面の標高は 13.7m を測る。第 109 次調査区南側では現代盛土層 40 ～ 70cm、耕作土 30cm、旧耕作土 20cm で遺構面になる。地表面の標高は 14.8m、遺構面の標高は 13.8m を測る。

第 80 次調査地は寺域の西側にあたる。耕作土 15cm、旧耕作土 20cm、灰色泥砂層 20cm、茶褐色砂泥層 20 ～ 30cm、灰褐色砂泥層 10 ～ 20cm、その下層が鳥羽離宮の遺構面となる。耕作土と旧耕作土層との下部に排水用の暗渠が規則的に掘られている。地表面の標高は、14.1m、築地 13 の検出面は 13.4m である。その下層は、古墳時代の遺物を含む遺物包含層 4 層、5 層が 1m ほど堆積し地山になるが標高は 11.9m である。

第 101 次調査地は寺域の南側にあたる。耕作土 20cm、旧耕作土 20cm、灰白色泥砂層 15 ～ 20cm、灰黄色泥砂層 10cm、その下層が遺構面である。地表面の標高は 14.2m、寺城南限と考えている溝 35 は 13.3m で検出した。

ところで、寺域北限の遺構面の標高は 13.8m、南限が 13.3m であるため、北と南の高低差は約 50cm となる。また、すべての調査区において耕作土層と旧耕作土層を認め、金剛心院の廃絶後は水田として利用されていたことも判明した。なお、池 14 の東岸と西岸とでは高低差が約 1m ほどみられる。

2 遺構

金剛心院跡で検出した遺構は、建物、池、築地、井戸、溝、土壇などである。

建物は建物 1 から建物 12 まであり、そのほとんどが礎石建物である。建物 1 と建物 2 は、規模と基礎地業ともに他の建物より突出している。

金剛心院境内から少し外れた第 106 次調査では堀立柱建物を検出しているため、周辺部には堀立柱建物による雑舎が展開していた可能性がある。

園池は三箇所検出した。いずれも南半部が未調整のため正確な形状は明らかではないが、園池の意匠はそれぞれに趣向をこらしている。井戸は、池の汀線上で2基、建物基壇上で2基、計4基を検出した。汀線上の井戸2基は金剛心院が機能していた頃に成立している。

次に、遺構の規模や特徴について、建物、園池、井戸、溝、土壇、その他の順で述べる。

1) 建物

建物1（図版4・8・13・27・77・78・83～87・96・97）

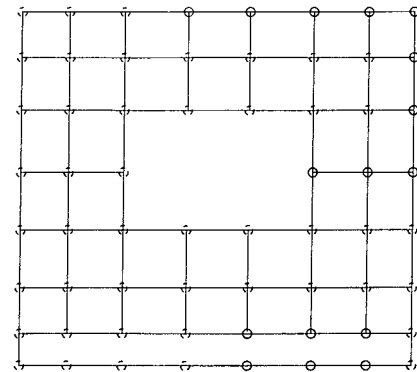
金剛心院境内の中央部北寄りに位置する。昭和35年（1960）以降に実施された土地区画整理の道路によってちょうど四分割されるため同一の建物でありながら、第75次調査では建物の北西部を、第79次調査では北東部を、第97次調査では南東部を、第109次調査では南西部を調査した。結果として道路内に位置する身舎の南側や西側部分は未調査となった。

建物1は4回にわたる調査成果から、東西（桁）22.5m、南北（梁間）21.0mに復元できる。すなわち、身舎は2間×3間で、桁行の柱間は1間が4.1m（13.7尺）の等間、梁間の柱間は1間が3.6m（12尺）である。身舎の四面には、1間が3m（10尺）の底・孫庇がめぐる。さらに南辺には、2.1m（7尺）の縁が付く。

建物は掘込地業によって地表約0.6m以上盛り上げられた低い亀腹状基壇に建てられた。礎石は、すべて後世に抜き取られていたが基壇上面には、礎石の据え付け位置を示す花崗岩の砂粒が残っていた。基壇の周縁、すなわち側柱筋から外周へ約1mの所には、凝灰岩を含む幅約0.3m、深さ0.15mの溝があることから、凝灰岩の切り石で化粧（図版87-16）をしていたと思われる。

掘込地業は、建物範囲よりやや広く東西約30m、南北約25m、旧地表から深さ0.8mほど掘り下げた後に、拳大の川原石（玉石）をぎっしりと敷き詰めた上面を粘質土で覆い丁寧に突き固め、これを交互に何十層にもわたって行っている。北東部（第79次調査）では、東西の中心約15m地点に大振りの石を南北方向に並べ、その東半部では東西方向に幅3mの短冊状ブロックが四単位ほど確認できる。単位を示すブロックの周縁は、やや大きめの細長い石を小口積みし、その内側に拳大の川原石を何層にもわたって整然と敷き並べている。各単位の断面をみると、乱暴に積み重ねた部分もあるが、ほとんどの場合は川原石を平面的に並べ、その上を粘性土で覆い突き固めている。川原石の中には、割れているものもあり、突き固めが丁寧に行われていたことが窺える。一方西半部は、南北方向に幅3mの単位があり東半部とは違った方法をとっている。

基壇上面近くでは、直径0.6～1.5m規模で石が乱れたり、花崗岩が風化し粒状になった箇所が認められたが、それらは礎石が据え付けられていた痕跡である。礎石は、地業が完成した後に堀形を設けて据え付けたのではなく、構築途中で据え付け、続けて川原石と土で基壇を構築している。



● 礎石
○ 礎石据え付け痕跡
○ 推定礎石

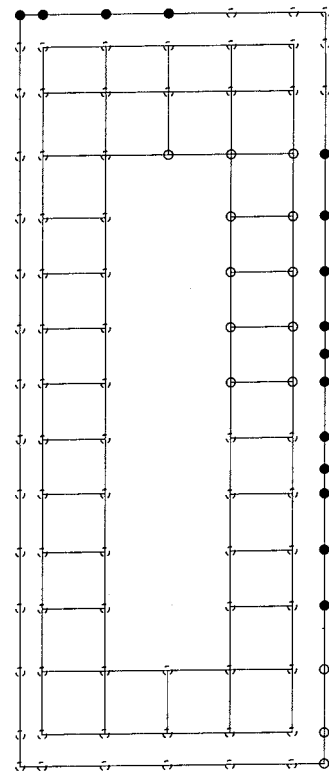
掘込地業の深さは、基壇上面の状態により一様でなかったが、もっとも良く残っていた箇所では、底部から上面までは、1.4mを測った。基壇の高さは、最高0.6mほどみられたが、礎石の据え付け状況から推定すると、約1m前後になる。

なお、建物北西角で雨落溝を一部検出しているが、本来は建物の全周囲にめぐっていたと考える。

建物2(図版4・7・9・14・79・112～115)

第75次調査では、調査区の南端で東西に並ぶ花崗岩製の礎石4個を検出した。礎石の北部には川原石を並べた雨落溝57も付属しており、建物が調査区南へ展開することは推定できたが、南側は概に道路敷きとなっていたため、その全貌は不明であった。道路を挟んだ南側の第109次調査では、調査区の西壁際で南北に延長して並ぶ礎石列を確認した。第75次調査と第109次調査の間には未調査分が残るが、両調査で検出した礎石列を連続させると、東西4間、南北12間の南北棟となることが判明した。その規模は東西が16.4m、南北が45.2mの長大な建物である。身舎は梁間2間と桁行9間で、四面に庇がめぐり、北側には孫庇が付く。身舎の梁間は4.1m(13.7尺)等間で、桁行の北端と南端は4.1m(13.7尺)、その間の柱間はすべて3.6m(12尺)に揃えている。四面の庇は4.1m(13.7尺)、孫庇は3.6m(12尺)である。東辺に幅2.1m、北辺と南辺が1.8m、西辺に1.5mの縁がめぐり、調査で検出した花崗岩製の礎石は、一般的な縁束石と異なり直径が約0.6mもあるため、屋根までのびて軒先を支える柱と縁束を兼ねた礎石と考えられる。基壇上に据えられた柱の礎石は、調査区内ではすべてが抜き取られている。縁に建てられた柱の礎石は建物の柱筋に対応して据え付けているが、身舎桁行の中央間の両側柱間には、柱筋とは別に礎石を据えている。身舎の東側中央部に設けられた階段に付属する屋根を支える柱の礎石と思われる。

建物2も建物1と同様に掘込地業を行っている。第109次調査で検出した地業を観察すると、東西方向に長い幅3mの短冊型のブロックが7単位認められる。地面を約1.2m掘り下げ、大振りの石を木口積みにして東西に並べ、その間に土と石を交互に繰り返して積み上げている。調査区北半の4列は底面を平らに掘り下げた後、幅3mで石を並べて積み上げて区画しているが、南半の3列は底面に幅0.2m、高さ0.3～0.6mの土手の境を残して、短冊型の連続する土壇を掘り下げた後、石を積み上げる。東西方向に長い幅3mの基本的な単位は維持されるが、内部はさらに細分される。このように掘込地業の最終的な形状に相違はないが、その作業手順に2種が認められることが判明した。作業集団の工法の違いがあらわれているように思われる。地業のための掘り下げ深さは約1.2m、旧



地表面から確認した基壇の上面までは0.4mあり、地業の厚さは最低でも1.6mはある。基壇は上面が削平を受けていることも含めて考えると、建物2の造営に用いられた川原石は膨大なものであったことが判る。基壇の形状は亀腹状に盛り上がるが、掘込地業の縁に沿って幅0.3～0.5m、深さ0.1mの溝がある。溝内には凝灰岩の層が散乱していることから、凝灰岩を取り除いた際の溝と想定され、基壇の縁は凝灰岩の切り石を並べ化粧をしていたと思われる。

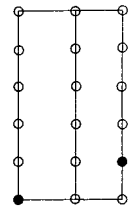
建物2の北辺と西辺の一部で川原石を並べた雨落溝が認められたが、当初は四面すべてに雨落溝がめぐっていたと考えている。屋根の軒先の出となる側柱筋と雨落溝までの寸法は2.7m(9尺)である。

建物3(図版4・5・28・75・76・80～82)

建物1と建物9の北方において土を盛り上げて整地した土壇を確認した。東西が39m、南北は18m以上の規模がある。発掘調査では、土壇上部では礎石およびその据え付け痕跡をまったく検出できず、建物の痕跡を確認できなかったが、昭和59年(1984)度の立会調査では土壇北辺部で、東西方向に並ぶ礎石を二箇所発見した。

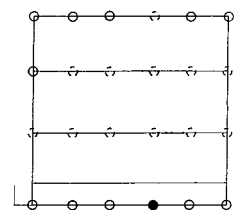
建物4(図版4・5・11・28・80・81・88・89)

建物1の北東部に接続する南北棟の建物である。その北方にある建物3と建物1を結ぶ建物と思われる。桁行5間、梁間2間で南北12mと東西6.6mである。桁行方向の柱間寸法は2.4m(8尺)等間、梁間方向が3.6m(12尺)と3.0m(10尺)である。桁行方向の柱筋は建物1の南庇と、孫庇の柱筋に揃えられている。掘込地業はみられないが、西端に石組みの雨落溝61が一部残存しているため、建物4の軒下には雨落溝がめぐり、屋根は建物1に接続していたと思われ、建物1北側の雨落溝58とも連続していたと想定した。



建物5(図版4・75・112・113)

建物1と建物2の中間に位置し、両方に接続している建物である。中央部が既存の道路敷きになるため不明な点が多いが、梁間方向は第75次調査と第109次調査の柱筋が一致することから東西建物と考えられ、それぞれの調査で北辺と南辺が検出できた。建物1の身舎柱筋の延長に桁行方向の北側柱筋と北から二列目の柱筋が対応している。このことから、身舎の柱筋が建物1の身舎と対応し、南庇が付く建物と想定すると、身舎が桁行5間、梁間2間に南庇と縁がめぐり切妻の建物と考えられる。その規模は桁行12.6m、梁間10.8mで、桁行の寸法は中央間の3.0m(10尺)以外はすべて2.4m(8尺)、梁間は身舎が3.9m(13尺)等間、庇が3.0m(10尺)に縁が1.5m(5尺)である。庇の柱筋が建物2の北庇と対応する。前面の調査はできていないが、第75次調査では掘込地業は検出していない。



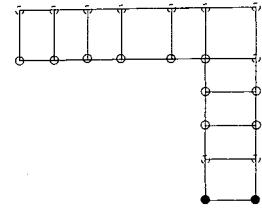
建物6(図版5・10・95・98・99・103)

建物1の東に接して東西棟が位置し、南北棟が池に面する逆L字形に折れ曲がる建物である。東西16.8m、南北13.2mである。南北棟の梁間は1間で3.6m(12尺)、桁行2.4m(8尺)等間で

南端の桁行は 3.0m(10 尺) で 4 間となる。東西棟の桁行は西から 4 間目が 3.6m(12 尺) で他と比べ広く設定され、他は 2.4m(8 尺) で統一される。

南北棟の南端の礎石は二箇所遺存していたが、花崗岩ではなくチャートで重量は約 600kg の大きな自然石を使用していた。他の礎石据え付け痕跡は

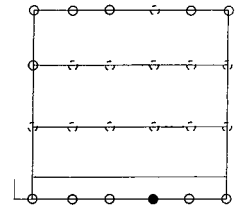
花崗岩の風化を示す砂粒がみられたため、基本的に花崗岩を用いていたと考えている。南北棟の東側に 1.5m 離れて南北方向の石列が認められた。



建物 7 (図版 7・12・72)

金剛心院跡の南西部に位置し、南限の築地塀に接して建てられた建物である。正方形の建物で中央間が 4.8m(16 尺)、両方の底が 3.6m(12 尺) の一間四面堂である。北側の側柱 2 個に礎石が遺存し、他は礎石据え付け痕跡を検出した。建物 1 と建物 2 のように緻密ではないが建物 7 も掘込地業を行って

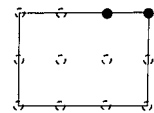
いる。検出した基壇の高さは 0.4m で、掘込地業の範囲は建物より広く、東西 13m 以上 (推定約 22m)、南北 17.5m 以上 (推定約 22m)、深さ 0.5m である。



建物 8 (図版 7・28・74)

南限築地の想定線上にあり、金剛心院跡の東西中心よりやや西寄りに位置する。第 100 次調査の南端で花崗岩製の礎石 2 個と礎石据付痕跡を検出し、掘込

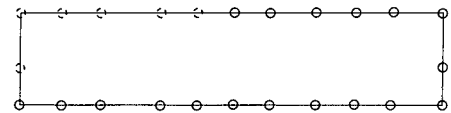
地業および整地が行われているため、門と想定した。桁行方向の礎石と礎石の間は 2.7m(9 尺) で中央間を 3.0m(10 尺)、梁間を 2.7m(9 尺) に復元できる。



建物 9 (図版 4・75)

建物 5 や建物 3 を結ぶ建物で、桁行 27.6m、梁間 6.0m の東西に長い建物である。礎石は遺存していないが、礎石据付穴と根石を検出した。梁間の柱間は 2 間で 3.3m と

2.7m、桁行の柱間は 10 間で、東から 1 間目と 4 間目そして西端が 3.0m、東から 8 間目が 3.9m、その他は 2.4m である。東 4 間目と 8 間目は幅が広く、建物 5 と結ぶ廊 (建物 10・11) がとり付く。東側は未調整であるが、北方の建物 3 に続く廊が北へのびると思われる。



建物 10 (図版 4・75)

建物 5 と建物 9 を結ぶ東側の廊である。建物 10 の東と西に雨落溝 59・60 があるため礎石据付痕跡をつないで廊に復元した。桁行方向の東と西の柱列が一致しないが、東側は 2.4m 等間で割り付けられる。梁間は 4.2m である。

建物 11 (図版 4・75・76)

建物 10 と同様に建物 5 と建物 9 を結ぶ西側の廊である。桁行方向は北端と南端が 3.6m で、他はすべて 2.4m、梁間は 3.9m である。

建物 12 (図版 4・76)

建物 2 の北で検出した南北棟の建物で、梁間 2 間、桁行 3 間の小規模な建物である。梁間 2.1m、桁行 3.6m のそれぞれ等間となる。

建物 54(図版 3)

第 106 次調査の北端で検出した掘立柱建物で、建物の北半は調査区外になる。東西 2 間、南北 2 間以上の南北棟で、柱間が 1.4 ～ 1.8m の小規模な建物である。

建物 55(図版 3・69)

建物 54 と同様に第 106 次調査で検出した小規模な掘立柱建物である。東西 1 間、南北 2 間以上の南北棟で、柱間は梁間が 1.8m、桁行は 3.0m である。建物の軸線は北に対して西へ 2 度傾いており、建物 62 や柵列 56 と同じ方位である。

建物 62(図版 3・69)

第 106 次調査の西半で検出した掘立柱建物である。身舎梁間 1 間、桁行 3 間の南北棟で、東に庇が付く。梁間の寸法は 2.4m、桁行は北から 2.8m、2.8m、2.1m、庇は 1.2m である。建物の軸線は、建物 55・柵列 56 と同じく北に対して西へ 2 度傾いており、金剛心院中心部の建物軸線とは逆である。

築地 13(図版 6・15・16・29・70・71)

第 80 次調査と第 99 次調査で南北方向の築地と側溝を検出した。金剛心院の西限の境界を示していると思われる。第 74 次調査でも南北方向の溝(溝 33)が検出されていたが、後に築地 13 の延長上にあることが判明した。築地は建物 1、建物 2 と同様に川原石を用いた掘込地業を行っている。南北方向に幅 2.0 ～ 2.5m、深さ 0.6 ～ 0.9m の溝状に掘り下げ、底に拳大の川原石を敷き並べその上に土を 10cm 程度置き、その上にまた川原石を敷き詰め突き固める。この繰り返しを 5 ～ 6 回行い、築地の基礎工事としている。掘込地業の溝の堀形は、長さ 6m をおおまかな単位として掘り下げているが、第 99 次調査区内では一様でなく、溝の食い違いがあったり溝が連続しない個所もある。また、石の分布をみても、6m 単位のほかにも 3m ごとにやや大粒の石を並べている箇所が認められる。築地幅は 2m ほどで犬走りが約 1m あり、その両側に幅 1.0 ～ 2.0m、深さ 0.4m の側溝(溝 32・33)が設けられている。これらは第 74 次・80 次・第 99 次調査区で 75m にわたって検出している。なお、東の境界線では築地の痕跡は認められなかったが、北と南の境界線では溝(溝 31・35)を確認しているため、少なくとも金剛心院の三方は溝で囲まれていた。

2) 園池および園池に伴う遺構

池 14(図版 5・74・90 ～ 93・95・100・102・104 ～ 110)

金剛心院境内の東側に位置する、南北方向に細長い池である。第 79 次・97 次・102 次・107 次調査で検出し、現在までに南北方向に約 170m にわたって調査している。池の北端は、中央部が岬状に池に突き出るため形態は「Y」字状の平面となっている。池の幅は、狭いところで約 20m、広いところでは約 40m である。深さは 0.8 ～ 1.3m であるが、洲浜や汀近くの景石など相対的な関係から、池の水位は標高約 12.6 ～ 12.8m 前後と考えている。池の汀の意匠は、場所によってそれぞれ異なり、東岸は変化せず単調で景石などはほとんどみられないが、西岸は対照的に変化に富んでいる。また池全体は、船着場 26 と滝組 18 を結んだ東西ラインで南北に大きく二分できる。この東西ラインから北半部の池は、建物 6・建物 4・建物 3 と一体化した空間を演出して

いるが、南半は導水または北殿や南殿の池と連続することを主目的としているように思われる。

第 102 次調査では、池 14 の池底に蜂巢状に掘られた土壌群（図版 107-2）を調査した。これは、後世に粘土を採取するために掘られたもので、池とはまったく無関係である。

池 15（図版 5・28・95・103・104）

建物 1 の南側、池 14 と 16 の間に位置し、幅約 10m、深さ約 0.4m で、北東から南西に細長く造られている。池南西部分は未調査であるため、規模や池 16 との関係は不明である。池底は、池 14 や池 16 と異なり全体がほぼ平坦に仕上げられている。池底の標高は 12.5m である。池の汀には、まばらに景石を据え付けているが、導水路や洲浜などは認められない。池 14 や 16 とは、規模・形状・汀の意匠など異なる点が多くみられる。これらのことから池 15 は、水生植物などを植栽していたのではないかと考えている。

なお、池の南西部の状況については、一応池 16 と接した状態に復元したが積極的な根拠はない。

池 16（図版 4・7・21・22・112・113・116・117～121）

第 109 次調査で検出した池で、建物 2 の東側、建物 1 の南西、建物 5 の南側に位置する。この池も池 14 と同様に南北方向に細長い。池の北端は、建物 1 南西角や建物 5 に近接する。池の南半部は未調査のため詳細は不明であるが、池 14 や溝 36 などと繋がると考えている。現在までに、南北 45m、東西 15m について調査している。幅は、東岸がほとんど未調査であるが立会調査などから約 15m 前後と推定している。深さは約 0.8m 前後、水位は洲浜や景石、井戸の位置などから標高 12.6～12.8m 前後と考えている。汀は、基本的には川原石を敷き詰めた洲浜に仕上げていると思われ、橋 17 から北側を便宜的に洲浜 24、南側を洲浜 25 とした。

橋 17（図版 4・7・21・117・120・図 14）

池 16 の堆積土を掘り下げ中に、東西方向に発見した。橋脚は、桁行 2 間×梁間 1 間を確認したが、東半部が未調査のため全長は不明である。桁行は 1 間 2.7m、梁間 1 間 1.5m である。橋 17 の梁間中心は、建物 2 の身舎桁行方向 5 間目の柱間中央と揃えている。橋脚の西端から建物 2 の縁束までの距離は約 21m である。橋脚の柱材は径約 0.2m 前後であるが、断面形は方形・多角形・円形とまちまちである。柱材はいずれも先端を削り尖らせている。柱根は約 0.9m 残っていた。設置にあたっては、池底を少し掘り窪め、そこへ先の尖った柱材を打ち込んでいる。

なお橋の西側において、橋狭石などを据え付けた痕跡を求めて遺構検出したが、そうした痕跡は一切認められなかった。

滝組 18・溝 63（図版 5・19・95・100・101・104）

滝組 18 は第 97 次調査で検出した池 14 の東岸に造られていたが、その位置は建物 2 の東側正面にあたる。これは、水を落とす部分と落ちた水を池へと流す部分とに大別できるが、ここでは一つの遺構として報告する。

滝組を構成する石はほとんど後世に抜き取られていたが、旧状を良く保っているもの 2 石、割られているが復元できるもの 1 石があった。また、石の抜き取穴の痕跡も数箇所認められた。滝組の東奥で発見した石は、幅 1.5m、高さ約 0.7m ほどが地上に露出していた。この石の南隣には、

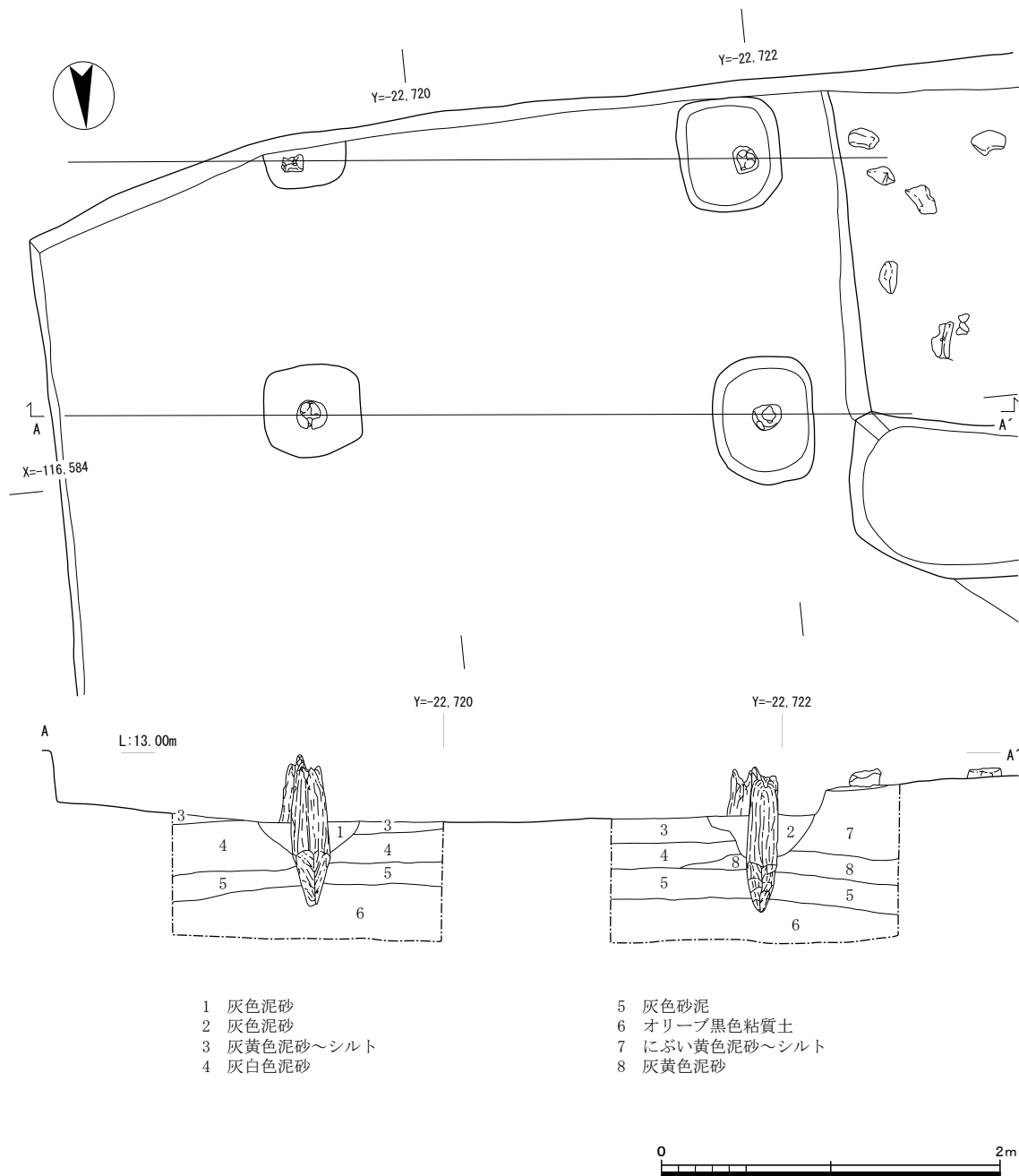


図 14 橋 17 実測図（第 104 次調査）(1:40)

上半部が欠け落ちた石が据わっていた。これら二つの石を接合した結果、高さ 1m ほどに復元でき、その頂部は遺構面よりわずかに高くなった。この石は、地上に露出しているのと同じ寸法を地下に埋め込んでいた。滝組から落ちた水は、長さ 8.0m、幅 1.2 ～ 2.0m の流れを通過して池 14 へ注ぎ込む。流れの傾斜角は、2 度と緩やかである。流れの幅は、滝に近い部分がもっとも広く下流に行くにしたがって徐々に狭くなる。流れを縁取る池側の石は良く旧状を留めていたが、陸側の石はほとんど抜かれていた。流れの底部には拳大の川原石を敷き詰め、所々に水分け石や瀬などを設けている。水は溝 34、そして溝 63 を経て滝へと導入される。溝 63 は幅 0.7m で底部には川原石を敷いている。

出島 19 (図版 5・20・106～111)

第 102 次調査で検出した出島 19 によって、池 14 に北岸は東西に二分する汀線となっている。出島の西側と東側とでは意匠が大きく異なっている。西側は、洲浜 21 と同様池の傾斜面の汀を一段低くし、さらに船入 20 などの石組みを設けている。一方東側は、池岸の傾斜も急勾配で汀には丸みを帯びた花崗岩を三石一組とした石組みが四箇所ほどみられる。出島の先端部には景石をい一石据え付ける。

船入 20 (図版 5・20・106～109)

出島 19 の先端部西側で検出した石組遺構である。0.2～0.3m の川原石を並べ水際線が馬蹄形に入り込み、その両端には立石が置かれていた。深さは、西側が深く東側は浅くなる。こうした状況から船入遺構としたが、明確な根拠はない。このような遺構は、鳥羽離宮跡（金剛心院跡以外）や平安京跡の調査でも発見されていない。遺構は意匠的なものか、あるいは機能的な施設であるのかについてはにわかに決めがたいが、この遺構がある周辺部だけが一段低くなっており、機能的な要素が強いように思われる。なお南西端には緑色片岩が据えられていた。

洲浜 21 (図版 5・90・91・93)

第 79 次調査で検出した池 14 西岸の北半部にあたる。極めて緩やかな勾配の汀に、幅約 4m、長さ 20m にわたって拳大の玉石と瓦（播磨産）の破片を粗く敷き洲浜としている。汀の線は緩やかに弧を描いている。洲浜から陸部への立ち上がりは急勾配に仕上げられている。

石組 22 (図版 5・17・80・81・90～92)

洲浜 21 の南側に長さ約 18m にわたって据え付けられた石組みで、緩やかな弧を描くように配列されている。洲浜 21 と石組 22 が接する部分は、岬状に池側へ少し張り出す。石組みは、その張り出した先端部までおよんでいる。北端の三石は縦長の石を直立させて据え付けている。また、北から 3・4 番目の石は、頭部を池側（東）に少し傾けて据え付け、いわゆる荒磯風の意匠に仕上げている。石は汀線上に据えられていたが、陸部と池の肩口にも景石の抜取穴が南北方向に数箇所みられた。後世に陸部近くの石は抜き取られたものと考えている。

ここに据え付けられた石材は、チャートがもっとも多く、頁岩ないしは粘板岩、砂岩、脈石英、ホルンフェルス、緑色片岩、黒雲母花崗岩の順であった。緑色片岩は 2 石認められたが、いずれも標高 12.5～12.6m に据えられていた。船入 20 で発見した緑色片岩も同じ高さに据えられていた。緑色片岩は、和歌山県紀ノ川流域の河床から採取された可能性が高く、その他の石は、鴨川上流の高野川支流から運ばれたと考えられる（付章 2-2 参照）。

石組 23 (図版 5・18・95・98・99・103・104)

石組 22 の南に連続する石組みであるが、池に西から東へと張り出す部分から南側を便宜的に石組 23 とした。遺構の大半が、現在の道路内にあたるため未調査部分が多く詳細は明らかでない。この石組みは北側の石組 22 と共に据え付けられたと考えられる。ただしこの部分の石は、汀の意匠と護岸機能の両方を兼ね備えており、先の石組 22 とは少し異なっている。

洲浜 24(図版 4・7・21・112・113・116～117)

第 109 次調査で検出した池 16 の洲浜である。先に述べたように、橋 17 から北側を洲浜 24、南側を洲浜 25 と便宜的に分けた。洲浜 24 は、5～10 度と緩やかな勾配の汀に拳大の川原石を約 3.5～4.0m にわたって丁寧に敷き詰めている。洲浜は、建物 1 南西角のすぐ近くまで施されている。景石は 0.6～1.5m 前後の大きさで、標高 13.0～13.4m 前後の高さに据えている。また、建物 1 の南西角や建物 5 の南側にも、大小 7 石の景石を据え付けている。いずれの景石も浅く皿状に掘り窪めた堀形内に据えられていた。

洲浜 25(図版 4・7・22・118)

汀の勾配も、洲浜 24 と同様に 6 度前後と緩やかで汀線も直線的である。洲浜は、拳大の川原石 1.5～2.0m 幅で敷き詰めている。また、景石の数も少なく、石も小振りである。そのため、洲浜 24 と比較するとやや見劣りする。景石は、標高 13.0～13.2m 前後の高さに据え付けている。

船着場 26(図版 5・18・102・103)

第 97 次調査において池 14 の西岸で検出した。その位置は、滝組 18 の対岸にあたる。長さ 1.8～2.0m、厚さ 0.4m 前後の和泉砂岩を 2 石「く」字状に組み合わせ、その両端に 0.8m 前後の石を据え付けている。石組みの意匠は、石橋などによくみられる橋挟み石に類似している。「く」字状に据え付けた石の上端部は標高 12.8m で、池の推定水位である 12.6～12.8m によく符合する。

なお、和泉砂岩の表面にはポットホールが認められることから、堺から和歌山周辺の海岸で採取された可能性が高い。

3) 井戸

井戸 27(図版 5・23・93)

第 79 次調査で検出した池 14 の北西部で、洲浜 21 上に作られた井戸である。井戸枠は石組みで方形を呈し、一辺が 0.2～0.3m ほどの方形に近い石を四～五段積んでいる。上面には平瓦を敷く。井戸の堀形は円形で直径が 1.45m、井戸枠の一辺は 0.5m、深さ 0.75m である。洲浜 21 と同時期と思われる。

井戸 28(図版 5・11・24・93)

建物 3 の上面で検出した円形の井戸で、建物より新しく、室町時代に造られた。井戸の構造は上、中、下段の三段に大別できる。上段は、土止めとして平瓦を縦方向に約六段差し込み、平面形は一見すると花卉のようにもみえる。中段は円形の縦板組み、下段は桶を据え付けている。堀形は直径 1.6m、深さ 2.8m、下段の桶は直径 0.55m、高さ 0.55m、中段の縦板は幅 0.88m、長さ 1.3m、厚さ 0.02m で、下部に切り込みがある。

井戸 29(図版 4・7・22・25・118・121)

池 16 の西岸、洲浜 25 で検出した。井戸 27 と同様に洲浜に作られた井戸で、庭園に伴うと考えている。井戸枠は、縦板を方形に組み、横棧を中段と下段の二段に設けている。堀形は直径 2.0m の円形で、深さは 2.2m である。木枠は幅 0.75m、長さ 2.1m、厚さ 0.03～0.05m の一枚板を四枚縦に組み、さらにその外側に厚さ 0.02～0.05m の板をはめ込んでいる。横棧は、一辺が 0.05～

0.08m、長さ 0.65m の角材を使用している。井戸底から 0.55m のところに、直径 0.05 ～ 0.2m の川原石を敷き詰めている。

井戸 30(図版 4・7・9・26・121)

建物 2 の基壇で検出したが、井戸 28 と同様に建物が廃絶した後に造られている。井戸枠は、幅 0.6 ～ 0.65m、長さ 1.5m 以上、厚さ 0.07 ～ 0.09m の板材をほぞで六角形に組んでいる。横棧は設けられていない。井戸の堀形は直径約 2m の円形で、井戸枠の内法寸法は 1.1m、深さ 1.5m の大きさである。底部には、金剛心院に葺かれていた瓦を敷き詰めている。板の側面は約 60 度の角度に面取りし、その面に対して直角にほぞ穴を開けしっかりと各板が組み合うように細工が施してある。この面には別にもほぞ穴があり、井戸枠として転用されたと思われる。形状や寸法、表面の仕上げなどからみて、建物の床材と推定される。建物 2 の部材を再利用したものであろう。

4) 溝

溝 31(図版 3・4・68)

第 76 次・89 次・90 次・106 次の各調査区で、東西方向に長さ約 110m 調査したが、護岸を施したような痕跡はみられない。幅 1.2 ～ 2.0m、深さ 0.2 ～ 0.7m の規模である。築地の側溝とも考えられるが、本体部分と推定する箇所が現在の道路内に位置するため詳細は不明である。金剛心院の北限溝と推定している。

溝 32・溝 33・柱列 46・暗渠 52(図版 6・15・16・29・70・71)

第 80 次調査と第 99 次調査で検出した。溝 32・33 は築地 13 の側溝である。溝 32 は、築地西側で南北約 50m にわたって検出した。溝 33 は、南北約 75m 検出したが、護岸を施した痕跡は認められなかった。

第 74 次・80 次調査では、溝 32 の両側で柱列 46 を検出した。柱列 46 は、東西 1 間 (2.7m)、南北 4 間 (9.6m) の規模で、柱間寸法は、東西が 2.7m、南北は 2.4m の等間である。柱穴の堀形は直径 0.4m、深さ約 0.1m で、その中には直径 0.2m の柱根が遺存していたものもある。門の一部あるいは、溝 32 に架けられた橋とも考えられる。

暗渠 52 は、土層 50 の下層から検出された。その位置は、柱列 46 から東に 1.7m ほど離れている。この遺構は、丸瓦を玉縁で組み合わせ、南北方向に並べている。調査では、長さ 1.9m にわたり連続する丸瓦 6 個体分を発見した。当初はもっと長く並べられていたと思われる。柱列 46 に関連する遺構と考えられる。

溝 34(図版 3・5・29・95)

第 97 次・第 106 次・第 113 次調査で検出した南北方向の溝である。第 97 次調査の北限では溝幅は 3.2 ～ 5.0m、深さは 0.8 ～ 1.3m、第 106 次調査では幅 4.1m、深さ 1.3m、池に注ぎ込む直前では、幅約 2.2m、深さ 1.7m であった。いずれの調査でも、護岸を施した痕跡は認められなかった。溝 34 以東は、鳥羽離宮に関係する遺構は認められず、この溝は金剛心院の東を限る溝と考えた。しかし築地などの痕跡は一切みられない。

溝 35 (図版 7・12・72・73)

第 101 次調査で検出した東西方向の溝である。幅 2.4m、深さ 0.6m で、断面は逆台形を呈する。この溝からは、十字に組み合わせた瓔珞や滑石製の温石、土師器の皿が出土している。出土土器は鎌倉時代に比定される。

溝 36 (図版 7・12・72・73)

第 101 次調査の溝 35 の北側で検出した溝で、調査区を北東から南西へ斜め方向に横断する。幅 1.8m、深さ 0.9m である。埋土からは室町時代の土器が出土している。溝 35 と溝 36 の間は約 1.5m で、やや盛り上がりが低い土壌を形成する。

溝 37 (図版 6)

第 103 次調査で検出した南北方向の溝である。溝 37 の周辺では砂利敷きが認められる。幅 0.5m、深さ 0.2m で、長さ 15m を検出した。

溝 38 (図版 6)

第 74 次・80 次・103 次調査で、南北 73m にわたり検出した南北方向の溝である。第 80 次調査の南端で西へ折れ鉤形となる。幅 0.8 ～ 1.0m、深さ 0.3m である。第 74 次と第 103 次調査では溝 38 の東側で礫敷きが部分的にみられ、築地 13 と並行した道路として利用されていた可能性がある。しかし平安京の道路面と比べると、砂利層は部分的に敷いただけで重複せず、常時使用されたものではないと思われる。

溝 39 (図版 6)

第 39 次・80 次調査で検出した南北方向の溝で、長さ 73m にわたって検出した。幅 1.0 ～ 2.0m で深さ 0.3m である。溝 37・38・39 は平行しており、溝の軸線は築地 13 とほぼ同じで、北側に対して東へ 2 ～ 3 度傾いている。その間隔は溝 37 と溝 38 間が 10m、溝 38 と溝 39 が 9 ～ 11m である。

溝 40 (図版 5・27・106・110)

第 102 次調査で検出した池 14 の北東部に位置する。規模は、幅約 0.8 ～ 1.0m、深さ 0.5m である。この溝は、南北方向の溝 34 に接続していると考えられる。溝底には杭跡が数箇所を確認されたが、水量調整をしていた施設かどうかは明確になってない。溝底の高さは、池 14 の推定水位より高く、池 14 への導水溝と考えている。なお、溝内から呪符（物忌札）が出土した。

溝 41 (図版 4・5・11・80・81・94)

第 79 次調査の中央部を東西方向に通る、土壌 42 から池 14 をつなぐ素掘りの溝である。幅 0.8 ～ 1.0m、深さ 0.5m である。溝 41 は建物 4 の礎石据付穴を壊しており、建物 4 が廃絶した後に掘られたものである。

雨落溝 57 (図版 4・9・79)

第 75 次調査で検出した建物 2 に付属する雨落溝である。径 0.3 ～ 0.5m の扁平な川原石を二列一組で建物側と外側に並べ溝を形作っているが、溝底には石を敷いていない。溝の幅は、石列の外縁で約 1.6m、内法では 0.5m である。石は、かなりの部分を抜き取られていたが、建物 2 北西

部で東西 7.7m、南北 2.2m にわたって検出した。建物 2 の側柱筋から溝の中心までの距離、すなわち屋根の軒先の出は 2.4m である。

雨落溝 58(図版 4・8・77・78)

第 75 次調査で検出した建物 1 に付属する雨落溝である。建物の北西部において東西方向に長さ 1.3m ほど検出した。雨落溝 57 と同様に、扁平な川原石を二列一組で建物側と外側に並べて溝を形作っている。溝の底部にも川原石を敷く。溝の幅は、石列の外側で約 1.6m、内法では 0.5m である。

雨落溝 59(図版 4・75)

第 75 次調査で検出した建物 9 に付属する東西方向の雨落溝である。二列に並んだ川原石を長さ 4.5m ほど検出したが、雨落溝 57・58 を参考にすると溝の片側の石列が抜き取られていると思われる。

雨落溝 60(図版 4・75)

第 75 次調査の建物 9 と建物 10 の接続部分で検出した雨落溝である。逆 L 字形に遺存していたが、雨落溝 59 と同様に溝の片側の石が抜き取られている。

雨落溝 61(図版 4・11・80・81・88・89)

第 79 次調査で検出した建物 4 の西側で、南北方向に約 2m 確認した。溝の形態・規模は雨落溝 58 と同様である。建物 4 の桁行方向の側柱筋から溝の中心までは、2.1m である。雨落溝 58 と雨落溝 61 は一連のものであったと考えている。

5) 土壌

土壌 42(図版 4・81・94)

第 79 次調査で検出したが、西半部は調査区外にあたる。規模は南北 9.2m、東西 3.0m 以上、深さ 0.7m である。土壌内には、瓦を多量に投棄していた。

土壌 43(図版 4・5・7)

第 97 次調査の北西部、建物 1 の南側で検出した不整形の土壌である。東西 6.5m、南北 3.2m、深さ 0.4m である。埋土からは、瓦が出土した。

土壌 44(図版 4・5・7)

第 97 次調査の西端中央部、土壌 43 の南側で検出した。西側は調査区外へ広がる楕円形を呈し、南北 9.0m、東西 7.0m 以上、深さ 0.5m である。土壌 42 と同様、埋土から瓦が多量に出土しており、瓦を廃棄した土壌である。

土壌 45(図版 4・5・7)

第 97 次調査の北西部に位置し、建物 1 の東南隅にあたり土壌 43 の東に並ぶ。楕円形を呈し、東西 6.0m、南北 5.2m、深さ 0.7m である。土壌内からは瓦が出土している。土壌周辺には景石が点在しており、景石を抜き取った時の抜き穴の可能性も考えられる。

土壌 50(図版 6)

第 80 次調査で検出した柱列 46、暗渠 52 の上層で検出した不整形な浅い落込状の遺構である。

輪郭は不鮮明で、瓦が散乱した状態でみられた。築地に葺かれていた瓦が散乱したものか、あるいはこの付近が水などでぬかるんだために、瓦を敷き詰めた可能性も考えられる。規模は幅 1.8m、長さ 9.5m である。

土壙 51 (図版 6)

第 80 次調査の拡張区で検出したが、土壙 50 と同様に溝 32 の東方に沿って部分的に検出した浅い土壙である。瓦が集中して出土している。規模については、その範囲が調査区外に広がっているため不明である。土壙 50 と同様の性格が推定できる。

土壙 64 (図版 6)

第 74 次調査において検出した楕円形の土壙で、規模は東西 1.6m、南北 2.6m、深さ 0.3 ～ 0.45m である。土壙内には、軒瓦や丸瓦、平瓦などが多量に投棄されていた。出土遺物はすべて瓦であった。いわゆる瓦溜である。

土壙 65 (図版 5)

第 79 次調査で検出した建物 1 の東側で発見した不整形な土壙である。土壙の南半部は、調査区外になるため詳細は不明であるが、東西約 9m、南北約 6m 以上、深さはもっとも深いところで約 1.2m である。遺構は金剛心院の整地層を数 10cm ほど掘り下げた段階で検出した。堀形は、ほぼ垂直に下がる。土壙内は 3 層に分層でき、中層からは軒瓦、丸瓦、平瓦などが多量に出土した。

土壙 66 (図版 4・75・77)

第 75 次調査で検出した建物 1 の北西で発見した楕円形の土壙である。規模は、東西 5.5m、南北 4.3m、深さは 0.3m である。土壙内からは軒瓦、丸瓦、平瓦などが多量に出土した。土壙の上面に礎石と思われる石が据えられており、金剛心院廃絶後に成立した遺構ではない。

6) その他

柱列 47 (図版 5・11・88)

第 79 次調査の中央部で検出し、建物 4 の東に南北方向に 1 列に並ぶ柱列で、5 間分ほど明らかにした。建物 1 北辺孫庇の柱列に柱筋が通る。柱間は北から 2.1m、1.8m、2.4m、1.8m、2.1m と不揃いである。短い柵列か、あるいは足場用の柱穴と思われる。

柱列 48 (図版 3・4 図 15)

第 89 次調査の南東部で検出した東西方向の柱列である。溝 31 の北側で、3 間分ほど確認した。柱間寸法は西から 2.1m、1.8m、1.8m である。溝 31 の南側が未調査のため、遺構の詳細は不明である。

地鎮 49 (図版 6・15・71 図 16)

第 80 次調査の拡張区内築地 13 の掘込地業底部で検出した。直径約 0.3m で、深さ 0.5m の円形の堀形内に、灰釉陶器の壺を直立させた状態で埋納していた。壺の内部からは水晶と真珠の破片が出土した。築地 13 を構築する際に埋納した地鎮の遺構である。壺に伴う蓋は出土せず、内部には一部土砂が流入していた。しかし発見時には口縁周辺部が空洞化しており、壺を埋納した時に紙もしくは布のようなもので口を密封していたと思われる。

暗渠 53 (図版 4・7・21・120)

第 109 次調査の建物 1 の南西角で検出した。調査では、平瓦凹面を上にした瓦を 4 枚分ほど連続して検出した。上部は、後世に削平されたと考えている。南端は池 16 の洲浜上に据えられた景石の後方に繋がっている。すなわちこの暗渠は、建物 1 に伴う雨落溝に流れ込んだ水を池 16 へと流すための施設である。注ぎ口は直接人目に触れないように、その前面に小振りの景石を据え付けている。

柵列 56 (図版 3・69)

第 106 次調査の中央部で検出した南北方向の柵列である。柵列 56 の軸線は北側に対して西へ 3 度ほど傾いている。この傾きは、建物 55 や建物 62 とほぼ同じ方位であるが、金剛心院関係の遺構の方位とは著しく異なる。柱間寸法は、北から 2.4m、3.2m、2.8m、3.2m、2.1m と一定しない。柱の堀形は直径が 0.2 ～ 0.3m と小さい。

柵列 56・建物 55・建物 62 は、同一時期の遺構と考えている。

築山 67 (図版 4)

第 75 次調査で検出した基壇状の高まりである。築山 67 は残存規模が東西 5m、南北 11m、高さ 0.4m であるが、周囲はかなり削平されている。断割調査の結果、この高まりは、当初検出した規模よりさらに南北方向は大きかったと思われる。

築山 68 (図版 6)

築山 68 の残存規模は、東西 14.8m、南北 12.2m、高さ 0.4m であるが、周囲はかなり削平されている。構築に際し、砂質と砂泥土を交互に積み重ねた版築を行い、高まりの南東では東西方向に川原石を 1 列並べた石列を 4.2m ほど検出したが、その周囲には関連する石列などの遺構はまったくみられなかった。なお築山 67・68 については、以前に建物基壇として報告したが、周辺部の遺構配置や構築方法などから築山状遺構に変更した。



図 15 柱列 48 (北東から) (第 89 次調査)

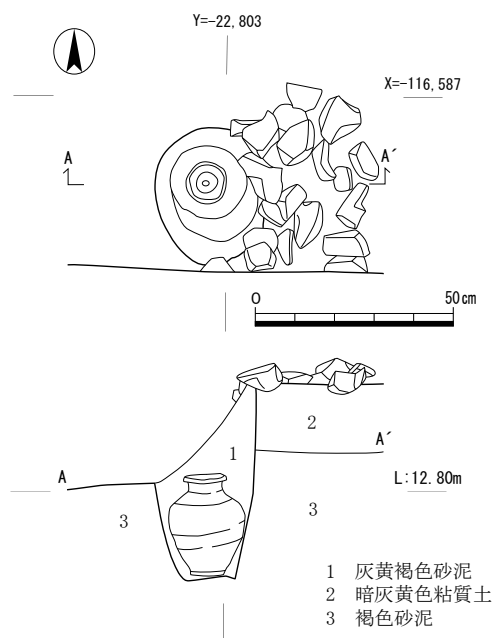


図 16 地鎮 49 実測図 (第 80 次調査) (1:20)

堤 69(図版 5・98・105)

第 97 次調査で検出した池 14 を南北に分断する遺構である。池 14 の両岸にある滝組 18 と船着場 26 とを結ぶラインで池を埋め立て構築した長さ約 17m、幅は上部で 1.2m、基底部で 5.0m、高さ 0.7m の堤である。構築土は上層と下層に大別でき、下層上面には瓦や抜き取った凝灰岩の切り石や庭石を帯状に敷き詰めている。また堤を横断するように丸瓦をつなぎあわせた暗渠もみられた。この遺構は、金剛心院が廃絶した以降に構築されたものであるが、時代や性格についても詳細は明らかでない。

第5章 遺物

金剛心院跡で出土した遺物は、弥生時代から中世までみられるが、本報告書では平安時代の鳥羽離宮金剛心院跡に関係する遺物を中心に取り上げる。出土遺物の中では瓦類がもっとも多くを占めており、土器類、木製品、金属製品は少量である。特に土器類の出土は、極めて少量である。土製品として緑釉を施した土製円塔がまとまって出土している。金属製品には、建物や仏像に使われたと思われる飾金具や釘などがある。木製品には、漆を塗り金箔を貼った仏教遺物や卒塔婆類、玉類、石製品が出土している。

1 瓦類

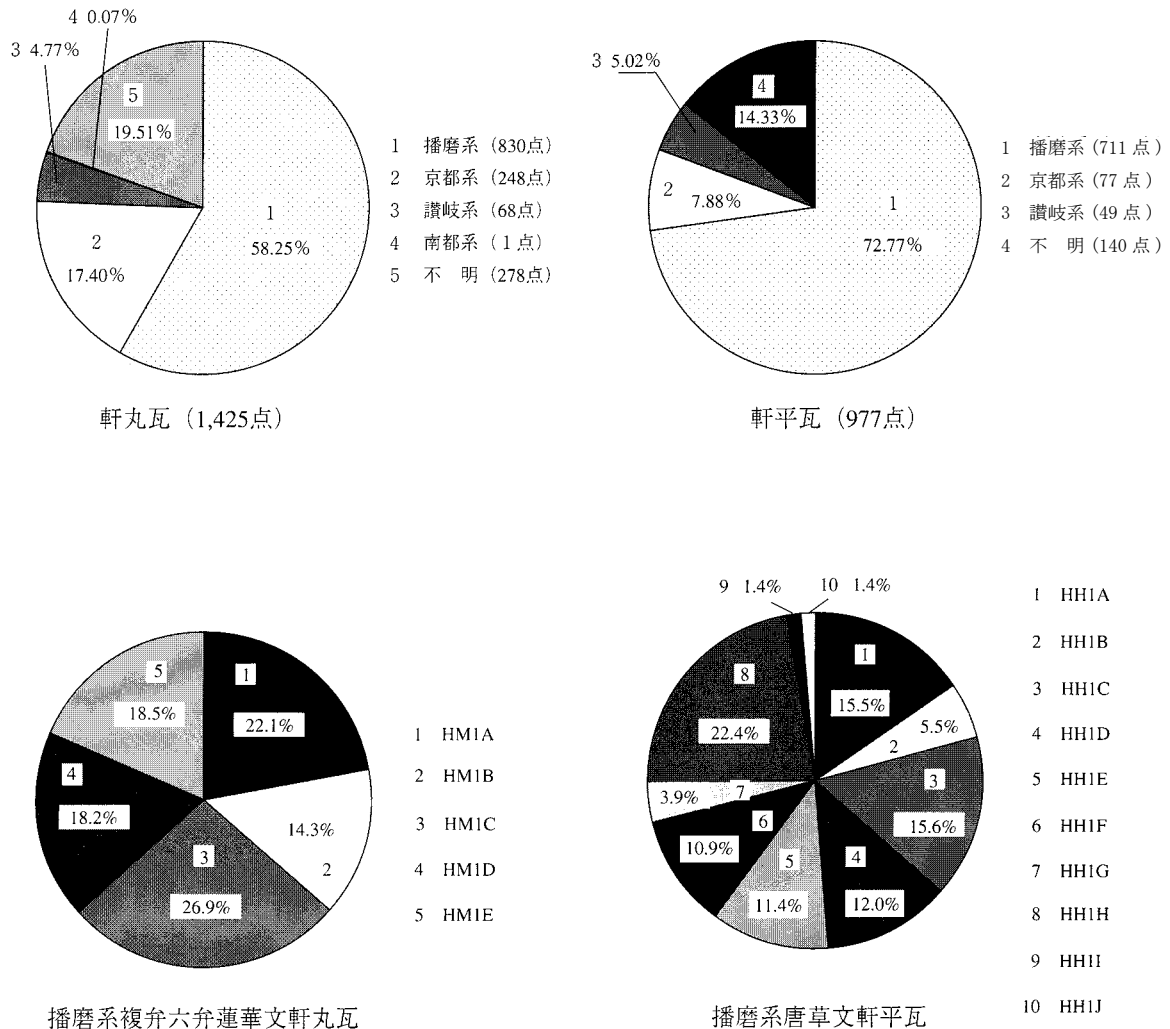
瓦類は、池内や土壇、溝などから多く出土している。特に建物1や建物2周辺からの出土が多い。報告書では軒瓦を中心に鬼瓦、ヘラ記号を有する瓦、丸瓦、平瓦を取り上げる。瓦の分類については、完形もしくは、それに近いもののみを対象とした。抽出した瓦の総点数は、2,583点である。軒瓦2,402点、丸瓦・平瓦131点、鬼瓦49点、その他1点である。以上の瓦の出土地点および、図版に載せた瓦の出土地点については、付載の表8を参照されたい。

なお、軒丸瓦278点と軒平瓦140点（計418点）については小片と文様判別不可能のため型式、産地分類では不明とした。

金剛心院跡の出土瓦で注目されることは、山城国以外で生産された瓦が多量に運び込まれていることである。もっとも多くを占めているのは、兵庫県神戸市、明石市、高砂市（旧国名播磨国）の瓦窯から搬入した瓦である。出土した瓦類（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦）のすべてにおいて播磨国の瓦は過半数を占めている。次に顕著な瓦は地元の京都系、そして香川県綾歌郡綾南町十瓶山古窯跡群^{註1}（旧国名讃岐国）周辺古窯跡群からの搬入瓦となる。以上を播磨系、讃岐系、京都系と呼ぶことにする。

軒丸瓦の総点数は1,425点、産地ごとの内訳は播磨系830点（58.25%）、讃岐系68点（4.77%）、京都系が248点（17.40%）、南都系1点（0.07%）、小片で産地・文様などが不明なもの278点（19.51%）である。軒平瓦の総点数は977点、産地ごとの内訳は播磨系711点（72.77%）、讃岐系が49点（5.02%）、京都系が77点（7.88%）、産地・文様など不明なもの140点（14.33%）である。軒丸瓦・軒平瓦とも6～7割を播磨系が占めており、京都系、讃岐系と続く。型式分類すると、軒丸瓦が播磨系6型式15種、讃岐系3型式5種、京都系14型式20種、軒平瓦は播磨系10型式28種、讃岐系3型式5種、京都系8型式18種となる。型式は播磨系軒丸瓦をHM、讃岐系軒丸瓦をSM、京都系軒丸瓦をKM、南都系軒丸瓦NM、播磨系軒平瓦HH、讃岐系軒平瓦をSH、京都系軒平瓦をKHとし、続いて型式番号、同文の種類をアルファベットで表す。なお、瓦の部分名称・技法などは『木村捷三郎収集瓦図録』^{註2}に準じた。

表4 軒瓦の分類グラフ



1) 軒丸瓦

① 播磨系軒丸瓦 (図版 30・31・123～125)

HM1A～E型式 (1～5)

この型式は5種に分類できる。複弁六弁蓮華文軒丸瓦で、中房は蓮子を飾らず、丸く盛り上がるのみで、中房と蓮弁を限る圏線が一重めぐる。蓮弁を表す凸線と子葉は圏線に接続する。外区に珠文帯を持たない単純な文様である。HM1A(1)は子葉が他のものより大きく、中房と圏線の間には範傷が認められる。HM1B(2)はHM1Aより子葉の長さがやや短く、複弁の中に範傷が認められる。HM1C(3)とHM1D(4)は見分けが付かないほど似通った文様である。子葉がHM1AとHM1Bの中間の長さで幅が細い。CとDの違いはCがDより圏線と弁が丸味を帯びて盛り上がり、かすかな範傷の違いが認められる。HM1E(5)は他より子葉がもっとも短く、高く盛り上がる。点数で比較すると、5種類ともほぼ同じ比率で出土している。HM1Aが162点(22.1%)、HM1Bが105点(14.3%)、HM1Cが198点(26.9%)、HM1Dが134点(18.2%)、HM1Eが136点(18.5%)である。玉縁まで残存している完形品では、すべて玉縁部に釘穴を開けている。

HM2A 型式 (6)

1 型式 1 種で複弁四弁蓮華文軒丸瓦。中房には 1 + 4 の蓮子を配するが、盛り上がりが高く不明瞭。蓮弁の根元にシベを表す。蓮弁は半円形を呈し、子葉を 2 本表す。弁の中央に稜線を入れるところと入れないところがある。蓮弁と類似する間弁を配する。周縁に一条の圈線がめぐる。

HM3A・B 型式 (7・8)

2 種があり、単弁八弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁は先端中央が凹み、ハート形を描く。中房は A より B の方が径は大きい。HM3A(7) は中房に大粒の蓮子が 1 + 5、HM3B(8) は 1 + 8 の蓮子が配される。外区には珠文帯・圈線はみられない。

HM4A 型式 (9)

右巻きの三巴文軒丸瓦で、断面が台形の巴文は頭部の先端が中央で結合している。尾は細く長い。内外区を分かつ太い圈線がめぐり、外区に珠文を密に配する。周縁の幅は狭い。

HM5A～C 型式 (10～12)

右巻きの三巴文軒丸瓦で、3 種に分けられる。HM5A(10) はもっとも巴の幅が大きく、尾が半回転する。範傷が確認できる。HM5B(11) は頭部がやや離れて配置される。HM5C(12) は巴の幅が細く、また東部が接近している。巴は断面を台形で表されるが、HM5 型式は巴の回転方向に沿って、巴の表面に彫刻刀の痕跡と思われる筋が認められる。

HM6A～C 型式 (13～15)

右巻きの三巴文軒丸瓦。HM6A(13) は頭部と頭部の間に範傷がみられ、細い尾が周縁に接する。HM6B(14) は頭部が丸味を帯び、短い尾は周縁に接しない。HM6C(15) は HM6A(13) と近似し、尾も周縁に接するが、頭部の形状がわずかに丸みを帯びる。いずれも HM5 型式よりも範の打ち込みが深い。

② 讃岐系軒丸瓦 (図版 32・125・126・138)

SM1A 型式 (16)

単弁六弁蓮華文軒丸瓦 1 種。大きな中房と山型の蓮弁を配する。中房は平坦で太い圈線がめぐり蓮子はない。弁区には間弁を配し、外区に細い圈線がめぐる。他の讃岐系巴文軒丸瓦と比べ小振りである。SM1A は香川県綾歌郡綾南町ますえ畑瓦窯跡^{註3}の製品に同文の出土例がある。大きさは近似しているが、ますえ畑窯の瓦は中房の圈線が太く周縁内側の圈線がみられない。

SM2A・B 型式 (17・18)

右巻きの三巴文軒丸瓦。SM2A(17) は巴の断面が丸みを帯び、尾部が細く長い。範傷が瓦当面を横断している。範傷ははっきり目立つものとかすかなものがある。香川県陶巴瓦窯跡^{註4}の出土例には、SM2A の範傷が進み、割れた部分にカスガイを二箇所打ち込んだ軒丸瓦がみられる。金剛心院跡ではそこまで傷の進行したものはみられない。瓦当裏面に粗い縄タタキ痕を残す。SM2B(18) は尾部が外区の細い圈線に接続する。

SM3A・B 型式 (19・20)

SM2 型式と異なり尾の長さが短い。SM3A(19) は巴の断面が丸みを帯び、頭部は大きく尾が細く

なる。SM3B(20)はSM3Aより中心部の頭部と頭部の間隔が広い。瓦当裏面には大半が粗い縄タタキ痕を残すが、ナデ消すものもみられる。丸瓦部凸面もナデ調整を行っているが、部分的に縄タタキ痕がみられる。SM3Bは丸瓦接合部の凸面の先端を削って尖らし、先端から5cm程度、接合強化のためにヘラでキザミを入れている。凹面の布目には粘土紐巻き上げの痕跡がみられる。

③ 京都系軒丸瓦（図版 33・34・126・128）

KM1A 型式 (21)

複弁八弁蓮華文軒丸瓦。中房は高く盛り上がり、1 + 8の蓮子を配する。蓮子の外側には蓮子に沿うように凸凹を持って圏線がめぐる。複弁には輪郭線が配され、さらに内外区を限る圏線が2条めぐる。内側の圏線は蓮弁に接する。周縁には珠文帯を設け、内外を圏線がめぐる。KM1Aは金剛心院の東方、竹田浄菩提院町にある白河天皇陵（成菩提院陵）に建てられていた三重塔の所用瓦と推定される。瓦窯跡で窯本体は検出されていないが、焼け歪んだ瓦や焼土の出土により、鳥羽離宮田中殿跡の北方部に想定されている。^{註5} KM1型式はもう1種、中房の蓮子の大きさに差異がある軒丸瓦が確認されている。また、東殿跡出土の完形品によると丸瓦部の側面に段を有する段瓦と呼ばれる特殊な瓦で、この型式と組み合う平瓦の凸面にも段が付けられている。^{註6}

KM2A 型式 (22)

複弁六弁蓮華文軒丸瓦。中房には1 + 6の蓮子を配し、圏線がめぐる。蓮弁は丸く表現し輪郭線がめぐる。複弁の輪郭線は細い線で表し、周縁に接続する。

KM3A 型式 (23)

複弁六弁蓮華文軒丸瓦。盛り上がった中房に大粒の蓮子を1 + 4で配する。複弁には子葉がなく、弁どうしが繋がる。外区の珠文は12個で、内側と外側に細い圏線がめぐる。

KM4A 型式 (24)

単弁四弁蓮華文軒丸瓦。凸線で表された中房は小さく、中心に大きな蓮子が1個あり、木の葉状の蓮弁に水滴状の間弁が配される。内外区を分ける圏線は太く、蓮弁に対応する箇所内側に凹む。外区には大粒の珠文を密に配する。

KM5A 型式 (25)

単弁蓮華文軒丸瓦。中房に巴文を描き、蓮弁は半円形に表現する。外区に珠文帯を設ける。小振りな瓦である。

KM6A 型式 (26)

単弁七弁蓮華文軒丸瓦。大きな中房内に1 + 4の蓮子と蓮子を区画するように凸線を描く。蓮弁は簡略化され、弁と子葉、間弁を凸線で表すが、弁の割り付け失敗のために一部間弁が省かれ、蓮弁が接続する箇所がある。『平安京古瓦図録』227と同范。^{註7}

KM7A 型式 (27)

単弁蓮華文軒丸瓦。抽象化された文様で、花卉が正位置に配置しないなど、蓮華文から逸脱している。中房には1 + 4の蓮子を配し、范傷が認められる。『平安京古瓦図録』228と同范。^{註8}

KM8A 型式 (28)

単弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁を凸線だけで幾何学的に表した文様である。中房は不明。

KM9A ～ C 型式 (29 ～ 31)

三巴文軒丸瓦で 3 種ある。中房に右巻の三巴文、外区に圈線と珠文帯を表す。KM9A(29) は大きな巴文、細い圈線と大粒の珠文が特徴である。また、珠文を大小交互に配置した箇所がある。珠文帯に明確な範傷が数箇所みられ、瓦当裏面の指オサエが明瞭である。KM9B(30) は中房の巴文の尾部が互いに接続し圈線状となり、珠文は大粒である。KM9C(31) は小片で、幅広の巴と大粒の珠文を配する。

KM10A・B 型式 (32・33)

左巻きの三巴文軒丸瓦で外区に珠文帯がめぐるが、どちらも小片。KM10A(32) は珠文が小粒で KM10B(33) は大粒である。

KM11A 型式 (34)

主文が右巻きの四巴文で、非常に希少な文様である。巴の尾部は圈線と接続する。23 個の珠文は密に配される。瓦当の直径はやや小振り。

KM12A 型式 (35)

右巻きの三巴文で、巴の頭部から凸線がのび中心で接続する。外区には珠文帯を持たない。

KM13A・B 型式 (36・37)

右巻きの三巴文軒丸瓦で 2 種がある。非常に近似した範であるが、KM13A(36) が KM13B(37) より巴の幅が広く、瓦当の直径もやや大きい。尾は細く長くのびる。

KM14A ～ C 型式 (38 ～ 40)

左巻きの三巴文で 3 種がある。いずれも瓦当範の直径が小振りである。巴文の幅や尾の長さが、少しずつ異なる。KM14A(38) はもっとも巴文の幅が広く、次に B(39)・C(40) の順に細くなる。尾の長さは KM14C(40) がもっとも長い。

④ その他の軒丸瓦 (図版 34)

NM1A 型式 (41)

南都系の複弁蓮華文軒丸瓦の小片が出土している。小片で中房に細い圈線、肉厚に表す複弁には輪郭線がめぐる。同文が薬師寺などから出土している。^{註 9}

2) 軒平瓦

⑤ 播磨系軒平瓦 (図版 35 ～ 37・45・129 ～ 132)

HH1A ～ J 型式 (42 ～ 51)

最も多量に出土し、種類も多い型式である。均整唐草文軒平瓦で 10 種を数える。唐草の主葉は左右に三反転する。中心部分では枝葉が対向の C 字形となり、反転部分で二葉ずつ両側に派生する。HH1A(42) だけは第一主葉の外側基部に枝葉が 1 本多く派生する。他の形式にはみられない。HH1B(43) は唐草の左端が周縁に接続。HH1C(44) は HH1B(43) とは反対に唐草の右端が周縁に接続する。HH1D(45) は中心の枝葉の巻が強い。第二主葉からのびる芽の先端が周縁に接する。

HH1E(46) は左側の第一主葉と第二主葉の芽に刻みが入る。

HH1F(47) は唐草文の幅が太い。

HH1G(48) は左右とも、第一主葉と第二主葉の芽が唐草より分離している。

HH1H(49) はもっとも範傷が明瞭である。左側の第二主葉の下部に大きい範傷が斜めに走り、傷の度合いが浅いものから大きいものまで多種ある。

HH1I(50) は右側半分に浅い範傷が数本斜め方向に走る。HH1J(51) は中心のC字形枝葉がもっとも小さい。

破片の数量ではHH1Hが143点と

もっとも多く、次にC(100点)・A(99点)・D(77点)・E(73点)・F(70点)型式と続く。Bが35点、Gが25点、IとJがもっとも少なく9点ずつである。HH1CとHH1Fには、中心部分に縦方向の細い凸線がかすかに確認され、文様を彫る際の割り付け中心線と思われる。軒平瓦の製作技法は、平瓦の広端面に瓦当部を接合し、上部まで粘土を覆い被せるように造ったいわゆる包込み式である。播磨系の平瓦は凹面に布目を残し、凸面に平行タタキと無文タタキの痕跡を残している。平行タタキを丁寧にナデ消している場合もあるが、平行タタキは溝が深いのでその確認は容易である。型式と製作技法である凸面にみられるタタキの関係をみると、HH1A・D・E・F・Jは無文タタキもあるが平行タタキが主流である。反対にHH1B・C・G・H・Iは平行タタキもみられるが無文タタキが主流をなしている。この型式は兵庫県神戸市西区神出窯跡群、明石市林崎三本松瓦窯跡、高砂市魚橋瓦窯から出土している。^{註10}

HH2A 型式 (52)

唐草が左右に三反転する均整唐草文軒平瓦である。中心飾りに下向きの花びらを表し、左右とも唐草が周縁に接続する。枝葉は派生しない。主葉の反転には先端が開いた芽を表す。HH1型式よりも瓦当幅が狭く、第三主葉が周縁に接する部分をみると、瓦当範の左右が切り縮められたように思われる。この型式は、兵庫県神出瓦窯跡のNH3型式^{註11}(902)に類似する。

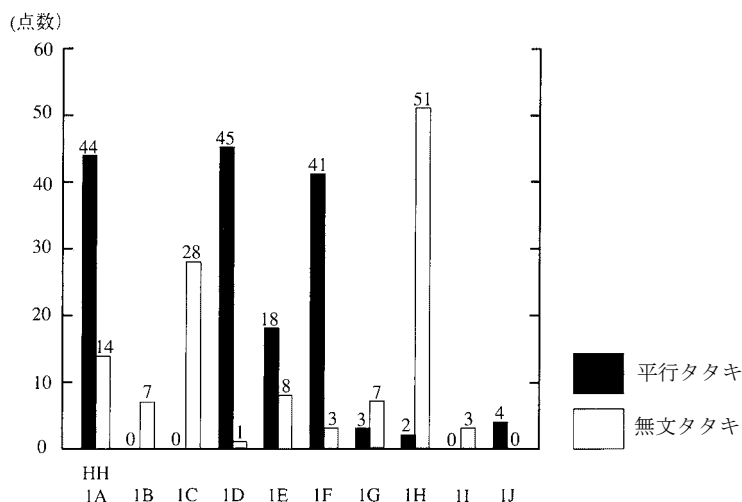
HH3A 型式 (53)

中心部のはっきりしない不均整の唐草文軒平瓦である。左右とも外側は、右反転と左反転を繰り返すが、中央部は交互にならない。

HH4A～D 型式 (54～57)

均整唐草文で、4種が出土している。唐草の第二主葉まではHH2Aと同様な反転を示すが、第三主葉が反転せずに波打つようにのびる。また中心飾りは水滴状である。唐草文の展開は4種とも同じであるが、唐草の太さや巻など細部に違いがある。

表5 軒平瓦HH1型式のタタキ文の比率



HH5A・B 型式 (58・59)

唐草の主葉から枝葉の派生しない単純な唐草文で2種がある。左右の第一主葉は下向きのC字形を呈する。唐草の主葉はいずれも巻きが強い。第三主葉はそれぞれ外側に枝葉が1本ずつのびる。HH5B(59)は枝葉が周縁に接続する。この型式は兵庫県林崎三本松瓦窯や魚橋瓦窯^{註12}からも出土し、単純な文様で多くの種類がある。

HH6A 型式 (60)

小片であるため唐草の全体は観察できないが、乱れた唐草文である。

HH7A 型式 (61)

他の同文例からみると、左側の第二主葉と第三主葉部分と思われる。唐草文に内外区を分ける界線が接続している。

HH8A・B 型式 (62・63)

中心に半截の宝相華文を配し、主葉が左右に2反転する唐草文軒平瓦で、2種がある。他の同文例では、主葉の反転部先端で蕾を表すが、本例では単なる枝葉の派生のように退化している。HH8B(63)はHH8A(62)よりも唐草文の幅が太い。兵庫県魚橋瓦窯^{註13}に同文品がある。

HH9A～D 型式 (64～67)

右巻きの三巴文を5個横に並べた連巴文軒平瓦が4種ある。三巴文の周囲には細い界線が取り巻く。三巴文の頭部は幅広で、短い尾部が付く。4種とも類似するが、少しずつ異なる。

HH10A・B 型式 (68・69)

右巻きの三巴文軒平瓦で2種がある。HH9型式と異なり三巴文の周囲には界線がめぐらない。HH10A(68)は巴がオタマジャクシのように頭部が大きく、尾部は細く短い。HH10B(69)は巴文の頭部が細く尾部が長い。

⑥ 讃岐系軒平瓦 (図版 38・133)

SH1A 型式 (70)

二葉ずつの唐草が反転する唐草文軒平瓦である。唐草文の先端が丸く膨らむ。内外区を分ける界線が一条めぐる。斜め方向に范割れの痕跡がみられ、文様にずれが生じている。瓦当の成形は播磨系のような接合方法ではなく、軒瓦専用に成形した曲線顎である。

SH2A 型式 (71)

右から左に流れる偏向唐草文軒平瓦で、唐草は大きく巻き込みながら流れる。唐草の主葉と枝葉の区別がなく、右巻きと左巻きの三巴文のように表現している。外区には界線が一条めぐる。瓦当は曲線顎を呈し、凸面に粗い縄タタキ痕を残す。瓦当范の木痩せによる木目が多数斜め方向に走る。鳥羽離宮南殿跡で同范例^{註14}が出土している。

SH3A～C 型式 (72～74)

右巻きの三巴文が5個並ぶ連巴文軒平瓦で、3種ある。三巴文の頭部は中央で互いに接合し、尾部は界線に接する。SH3A(72)は右端の巴下部に、SH3B(73)は巴の左から一つ目、二つ目と右端の上部に、またSH3C(74)は左端の巴の上部にそれぞれ范傷が認められる。瓦当の成形は複合

式の播磨系と異なり、瓦当一枚造りである。凸面には斜め方向の粗い縄タタキ痕があり、瓦当の顎部を削り出して浅い段を持つもの(72・73)と、曲線顎(74)がある。SH3Aは香川県陶邑瓦窯跡に同范例がある。^{註15}

⑦ 京都系軒平瓦(図版38・39・46・133～135)

KH1A 型式(75)

唐草文軒平瓦。主葉と枝葉を区別せず、唐草の先端が同じ巻を示す。平瓦凹面から瓦当面まで連続して細かい布目が付く。瓦当下端部と平瓦部凸面に縦方向の縄タタキ目を残す。

KH2A 型式(76)

小片であるが、他の完形品によると、卵形の中心飾りから左右に三反転する唐草文軒平瓦である。しかし、枝葉の派生や唐草の巻きは左右対称にならない。鳥羽離宮南殿跡より、同范が出土している。^{註16}

KH3A 型式(77)

唐草文軒平瓦で、枝葉が茨状に多数派生する。瓦当は折曲成型で、平瓦凹面から連続する細かい布目が瓦当面まで付く、平瓦凸面は縦方向の縄タタキ。

KH4A 型式(78)

右巻きの三巴文と＊形を交互に並べる連巴文軒平瓦である。凸面は縦方向の縄タタキで、三本線のヘラ記号がある。

KH5A・B 型式(79・80)

KH5A(79)は中心に右巻きの三巴文、その両側に剣頭文を2個ずつ、両端に三巴文を配置する剣巴文軒平瓦である。剣頭文と両端の巴文の上部に珠文を置く。瓦当面まで布目が付く。平瓦部凸面と瓦当下端面に縦方向の縄タタキを施す。KH5B(80)は右端だけの残存であるが、KH5Aと同じ構成の剣巴文と思われる。巴文は大きく、剣頭文は小さく表現する。

KH6A・B 型式(81・82)

中心に左巻きの三巴文を配置し、両側に剣頭文を4個ずつ並べる剣巴文軒平瓦である。2種があり、KH6B(82)はKH6A(81)より剣頭の鎬が長く表される。平瓦凹面には細かい布目が残存し、凸面は無文タタキ板の痕跡がある。

KH7A～C 型式(83～85)

KH6型式と文様構成や調整技法が類似するが、中心の巴文が右巻きの三巴文軒平瓦である。3種が認められ、剣頭文の鎬の幅や長さが少しずつ異なる。KH6型式と同様に凹面が細かい布目、凸面が無文タタキである。他の京都系軒平瓦は縄タタキが顕著であるが、KH6型式とKH7型式は無文タタキを施し、また京都系の他型式よりも一回り大きいのが特徴である。

KH8A～G 型式(86～92)

剣頭文軒平瓦で、7種ある。KH8A(86)は中心の剣頭文に、細かい凸線で×印を入れ、両側に3個の剣頭文を配する小型の瓦である。KH8B(87)は剣頭文を8個並べ、鎬が大きく長い。平瓦凹面に綾織りの布目が残る。KH8C～G(88～92)は破片のため、剣頭文の数は不明であるが、剣頭

の大きさや鎬の大きさがそれぞれ異なる。KH8G は瓦当の高さが低く、KH8 型式のほかの瓦よりやや古いものと思われる。

⑧ その他の軒平瓦（図版 39 図 16）

KH9A 型式 (93)

平安時代前期の唐草文軒平瓦。小片であるが、『平安京古瓦図録』の 316・329 と同範と思われる。中心飾りに「小」字形を置き、唐草が左右に 3 反転する。大阪府吹田市岸部瓦窯跡^{註18}と京都市北区西賀茂角社瓦窯跡^{註19}に同範例がみられる。

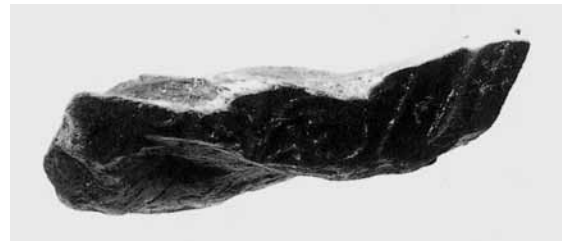


図 17 KH9A 型式の瓦

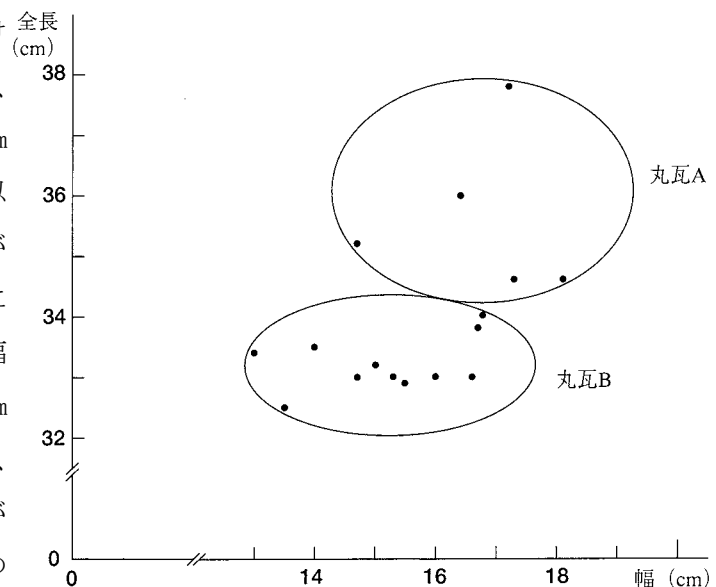
3) 丸瓦

丸瓦は播磨系と讃岐系に二分されたが、京都系に属するものは出土していない。

⑨ 播磨系丸瓦（図版 41・42・139-101～104）

平瓦に比べると完形品は少ないが、瓦の全長によって 2 種（A・B）に分ける。丸瓦 A は全長が 34.6cm 以上で、平均すると全長 35.6cm、幅 16.7cm である。丸瓦 B は全長が 34.5cm 以下で、平均の全長は 33.2cm、幅が 15.2cm である。丸瓦 A は全長と幅にばらつきがみられるが、丸瓦 B は幅に広がりがあるものの、全長が 33cm 付近に集中している。丸瓦の幅は、長さに比べ成形や焼成時にゆがみが生じ易いためと思われる。丸瓦 A の重量は平均 2.9kg、丸瓦 B の平均重量は 2.4kg である。凸面は基本的にナデて仕上げるためタタキの痕跡は消されるが、平瓦のように平行タタキの痕跡を残す丸瓦が完形品で 2 割ほどみられる。無文タタキは確認が困難であるため、瓦の大きさとタタキ目の関係は把握できない。胎土には黒色粒や砂粒を含むものが多く、焼成はすべて良好堅緻で軟質はみられない。

表 6 播磨系丸瓦グラフ



⑩ 讃岐系丸瓦（図版 43・44・140-105～109）

完形品がないため大きさは明確ではないが、破片でみると播磨系丸瓦 A の大きさに相当すると思われる。播磨系と同様に凸面はナデて仕上げるが、部分的に粗い縄タタキの痕跡が認められる。大半が縄タタキと思われる。成形はほとんどが粘土板巻き付けであるが、粘土紐巻き上げ式もみられる。109 は丸瓦凹面に幅 3cm の粘土紐の痕跡が、布目の下に明確に確認できる。また凸面は縄タタキの痕跡が玉縁まで認められる。焼成は播磨系と比べやや軟質で灰白色を呈する。胎土は砂粒を含まずきめ細かい。

4) 平瓦

平瓦は播磨系と讃岐系に二分されたが、京都系に属するものは丸瓦と同様出土していない。

⑪ 播磨系平瓦（図版 47～55-110～128）

完形品が多く出土しており、計測によると大きさによって3種（A・B・C）に分けられる。平瓦Aは全長が34.1cm以上で、平均すると35.4cm、広端幅は24.2cmである。平瓦Bは全長が34.0cm以下で、平均32.7cm、広端幅で23.3cmである。平瓦Cは少数で全長が30cm以下、広端幅は20～21.2cm。平瓦Bは全長が33.0cm付近に集中するが、平瓦Aはばらつきが大きい。平瓦凹面には平瓦

Cを除き布目がみられ、布目の下に糸切り痕が認められる瓦も多数ある。平瓦凸面のタタキをみると明瞭に平行タタキを残す一群a(110～117)と、平行タタキが認められず、無文タタキあるいはヘラで縦方向にナデる一群b(118～128)とに分かれる。ただし、平行タタキをヘラでナデ消した場合、平行タタキは認められない。平瓦凸面のタタキと大きさの関係をみると、平瓦Bは平行タタキaと無文タタキbがほぼ1/2ずつを占め、平瓦Aは大半が無文タタキbで平行タタキaはわずか1点である。平瓦Cの127には布目がみられず、凹面凸面とも離れ砂を用いている。端面を須恵器甕の口縁のように丸くヨコナデする。平瓦A・Bにはみられない特異な調整である。重量は平瓦Aの平均が3.7kg、平瓦Bの平均は3.3kgである。側面と端面の面取りは一定の法則はみられず、凹面と凸面の広端面・狭端面・側端面を部分的に面取りする。まったく面取りしない瓦もある。凸面には凹型台の圧痕が認められる瓦もある。胎土には量の多少はみられるものの黒色粒を含む瓦が多い。焼成はすべて良好で堅緻、自然釉がかかる瓦もある。軒平瓦はでき上がった平瓦を瓦当部と接続する包み込み式である。平瓦部の凸面は平行タタキと無文タタキがある。

⑫ 讃岐系平瓦（図版 56～59-129～136）

大きさは播磨系平瓦Aと類似する。平均は全長

表7 播磨系・讃岐系平瓦グラフ

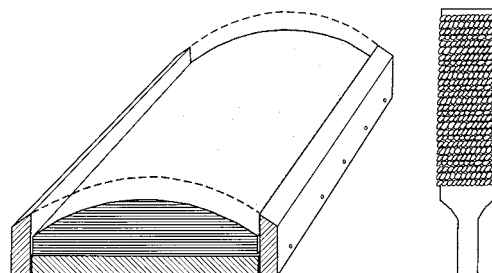
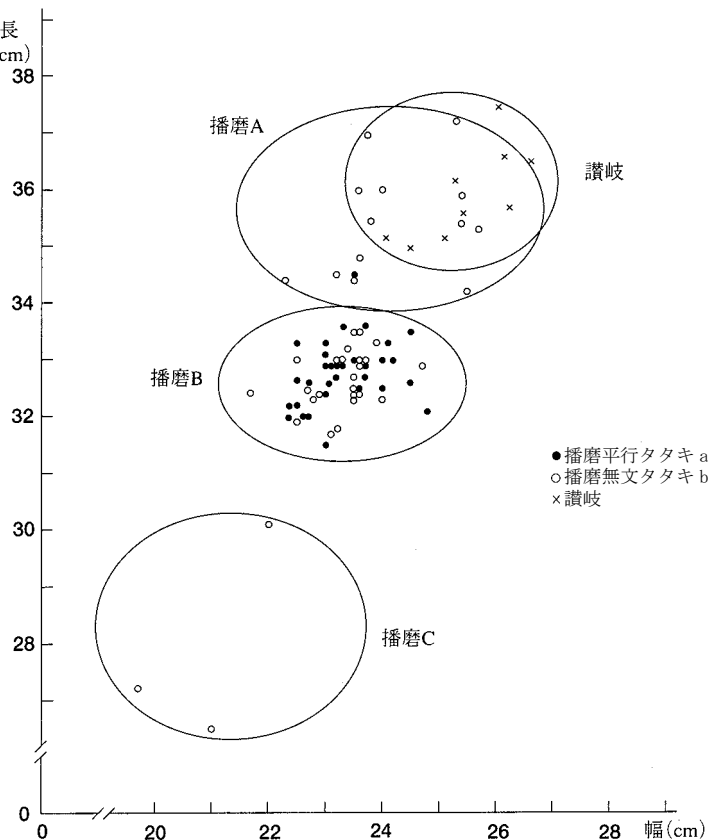


図18 讃岐系平瓦成形台と叩き板の復元図

が 35.8cm、広端幅 25.5cm である。平瓦凸面にはすべて粗い縄タタキの痕跡が明瞭に付く。京都系は縄タタキの痕跡が縦方向に付くが、讃岐系は斜め方向に付く。平瓦の一角を中心として放射状に縄タタキを施しているようである。凹面には粗い布目が明瞭に残る。端面には面取りを施した瓦もあるが、まったく面取りをしない瓦が多い。面取りやケズリを施さない未調整の瓦には、端面に凹面から連続して布目の付く瓦や側面に板の圧痕が残る瓦があるため、箱状の凸型台（図 18）を使用している可能性がある。胎土には砂粒を含まず、焼成はやや軟質、灰白色の色調を持つ瓦が多い。

5) 道具瓦

鬼瓦は播磨系や讃岐系のものが多数出土しているが、全容の判る個体は少ないため全体が良く判る 2 点を図示した。このほかに、半裁している平瓦の中に熨斗瓦が含まれていると思われたが熨斗瓦としての識別が困難であったため取り上げていない。

⑬ 鬼瓦（図版 40・136）

2 点とも播磨系の鬼瓦（94・95）である。94 は完形品で 95 は片方の脚部を欠く。94・95 ともに目鼻口に共通した表現が用いられている。周縁には界線に囲まれた珠文帯をめぐらす。94 は

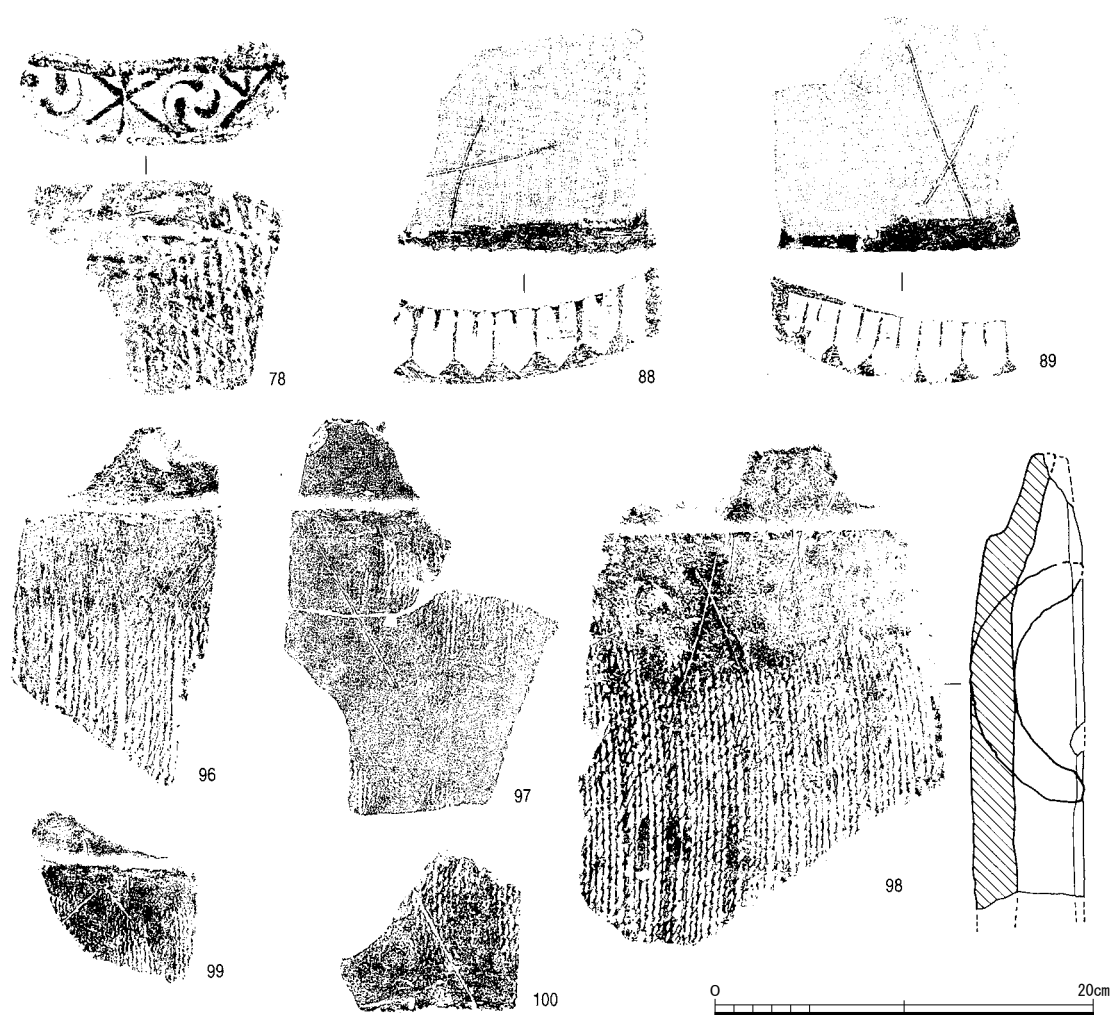


図 19 軒平瓦・丸瓦・平瓦のヘラ記号拓影・実測図（1:4）

珠文が 23 個、95 は少し小さな珠文が 29 個配される。周縁の珠文帯で筈ずれが確認でき、彫りの深い部分では木目がみられるため、木製の範を用いて成形した後、部分的にヘラで調整を施している。裏面と側面はケズリとナデ調整で、平滑に仕上げている。いずれも、胎土は緻密で灰色を呈し、播磨系特有の堅緻な焼成である。大きさは 94 が高さ 30.5cm、幅 30.3cm、厚さはもともと厚い鼻の部分で 6.1cm、周縁で 4.2cm である。95 は高さ 36.0cm、幅 32.5cm、厚さは鼻で 5.3cm、周縁で 3.8cm である。95 が一回り大きい。

6) その他

⑭ ヘラ記号（図版 137 図 19）

京都系の瓦にヘラ記号を施すものがある。78・88・89 は軒平瓦にヘラ記号を入れたものである。連巴文軒平瓦 78 は凸面の縄タタキ後に三本線を入れ、剣頭文軒平瓦の 88 と 89 は凹面布目の上から瓦当寄りに「×」印を描く。

96 ～ 100 は丸瓦の凸面玉縁寄りに縄タタキの上から、ヘラ記号を施す。98・99 は「×」印、96・97・100 は一本線である。他の小破片でも同様な位置にヘラ記号が認められる。

2 土器類

金剛心院跡の調査区では、瓦と比較して平安時代の土器の出土量は極端に少ない。鳥羽離宮跡全体をみると、東殿跡推定地では多量に土器が出土する土壌もみられるが、金剛心院跡の出土遺物は瓦が大半を占めている。第 102 次調査では、下層に弥生時代後期から古墳時代前期の自然流路が検出され、その流路から多量の土器が出土している。ここでは土器が出土している遺構の中で、平安時代以降のまとまっている土器群を取り上げる。

1) 第 80 次調査 土壌 50 出土土器（図版 149 図 20-1 ～ 10）

土師器皿は平たい底部と内湾しながら立ち上がる体部に、丸くおさえる口縁部を持つ、土師器皿は大きさによって 3 種に分けられ、もっとも大きい大 (10) は口径が 13.5cm、中 (5・7 ～ 9) が 10.2 ～ 11.0cm、小 (1 ～ 4・6) が 8.5 ～ 9.3cm である。V 期新段階 (12 世紀後半)。

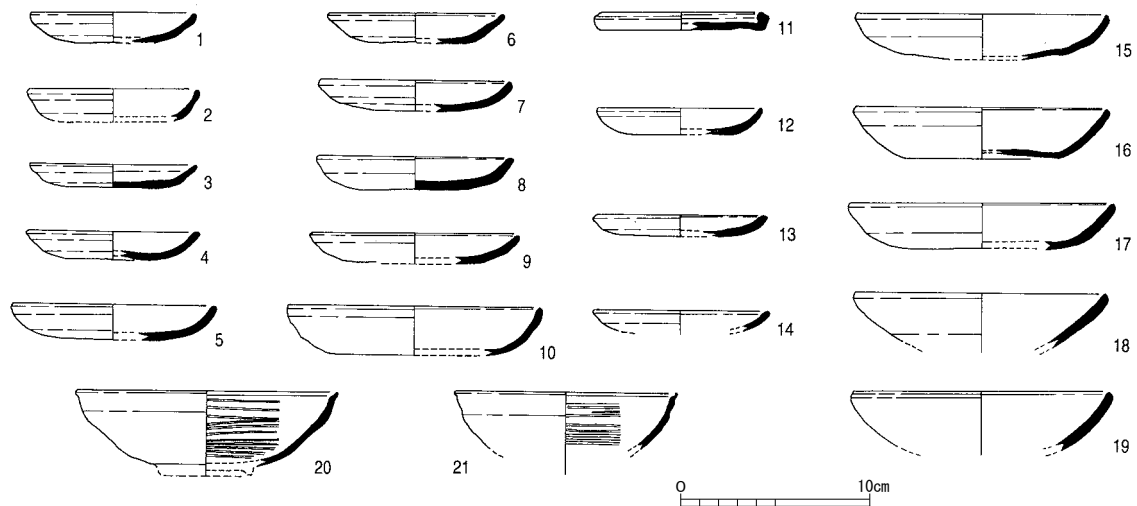


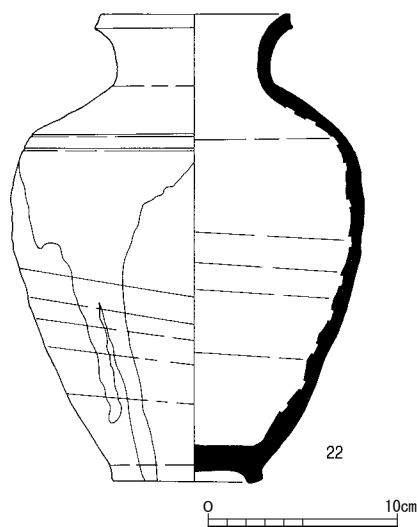
図 20 第 80 次調査出土土器実測図 土壌 50 (1 ～ 10)、土壌 51 (11 ～ 21) (1:4)

2) 第80次調査 土壇51出土土器(図20-11～21)

土師器皿と瓦器碗がある。平坦な底部に口縁が短く屈曲して立ち上がる受皿(11)が1点ある。土師器皿は大きさにより2種類に分かれる。大(15～19)は口径が13.8～14.6cm、小(12～14)は8.7～9.2cmである。瓦器碗は2点(20・21)あり、底部を欠く。体部外面はオサエとナデ調整で、内面は粗い横方向のヘラミガキ、口縁端部の内側に沈線が一条めぐる。VI期新段階(12世紀末)

3) 第80次調査 地鎮49出土土器(図版151 図21-22)

第80次調査築地13の地業下部より検出した地鎮49に用いられた灰釉陶器の壺(22)である。なだらかな肩部に2条の沈線を施す。外反する口縁部の外側端面を強くヨコナデし端部を直立させる。底部には断面が逆台形の高台を貼り付ける。体部下半は横方向のヘラケズリ。胎土は雲母と石英を少量含み焼成良好、灰白色を呈し、体部には淡緑灰色の自然釉が垂れる。口径9.8cm、胴部径18.6cm、高さ24.8cmである。愛知県猿投窯産と思われる。内部には、水晶玉や真珠などがおさめられていた。



4) 第97次調査 東区第1層出土土器(図版149 図22-23～29) 図21 第80次調査 地鎮49出土土器 実測図(1:4)

土師器皿がみられる。口径によって2種に分かれる。大(26～29)は口径が14.4～15.2cm、小(23～25)は9.3～9.8cmである。V期中段階(12世紀中頃)。

5) 第97次調査 池14出土土器(図版149・151 図22-30～38・23-44～49)

30～37は池14の腐植土層の出土で、土師器皿と土師器壺がある。土師器皿は2種あり、大

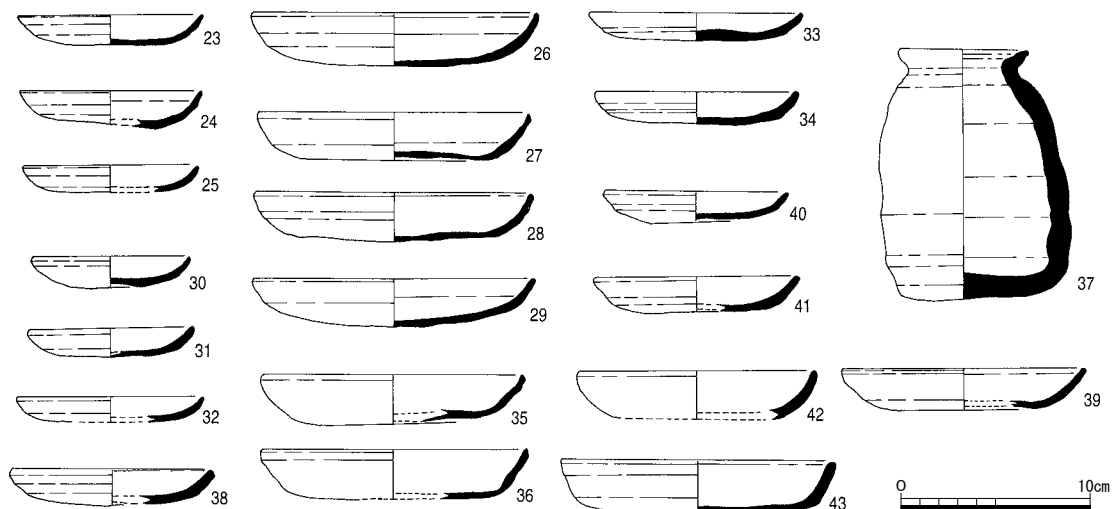


図22 第97次調査出土土器実測図 東区第1層(23～29)、池14腐植土層(30～37)、池14池底(38)土壇43(39)、土壇45(40～43)(1:4)

は底部から体部の屈曲部が目立ち、口縁部の外側端面をナデて三角形に尖らす。土師器壺は平らな底部に直立する体部、内湾する頸部から屈曲して、強く外反する短い口縁部を持つ。口縁部の内面をナデて窪みを作り、先端はナデて土師器皿の口縁部のように仕上げる。体部は粘土紐の積み上げ痕が明瞭で、内外面とも凸凹が激しい。底部から体部の屈曲部外側は軽くヘラケズリを施し、他はヨコナデ、胎土にクサレ礫と石英が混入し、茶褐色を呈する。口径 6.6cm、器高 13.2cm。

土師器皿 (38) は池 14 底部からの出土で、口径は 10.9cm である。Ⅴ期新段階 (12 世紀後半)。

瓦器碗が 6 点ある。44～46 は外面を粗くヘラミガキし、47～49 はミガキを省略して外面をオサエとナデ調整。内面調整は 45・46 が密に横方向のヘラミガキ、他は粗いヘラミガキ。44・47・49 は内面見込みに連続回転の暗文を施す。45 を除き口縁部内側に一条の沈線を施す。45・46 は高台を欠くが、他は断面三角形の高台を貼り付ける。口径は 14.2～16.4cm、器高は 4.8～5.1cm である。

6) 第 97 次調査 土壇 43 出土土器 (図版 22-39、図 23-50)

土師器皿と瓦器碗が 1 点ずつある。土師器皿 (39) は口径 13.0cm、器高 2.1cm、瓦器碗 (50) の体部内面は粗いヘラミガキで、外面はオサエとナデ調整。底部には断面が三角形で、低い高台を貼り付ける。口縁部内側には一条の沈線を施す。口径 14.2cm、器高 4.8cm である。

7) 第 97 次調査 土壇 44 出土土器 (図版 151 図 23-51)

瓦器碗 1 点で、体部の内面は粗いヘラミガキ、外面はオサエとナデ調整。底部内面には暗文、口縁部内側に一条の沈線を施す。口径 13.1cm、器高 4.4cm である。

8) 第 97 次調査 土壇 45 出土土器 (図版 149 図 22-40～43)

土師器皿が 4 点ある。43 は底部から体部の境界にあたる屈曲が明瞭で、口縁端部は丸くおさめる。他は底部から体部へ丸く立ち上がる。42 は口径 12.7cm、器高 2.5cm、43 は口径 14.6cm、器高 2.8cm、40 は口径 9.8cm、器高 1.6cm、41 は口径 11.0cm、器高 1.8cm である。

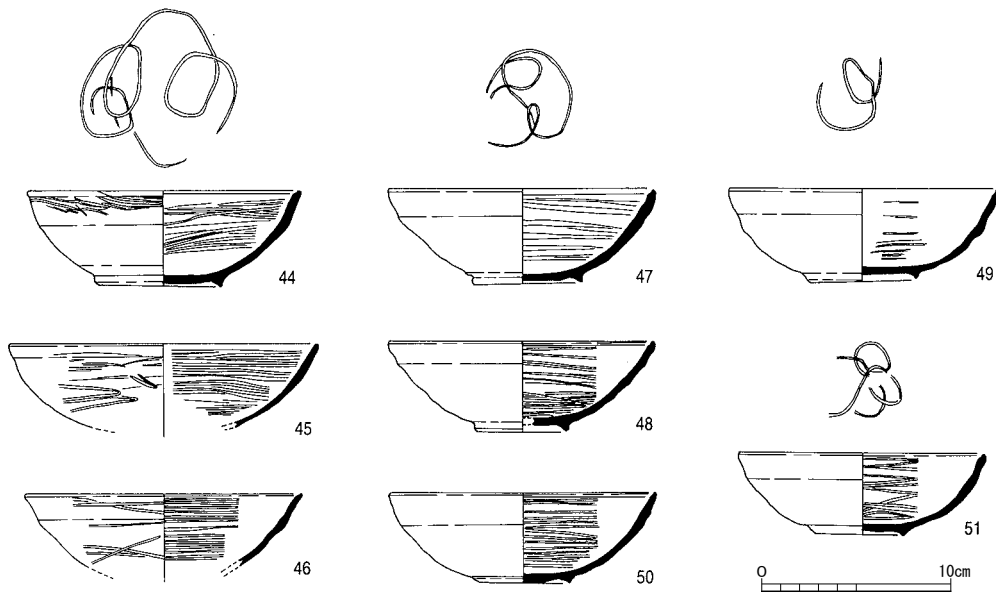


図 23 第 97 次調査出土土器実測図 池 14 (44～49)、土壇 43 (50)、土壇 44 (51) (1:4)

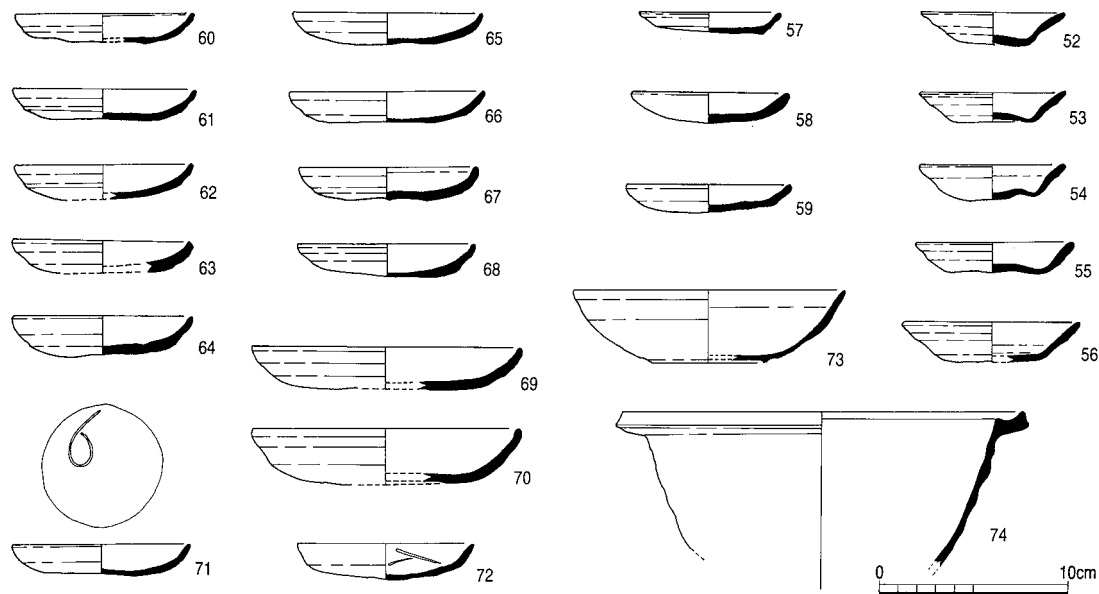


図 24 第 109 次調査 池 16 出土土器実測図 (1:4)

9) 第 109 次調査 池 16 出土土器 (図版 150・151 図 24-52～74)

52～59・65～67・71～74 は池の埋土層からの出土である。土師器皿は 52～56、57～59、65～67 の三群に分かれる。52～56 は底部に凸凹がみられ、体部は直線的に外反する。57～59 は口径が 7.5～8.7cm、器高 1.2～1.7cm と小型である。65～67 は体部外面を二段にヨコナデし内湾させて、口縁部をわずかに上方へ立ち上げる。口径 9.5～10.4cm、器高 1.7cm、73 は瓦器碗。71・72 は瓦器皿、74 は瓦質の鍋である。73 は外面のヘラミガキはみられず、内面も器壁が荒れているが粗いミガキである。底部にはごく小さな三角形の高台を貼り付けている。71・72 は土師器皿と同じ形状を示し、内面にわずかに暗文を施す。口径 9.4～9.5cm、器高 1.5～1.9cm。74 は底部を欠くが、内湾する体部に外方へ強く屈曲させた口縁部を持つ瓦器鍋である。口縁端部は面を作り、内側を上方へナデで立ち上げる。体部外面は凸凹が激しく指オサエが目立ち、内面は丁寧にナデ調整。

土師器皿 60～64・68～70 は洲浜 25 の砂層から出土している。口径により大と小に分かれ、大 (69・70) は口径 14.3cm、小 (61～64・68) は口径 9.4～9.8cm である。大は体部外面を二段に横ナデし、口縁部を上方へ立ち上げて端部を丸くおさめる。小も同様な調整を施す。63 は口縁部の外方に面を作る。

10) 第 109 次調査 井戸 30 出土土器 (図版 151 図 25-75～79)

土師器皿と花瓶がある。土師器皿は口径により大と小の 2 種に分かれ、大 (78) は口径 16.2cm、器高 3.8cm、小 (75～77) は口径 12.8～14.6cm である。丸い底部にやや外反

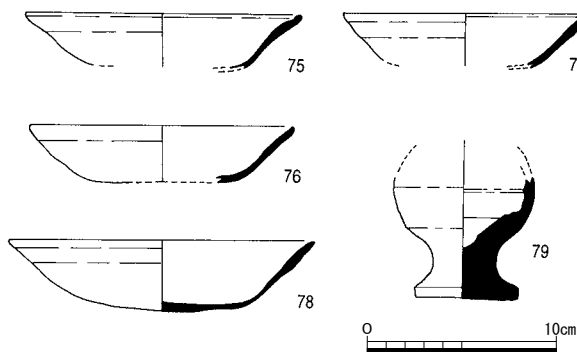


図 25 第 109 次調査 井戸 30 出土土器実測図 (1:4)

する体部、端部を尖らせるようにおさめる口縁部で、薄手の土師器である。79 は古瀬戸の花瓶で体部上半を欠く、底部は糸切り、体部に灰釉がかかる。内面は水引のナデ痕跡が明瞭。

3 土製器

1) 土製円塔（図版 156 図 26 - 1 ～ 30）

土製円塔は平面が円形で断面は平たい半円形を呈し、底部がわずかに鐙状に張り出す。泥塔や土塔とも呼ばれる。ほとんどが軟質の焼成で黄褐色を呈し、体部には黄緑色から緑色の緑釉を全面に施す。底部は無釉である。第 79 次調査で 9 点、第 92 次調査で 1 点、第 97 次調査で 19 点、第 109 次調査で 5 点、合計 34 点が出土している。そのうち 30 点を図示した。大きさを測ると 32 点の土製円塔は直径と高さがほぼ集中しており、平均すると、直径約 3.5cm、高さ 1.3cm、重

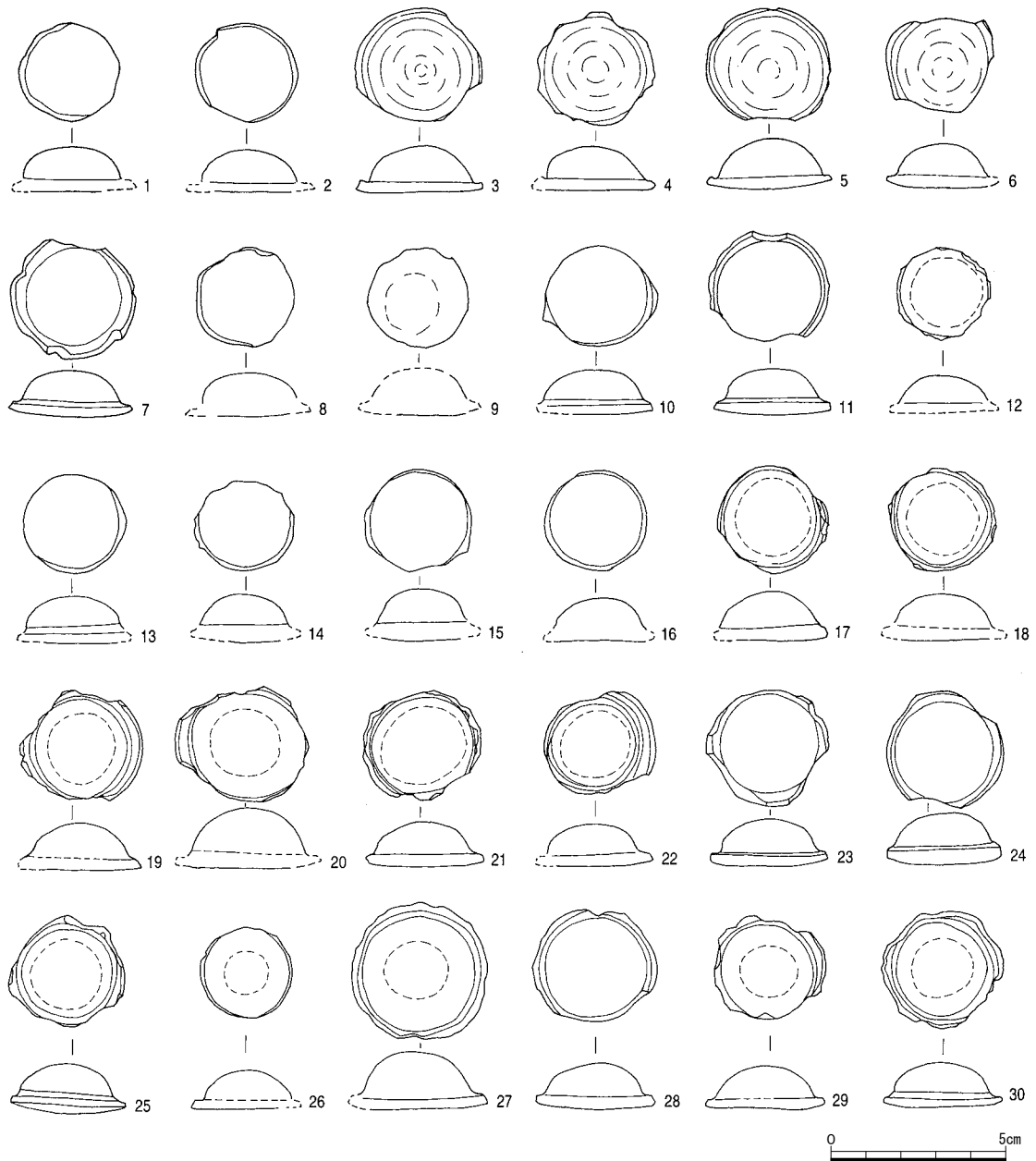


図 26 土製円塔実測図 第 79 次調査 (1 ～ 8) 第 97 次調査 (9 ～ 27) 第 109 次調査 (28 ～ 30) (1:2)

量は 10.3g である。体部には布目は認められないが、胎土の状態からみると型おこしの成形と思われる。2 点がやや大きく、20 は直径 4.2cm、高さ 1.8cm、重量 18.3g、27 は直径 4.0cm、高さ 1.7cm、重量 19.7g である。東殿跡の第 91 次調査では布目痕のある直径 8.7cm、高さ 3.4cm の大型品が出土しているが、金剛心院跡の土製円塔は、小型品だけといえる。出土状況をみると、1 ～ 8 は第 79 次調査の出土で、1 は建物 1、2・3 は土壇 42、4 ～ 8 は池 14 から出土。9 ～ 27 は第 97 次調査の出土で、9 ～ 22 が土壇 44 から 14 点ともっとも多い。23・24 は池 15、25 は第 2 層、26・27 は土壇 45 から出土している。28 ～ 30 は第 109 次調査の出土で、28 は第 1 層、29・30 は池 16 から出土している。

鳥羽離宮跡以外の出土例では、六勝寺の法勝寺跡や尊勝寺跡で直径 7.0cm、高さ 4.5cm ほどの土製円塔が出土している。尊勝寺跡では 6 点出土しているが、その特徴として、底部に安置場所と推定される文字（層、裳層）と数字（六百卅）の墨書がある。鳥羽離宮東殿と同様に体部には布目が認められ、その上に緑釉を施している。このほかに土製円塔は京都府八幡市美濃山廃寺^{註20}、愛知県稲沢市尾張国府跡^{註21}で出土している。美濃山廃寺の土塔は素焼きのままで直径 8.5cm、高さ 4.5cm 程度、底部に穿孔がある。尾張国府跡の出土品は六勝寺の土塔と同じような大きさで、緑釉を施す。他の遺跡ではみられない特殊なものとして、焼成前から 1/4 の大きさに分割した土製円塔もある。4 個 1 組みに組み合わせて使用するものであろうか。

4 金属製品

1) 飾金具（巻頭図版 3・図版 60・61・152）

鴛鴦文金具（1）

第 109 次調査の建物 2 の基壇より出土した。残存する最大の長さは約 25.7cm、幅約 12.2cm、厚さ約 0.1cm である。魚子地に羽を大きく広げて向かい合う 2 羽の「鴛鴦」が毛彫りによって表現されている。金具には鍍金の痕跡が残存している。なお、詳細については付章（P84）を参照。

唐草文金具（2）

両端を丸みのある山形にした細長い金具に唐草文を施す。文様部に鍍金を施し、唐草文の空隙に魚子を入れる。三箇所^{註22}に釘穴がみられ、1 と同様に打ち付けたと思われる。右側 1/3 ほどが内側へ折れ曲がって出土したが、展開して図示した。第 97 次調査の池 15 第 2 層から出土。

金具（3 ～ 7）

3 ～ 5 は破損しているが、端を曲げて立体的に表現した銅製の用途不明金具である。3 は L 字形に折れ、鋸が遺存している。4 は雁形を呈し、5 は砲弾形で、鍍金を施す。6・7 は銅版を台形と八角形に切り取ったもので、7 には片面に二箇所の刻印がある。3 は第 79 次調査の建物 1、4 は建物 3 から出土。5・7 は第 97 次調査第 2 層、6 は第 109 次調査池 16 第 2 層から出土。

珠文金具（8 ～ 12）

銅板を皿状に加工し、内側に先端の尖った釘を取り付けたもの。釘は 11 が体部の中心に外側から穴を開けて打ち込み、頭部を L 字形に曲げて留めているが、他は内側の中心に釘頭部を鑲付

けで接着している。12 だけは体部の端を横方向へ広げ、花卉を表すようにキザミを入れている。8・10・11 は第 97 次調査の池 15 第 2 層、9 は第 2 層から出土。12 は第 109 次調査の池 16 第 2 層から出土。

方形金具 (13)

13 は、第 92 次調査の池 14 から出土した。金銅製で鍍金を施す。大きさは、各辺の長さが 9.1cm の正方形で、厚さは 3mm である。中央に 16 弁の蓮華文を配する。なお、詳細な観察については、付章 (P85) を参照。

纓珞 (14～19)

14 は、第 101 次調査の溝 35 から出土した。長さ 8.5cm、幅 7.3cm、厚さ 0.2cm である。金銅製で内部に銅版打ち抜き部がある。1.55mm 程の円孔が上下左右に六箇所と左右二箇所に穿たれているものを十字に組み合わせている。文様は宝相華文を基調としたものと思われる。なお、詳細な観察については、付章 (P85) を参照。15 は中央に菊花形、周囲に簡略化した蓮華と蔓からなる文様を四方に配置する。本来は方形であったと思われる。寸法は、一辺約 4.8cm 前後である。第 109 次調査の池 16 から出土した。16・17 は、纓珞 14 を簡略化した小型品と考えられる。16 の寸法は、長さ 4.6cm、幅 3.5cm、17 は長さ 4.7cm、幅 2.5cm である。18 は下方に^ミくり込みを入れる。寸法は長さ 3.4cm、幅 3.4cm である。19 は小片のため詳細は不明。16～19 は第 97 次調査の池 15 から出土した。

鈴 (20)

長卵形をなす鈴で、半球を左右に合わせる。紐の先端には直径 2mm の穴を穿つ。胴部のほぼ中央に凸線がめぐる。下半の一文字透かしの端に猪目と思われる透かしがみられる。第 109 次調査の池 16 から仏教遺物と共に出土した。

風招形 (21・22)

22 は風鐸に付ける風招の形で、三箇所に透かし穴を施し、周囲には覆輪をめぐらす。上部に吊り下げるための釘穴がある。21 は非常に薄い胴板で、三箇所に透かしを施し下部は波形に仕上げているが吊り下げる穴はない。21 は第 97 次調査の池 14、22 は第 97 次調査の池 15 から出土。

2) 釘 (図版 61・62・153)

銅製小型釘 (23～42)

銅製の小型釘が 109 次調査の池 16 から、まとまって出土している。42 は頭部を輪状にし、長さが 1.3cm と短い。23～41 は頭部を上から叩いて平たくしたもので、同じ形状を呈する。長さは 27 が 0.4cm ともっとも短く、28 が 3.2cm ともっとも長い。他は 1.1～2.2cm の間におさまる。使用場所は不明であるが、木製品の仏教遺物と共伴して出土しているため、これらの部品に使われたと思われる。

鉄製釘 (43～71)

鉄製釘は完全な形状ではなく、折れて屈曲している。ま

た、錆に覆われている。頭部は L 字形にし、断面は正方

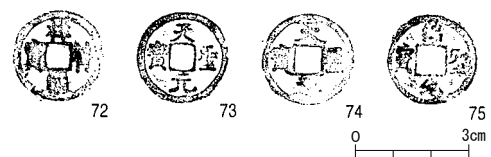


図 27 第 79 次調査 建物 1 出土銭貨拓影 (1:2)

形が長方形である。71 は木部が付着している。第 97 次調査の土壙 44 から出土。

3) 銭貨 (図 27-72 ~ 75)

第 79 次調査、建物 1 地業内から銭貨が 4 点出土している。いずれも宋銭で、祥符通寶 (1008 ~ 1016 年) 1 点、天聖元寶 (1023 ~ 1031 年) 2 点、紹聖元寶 (1094 ~ 1093 年) 1 点である。これらの銭貨に供伴遺物は認められないが、出土地が建物 1 の地業内のため、地鎮の祭祀に用いられた可能性が高い。

5 木製品

木製品は、池や井戸などから出土している。第 109 次調査の池 16 からは仏像や仏具などが比較的まとまって出土した。主な遺物については、付章 1 鳥羽離宮跡出土の仏教遺物を参照。

1) 漆製品 (図版 63・154・155-1 ~ 20)

いずれも破損し全体の形状は不明であるが、黒漆を塗布した製品で、割り込みやほぞ穴が細工してある。他の蓮弁などと共に仏教遺物の部品を構成すると思われる。

2) 卒塔婆 (図版 64・65・155-21 ~ 33)

第 97 次調査の池 14 から、卒塔婆が 13 点 (21 ~ 33) 出土している。厚さ 7mm ほどの薄板を横から刻みを入れて、頭部を五輪塔の形に成形したもので、脚部の形によって 2 種に分けられる。脚の先端を尖らす A 類 (21 ~ 25・33)、脚の先端を平たく切り落とす B 類 (26 ~ 30) である。頭部の形状によっても 2 種に分けられる。頭部を完全な五輪塔の形状に加工した a 類 (21 ~ 28・31 ~ 33) と、五輪塔の上二段の空輪と風船を表した b 類 (29・30) である。21 は水輪と地輪の境を省略している。大きさは 21 と 27 が大きく 91cm と 70cm、他は全長 44 ~ 55cm 程度である。22 と 30 は体部上半に仏像の絵を施し、32 も梵字らしき墨書がある。また、24 は五輪塔の風輪を、30 は空輪風輪を墨で黒く塗りつぶす。21 ~ 26・28・29 は体部中ほどに直径 2 ~ 3mm の小穴が 1 ~ 4 個開けられている。28 は 4 個の穴があり、木釘が残存している。これらは卒塔婆を束にして木釘を打ち込んだものか、他の部材に卒塔婆を打ち付けたものと思われる。

3) 呪符 (図版 65-34)

第 102 次調査の溝 40 から出土した呪符 (物忌札) である。厚さ 7mm 前後の板材で、頭部は山形に、脚部は両側面を削って尖らす。頭部は一部墨を塗っている。頭部近くから「物忌咄天咄急」律〔令カ〕と墨書されている。寸法は全長 49.3cm、最大幅 0.58cm。

4) 建築部材 (図版 66 - 35 ~ 40 図 28)

建築部材には、第 109 次調査で検出した井戸 30 の井戸枠として用いられた 6 枚がある。形状やほぞ穴からみて建築部材の転用と思われる。厚さの平均 7.5cm、横幅の平均 64cm 程度の板材を各側面がほぼ 60 度となるように面取りし、6 枚の縦板を組み合わせて六角形の井戸枠に転用している。板材の上部は井戸枠が地表面に露出し

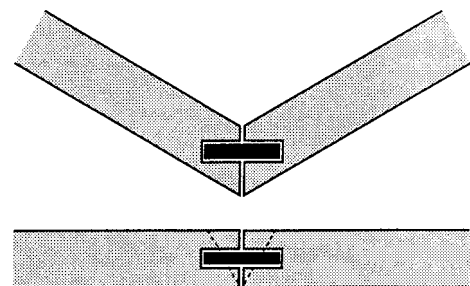


図 28 井戸枠連結模式図 (上) と
転用前復元図 (下)

ていたことにより、風化して先端が尖っている。板の断面はすべて台形を呈し、60度傾いた側面に対して、上面に近い位置から直角にほぞ穴を穿つ。傾いたほぞ穴は、35の右側面と36の左側面に二箇所、ほぞ穴が認められるが、他は一箇所ずつである。これら以外のほぞ穴は板材に対して平行に穿つ。図28のように傾きのあるほぞ穴は井戸枠同志をつなぐほぞであるが、板材に対して平行のほぞ穴は、転用前の部材をつなぐほぞと思われる。井戸枠に用いられた際の風化が激しいが、板材の両面とも平らに削ってあり、槍鉋や手斧の痕跡を認めないほど丁寧に仕上げている。35と37は下端部の角を一边12～20cm程度、切り欠いている。36は片面に下から18cmの箇所に何らかの部材の圧痕が認められる。40は下部から15cmほど手斧状のもので削り取っている。これらのことから、35と37の削り貫きが柱のあたり、40の下端部の削りが横材のあたりと考えると、この建築部材は厚さが7～8の床材と推定される。この部材がどの建物に使用されていたかについては、遺構検出した場所が建物2の基壇上であったため一応建物2と推定したが決め手を欠く。

5) その他(図版155 図29-41～51)

第109次調査の井戸29出土木製品で曲物底板2点(41-42)と箸(43～51)がある。曲物底板は板材を円形に加工したもので、側面はわずかに傾斜させる。41は直径12.1cmで厚さ0.6cm、42は直径11.7cmで厚さ0.6cmを測る。箸はすべて折れているため、長さは不明であるが、厚さ0.3～0.6cmの板材を幅0.5～0.9cmに割り、軽く面取りしたものである。頭部は平たく落とし、面取りする。脚部は細く尖らす。

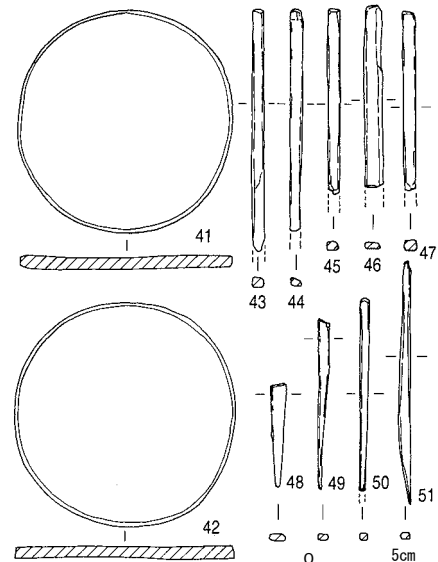


図29 第109次調査 井戸29出土木製品実測図(1:4)

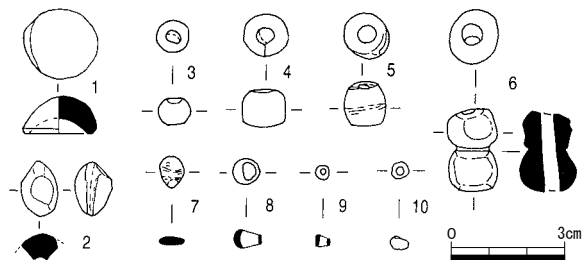


図30 第75・79・97・109次調査 玉類実測図(1:2)

6 玉類

1) 第75・79・97・109次調査出土(図版155 図30-1～10)

1は凸レンズ状の半球形で片面は内側に窪む。外面ともに丁寧に磨き上げられた水晶玉で、透明度は高い。大きさや丁寧な磨き方より、仏像の白毫と思われる。第97次調査で出土。2は欠損しているが、

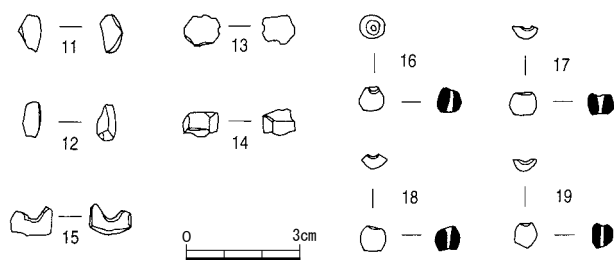


図31 第80次調査 玉類実測図(1:2)

球形で中心に小孔が開くガラス製の玉である。2次焼成を受け白く濁っている。第75次調査で出土。3～6と8～10はいずれも中心に小孔を穿つ。8～10は小粒である。5～7は暗緑色を呈する鉛ガラスである。5は螺旋状に白色の模様が付く。6は2個のガラス玉を接合し、瓢箪形を呈する。4はサンゴ製で褐灰色を呈する。3・9・10は灰白色を呈する真珠である。9は貝製と思われる。3～8、10は109次調査池16から出土。9は、第79次調査建物1地業内から出土。

2) 第80次調査 地鎮49出土(図版155 図31-11～19)

11～15は、いずれも、破損しているが、球の中心に孔を穿ったものである。灰白色を呈し、真珠である。16は完形であるが、17～19は半分に割れている。球形の中心に小孔を穿つ。いずれも無色透明で、水晶である。いずれも灰釉の壺内におさめられていた。

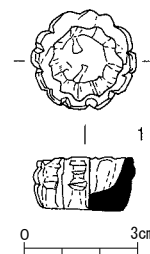


図32 第92次調査
滑石小碗実測図(1:2)

7 石製品

1) 滑石小碗(図32-1)

滑石を割り抜いて小碗としたもので、平たい底部に直立する体部を持つ。体部の内外面とも縦方向にキザミを入れ、花びら状に表す。口径5.6cm、器高2.8cmである。第92次調査の池14から出土した。

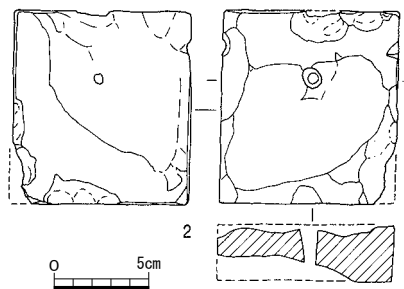


図33 第101次調査 温石実測図(1:4)

2) 温石(図33-2)

滑石を加工したもので、方形を呈する。上部に直径0.6cmの小孔を開けている。側面は丁寧に磨かれているが、上面下面とも破損している。煤によって黒色を帯びる。長辺10.0cm、短辺9.3cm、厚さ2.8cmである。第101次調査の溝35より出土した。

3) 線刻仏(図版155 図34-3)

長方形をした凝灰岩の切り石上面に甕状の工具で彫り窪めた粗い線で仏像を表現している。頭部は丸く、目鼻は簡潔である。体部は、肩・胴が一体化した線で表現し、昔から下方はその内側に腕を表していると思われる三角形の線彫りがある。脚部を省略している。残存長は縦48.8cm、横38.0cm、厚さ13.8cmで、大きさからみて元は建物基壇の化粧石に使用されていたと思われる。第109次調査の池16の洲浜25

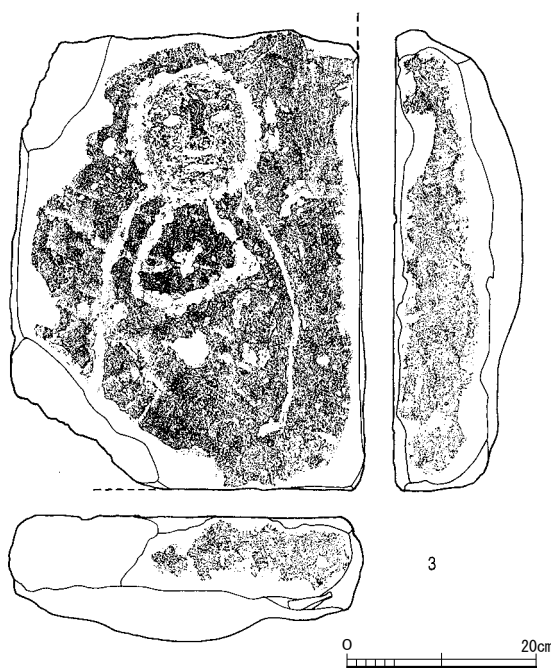


図34 第109次調査 線刻仏実測図(1:8)

上面から出土した。

- 註 1 今里幾次『播磨古瓦の研究』真陽社 1995 年
今里幾次「播磨国分寺式瓦の研究 加古川市野口町古大内出土の古瓦」『播磨郷土文化協会研究報告』
第 4 冊 1960 年（『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会再録 1980 年）
- 註 2 『木村捷三郎収集図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- 註 3 安藤文良『讃岐古瓦図録』（『文化財協会報』特別号 8）香川県文化財保護協会 1967 年
- 註 4 註 3 と同じ。
- 註 5 『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要』昭和 52 年度 京都市文化観光局 1978 年
- 註 6 『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要』昭和 61 年度 京都市文化観光局 1987 年
- 註 7 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977 年
- 註 8 註 7 と同じ。
- 註 9 『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1987 年
- 註 10 註 1 と同じ。
- 註 11 註 10 と同じ。
- 註 12 註 1 と同じ。
- 註 13 註 1 と同じ。
- 註 14 「鳥羽離宮跡出土軒瓦の整理」『埋蔵文化財発掘調査概報 1968』京都府教育委員会 1968 年
- 註 15 「若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査」『同志社大学文学部考古学調査報告』第 4
冊 同志社大学文学部文化学科 1971 年
- 註 16 註 14 と同じ。
- 註 17 註 7 と同じ。
- 註 18 「岸部瓦窯跡発掘調査概報 - 吹田市小路 -」『大阪府文化財調査概要 1967』大阪府教育委員会 1968
年
- 註 19 「西賀茂瓦窯跡」『平安京跡研究調査報告』第 4 輯 財団法人古代学協会 1978 年
- 註 20 「美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡範囲確認調査（第 3 次）」『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第
32 集 八幡市教育委員会 2002 年
- 註 21 「尾張国府跡」『尾張国府跡発掘調査報告書』（XI）稲沢市教育委員会 1989 年

第6章 ま と め

金剛心院跡の発掘調査は、中心をなす建物や園池を明らかにしたが寺跡の全容を知るまでには残念ながら至っていない。そのため、今までの調査で明らかにした成果を列記してまとめる。

1 遺 構

金剛心院の位置 今回報告する一連の遺構を、金剛心院跡と決定したよりどころは次のような根拠による。

第1に町名と史跡からの推定である。1960年度に鳥羽離宮跡の第2次調査が行われ建物遺構などが発見されたが、その地点は古くから「田中殿町」と呼ばれていた字名であった。他にも、鳥羽離宮を物語る字名として、浄菩提院町、秋ノ山町、御所ノ内町などいくつかみられる。

金剛心院の位置を記した史料に『兵範記』仁平三年四月二十日の条がある。これによれば、「件所、馬場殿北、田中新御所南大路南、往古田中也」あるいは「馬場殿北樹北、田中南北六十丈、東西五十丈点定」とある。すなわち、金剛心院は馬場殿の北側、田中殿の南側に位置していたことが判る。金剛心院関係の遺構は、ほぼ伏見区竹田小屋ノ内町で発見しているが、その北隣が先述した田中殿町である。

第2として、建物2が九体阿弥陀堂に復元できることである。鳥羽離宮に建立された九体阿弥陀堂を史料からみると、天承元年(1131)に供養された成菩提院の阿弥陀堂、久安三年(1147)八月十一日に供養された安楽寿院の阿弥陀堂、久寿元年(1154)八月九日に供養された金剛心院の九体阿弥陀堂の3棟がある。成菩提院の九体阿弥陀堂は七間四面の孫庇付で屋根は桧皮葺とあり、白河天皇陵(成菩提院陵)を供養するために建立されたものである。その場所は、現在の白河天皇陵の南側に推定している。安楽寿院九体阿弥陀堂は史料には九間四面とあるが、安楽寿院の位置は東殿に近接して建立された御堂であり、その位置は大きく違う。したがって、位置と建物の規模から建物2は金剛心院の九体阿弥陀堂とするのが妥当である。

第3として、寺域のほぼ中央で検出した建物1の身舎規模が、史料に記載されている釈迦堂の規模に符合することによる。

寺域と規模 寺域北限については、第76次調査区・第89次調査区・第90次調査区・第98次調査区・第106次調査区で東西方向の溝31を検出し、それより北側では鳥羽離宮関係の遺構・遺物は希薄でほとんどみられないため、この溝を寺域北限と推定した。しかし、この溝が築地の側溝かどうかについては堀の推定位置が現道路内にあたるためその存在を確認していない。

寺域西限については、第80次調査地・第99次調査地などで確認した築地13を考えている。この築地は地業を施した瓦葺きの築地である。

寺域南限についてはほとんど調査をしていないため明確でないが、城南宮北側で検出した池との関係などから溝35・溝36を南限と想定した。ただし、溝35と溝36との間が築地になるかど

うかについては不明である。

寺域東限については、池 14 の東側で発見した溝 34 を想定した。この溝は、南北 200m 以上にもおよび、しかも、溝 34 から以東は鳥羽離宮関係の遺構・遺物が全くみられなかったことによる。このように寺域の四至を復元すると金剛心院の寺域は、およそ南北 171m、東西 165m となり、南北方向が少し長くなる。また、3m を一丈として換算するとその寸法は南北約 57 丈、東西は約 55 丈になる。

一方、『兵範記』仁平三年四月二十日の条には金剛心院の規模が田中南北六十丈、東西五十丈点定とある。一丈を 3m に換算するとその寸法は南北 180m、東西 150m になる。両者の数値を比較すると、南北は 9m、東西は 15m の差が生じる。

寺域を想定した遺構の中で有力な基準となるのが築地 13 である。築地 13 を西限の基点として『兵範記』の東西五十丈（約 150m）を遺構図上に重ねあわせると東限は池 14 の中に位置する。また、南北方向については、溝 31 の少し南側を北限の基点として南へ六十丈（180m）を測ると溝 35 より南の位置になる。

なお、寺域の四至は、先述したように西限は瓦葺きの築地であったといえるが、東限については築地を想定するのは困難である。北限・南限については今後の調査で確認しなければならない課題の一つである。

遺構配置（図版 2 参照） 境内の建物や池などの配置については、正確な寺域が確定していないため、先述した復元案を拠りどころにその概要を述べる。

建物 1 は寺域中心からやや北東寄りに、建物 2 はやや西寄りに位置する。建物 1 と 2 との間には、建物 5 があり建物 1・2 を結び付けている。また、建物 1 の北東隅には建物 4 があり建物 3 と建物 1 とをつなぐ配置をとっている。建物 2 の北東隅や建物 5 の北辺には、建物 10・11 などの廊が取り付く。さらに、建物 2 南西隅には建物 7 とつなぐ廊があった。このように、各建物は独立しているが、雁行形にそれぞれ結びついていることが判る。

池 16 は、建物 2 を意識して設けられているが、その位置は寺域のほぼ中央部にあたる。また、池の北岸は、建物 2 や建物 5 を意識して修景されている。ただし、池 16 の東岸は、建物 1 南中央間の延長上に位置しているように思われる。

境内への出入りについては、境内南側で検出した建物 8 を金剛心院南門と推定しているが、建物や池の配置、境内周辺部の位置関係などから、寺域西側に正面で正式な門が設けられていたものと考えられる。なお、池 14 を利用した船での往来も充分可能であった。

建物 1・建物 2・建物 7 について 金剛心院跡では建物を 12 棟ほど検出したが、そのほとんどが礎石建物であった。建物 1 は道路で 4 つに分類されていたが、建物規模は身舎 2 間×3 間で四面に庇・孫庇がめぐる東西方向の建物に復元できる。建物 2 は、全体のおおよそ 1/3 程度しか調査を行っていないが、身舎 2 間×9 間で四面に庇がめぐり、北側はさらに孫庇が付く南北方向 12 間の長い建物に復元できる。この二間の建物は規模も大きく、しかも掘込地業によって構築した亀腹状基壇に建てられていた。

『兵範記』仁平三年四月二十日の条によれば、金剛心院内には釈迦堂と九体阿弥陀堂、御所それに10数棟の舎屋からなっていたとある。そして釈迦堂は三間四面、九体阿弥陀堂は九間四面とある。また、『本朝文集』におさめられている御堂の供養願文によれば、釈迦堂は瓦葺、二階三間四面堂舎、九体阿弥陀堂は瓦葺、二階九間四面堂舎とある。

建物規模や平面形などから先述したように、建物1は釈迦堂、建物2は九体阿弥陀堂であると考えた。そして、建物周辺部から出土した多量の瓦は、これらの建物に葺かれていたものである。

なお、建物7は九体阿弥陀堂の南、寺城南西部で発見した一間四面堂で保元二年(1157)に供養された新御堂と考えた。

池の広がり 金剛心院跡で発見した三箇所池は、いずれも南北方向に細長い形態であるが、離宮の造営以前からあった自然の池でなく人工的に造られたものである。

池16および池14は、それぞれ独立しているが、寺域の南側で二つは合流し、さらに南で自然の池と再度合流していることを、立会調査で確かめている。さらにこの池は、離宮西側に造営された北殿や南殿の園池へと連絡していた。一方、東方は成菩提院の南側へと続いていた。

ところでこのように大規模な池は、すべてが園池として機能していたとは考えられない。すなわち、南殿・北殿・勝光明院阿弥陀堂・金剛心院などにまたがる広大な池は、自然の池を基に御堂や御所が造営されるに伴い必要に応じた場所にだけ手を加えて園池としたものと考えられる。言い換えれば、園池と園池を結ぶ池はほとんど手を加えない自然の景観であったと考えている。

なお、池の規模や平面形については数箇所池の汀を確認しているが、その姿を完全に復元するまでに至っていない。

滝組18と溝63 滝組18を構成していた石のいくつかは、後世になって抜き取られてしまったが、それでも原位置を保つ2石が残っていたためおよそその旧状を知ることができた。滝口部の水を落としていた石は、上下二段からなっていたと考えている。調査で発見した石は滝口から落ちた水を受ける石であり、滝口を構成していた上段は、抜き取られてしまった。

この滝は、境内の地形が東に少し高くなっている地形と池の水位差を上手に利用して約1m落差を設けたものである。滝口周辺の標高は13.9m、対岸の船着場周辺部の標高は13.0m前後、九体阿弥陀堂(建物2)東側の池周辺では標高13.0～13.5m、釈迦堂(建物1)南辺では標高13.5m、一間四面堂(建物7)周辺部では13.5mで、滝はこうした微妙な高低差をうまく生かしている。このような平坦地の滝石組は、平安京内の邸宅などに設えられた滝とほぼ同様な手法がとられたと思われる。

滝の位置は、九体阿弥陀堂の中央間の東方にあたり、九体阿弥陀堂から眺めると橋17の延長線上にみることができる。滝から流れ落ちた水は、直接池に注ぎ込まず距離は短いが遺水状の溝63を経て後に池へ注ぎ込むように仕上げられている。溝63の底部は、池の東側にあり間近で人の目に触れることはあまり考えられないにも関わらず、玉石や扁平な川原石などを丁寧に敷き詰めている。また、流れの途中には水分け石を二箇所も設け意匠・施工ともしっかり仕上げられている。

このような状況や位置などから、この滝は境内の庭園の中でもかなり重要視されていることが想像される。なかでも、建物 6 は滝組 18・溝 63 を十分意識しており、建物と滝が一体となるように設計されたことを窺い知ることができる。

池 14・池 16 の景観 池 14 は、船着場 26 と滝組 18 とを東西に結ぶラインで景観が大きく変化する。北半部の池は、南半部では幅が 15m 前後であるのに対し急に 20m から 30m と広くなり、しかも汀の出入りや汀の意匠なども変化に富むようになる。また、建物 3 の南東部には、建物と池との間に景石も据え付けられている。すなわち、建物 1・建物 3・建物 4・建物 6 とその東側の庭園部分は、建物・庭が一体になるように演出された空間である。特に建物 4 から東側を望んだ場合、池への導水溝が出島 19 によって目立たないよう工夫されている。一方南半部は建物 6 から南へ離れるにしたがい汀ラインも直線的になり景石も減少し、水を湛えるだけの池に変わる。

池 16 の東岸は、残念ながらほとんど調査ができていないが、汀の意匠は西岸と同様に拳大の玉石を敷き詰めた洲浜に仕上げていていると考えている。また、九体阿弥陀堂身舎桁行方向の建物中軸線上には東西方向に橋が架けられている。こうした汀の洲浜意匠や阿弥陀堂と橋との関係などは、一般的にいわれる浄土式庭園とよく共通している。なお、池 16 も九体阿弥陀堂から南へ離れるにしたがって玉石敷きの洲浜は徐々にみられなくなると思われる。

景石の据付 景石は、九体阿弥陀堂東側の池 16、釈迦堂東側の建物 6 周辺、釈迦堂南側の池 15、釈迦堂南東隅周辺、釈迦堂北東の二棟廊（建物 4）東面などで発見している。これらの景石の据え付けには、次のような特徴がみられた。

池 15 や池 16 では、石の長軸を横方向に用い。池の汀線とほぼ併行になるよう据えている。石の約 1/4 程度を埋め込んでいる。

釣殿東側の石組 23 は、汀の土止めを兼ねるように据えているが、裏込めの痕跡はみられない。石は、長軸を横方向に向け中軸を用い、石の約 1/3 程度を池底に埋め込んでいる。一方、石組 22 の北半部の数個は、石の長軸を縦方向にして据え付けている。そのため、石の全長の 1/2 程度を埋めている。

出島 19 周辺部では、石の根本をわずかに堀窪めて据え付けている。西側では石の 1/4 程を埋めている。また、滝石組 18 では長さ 2m の石を地下へ 1m ほど埋め込んで据え付けている。

景石の重量 第 97 次調査では出土した景石の重量を計測した。計測は、ラフタークレーン内臓の計測器を使用した。そのため 100kg 単位の計測値となっているが、参考までに報告しておく。

計測したのは 47 個で、最小は 50kg、最大のものは 700kg であった。その平均重量は約 370kg である。滝組 18 で、接合できた石は 2,500kg であった。

第 109 次調査では、池 16 の汀線や洲浜 24 で 12 個の景石を発見した。最小のものは 200kg、最大のものは 800kg である。その平均重量は 450kg である。

橋 17 について 金剛心院境内に橋があったことは、『兵範記』久寿元年八月九日の条にみられる。この日は御堂供養の当日で「南東及橋南頭立握」とあり、また、「式部彈正出居座、在反橋南邊、池東畔立御経握、釈迦堂東此廊東西二行封座」と記されている。第 109 次調査で明らかにした。九体阿弥陀堂前の池 16 の橋脚（橋 17）は反橋であったことが判る。

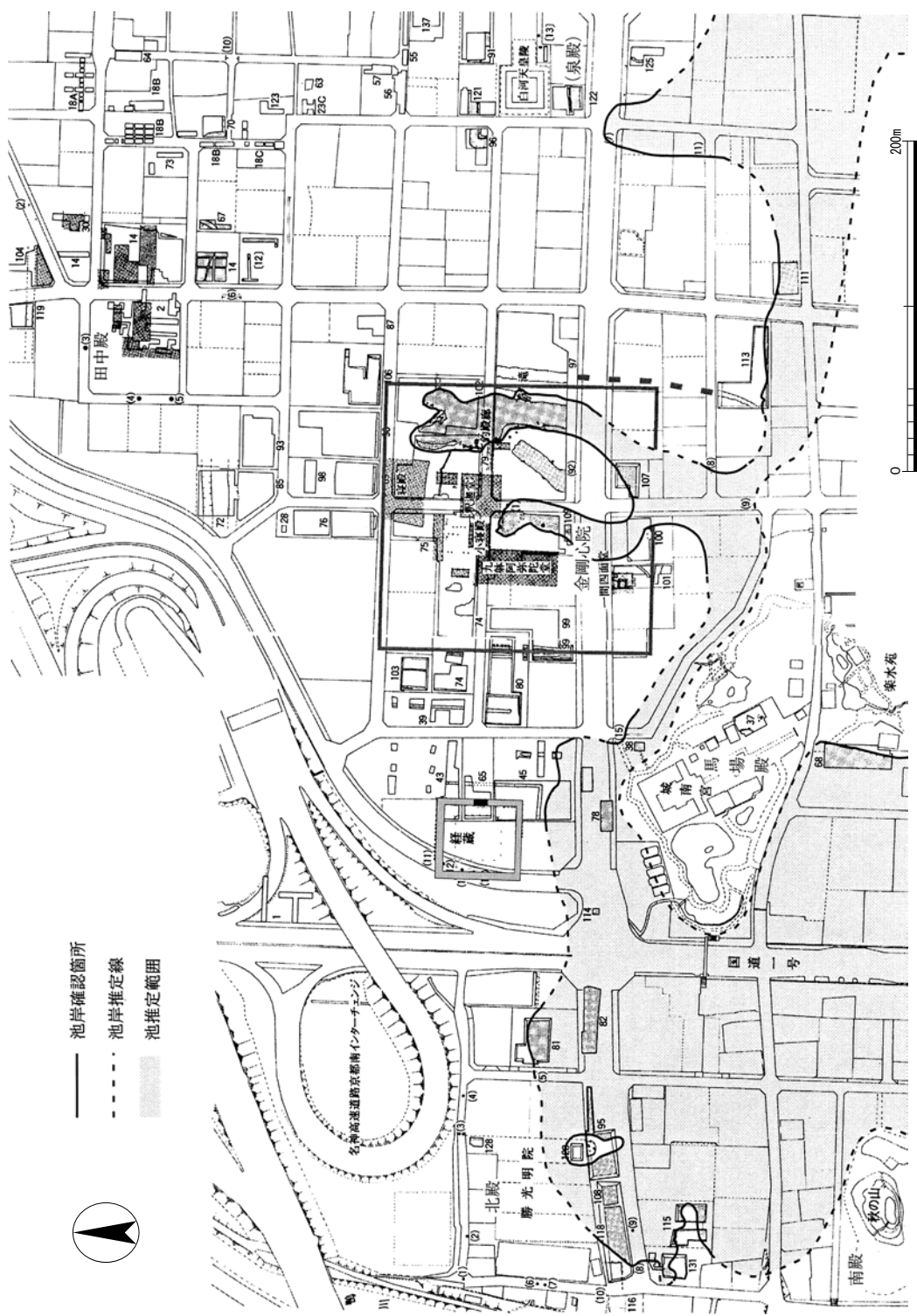


図 35 池復元図 (1:400)

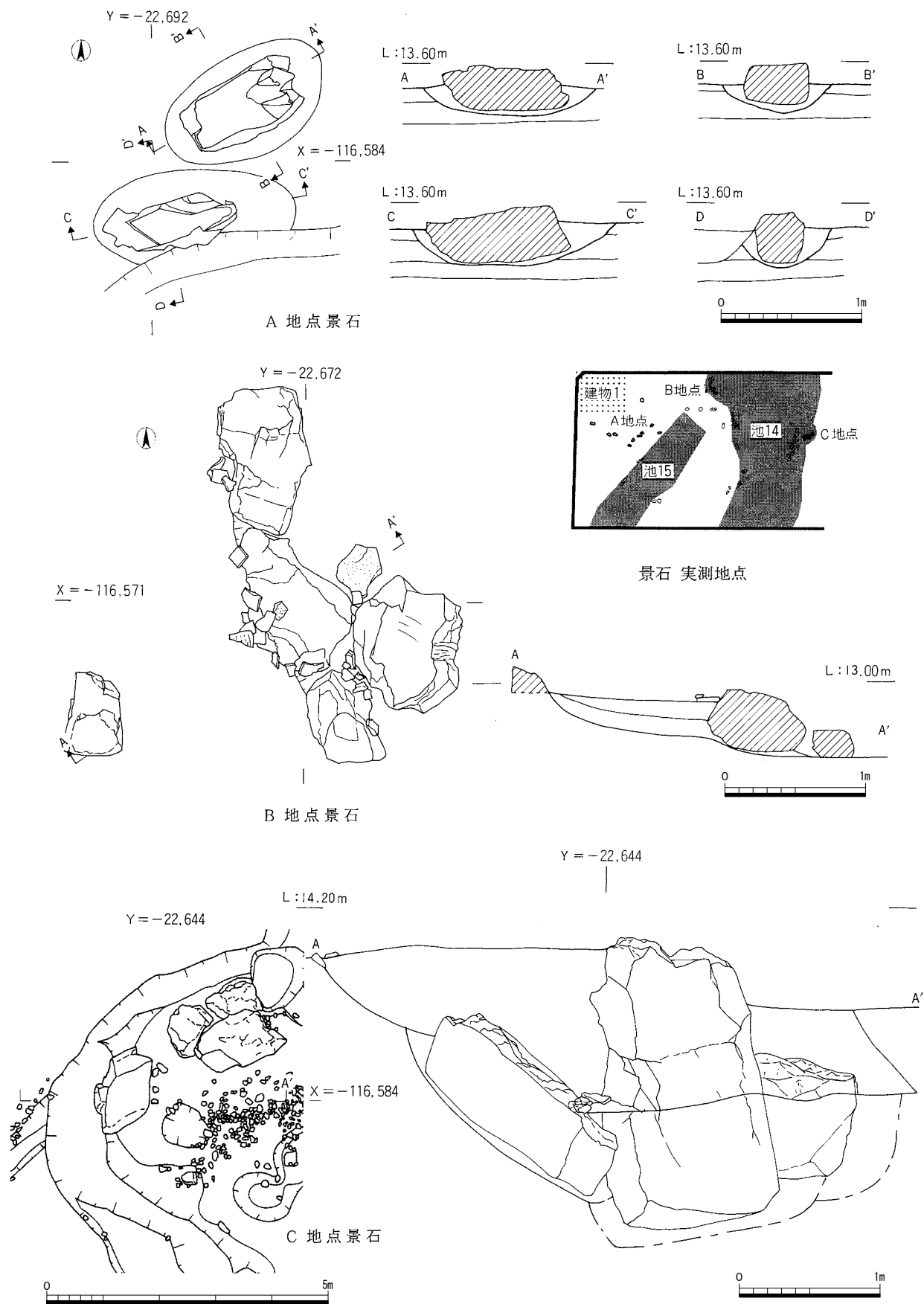


図 36 景石据え付け状況実測図 (第 97 次調査) (1:40) (1:100)

2 遺物

ここでは、もっとも遺物出土量が顕著であった瓦類について述べる。

今回報告した調査で出土した軒瓦の出土数は、軒丸瓦は 1,425 点、軒平瓦 997 点であった。それを出土点数順に生産地を列举すると、軒丸瓦では播磨系は約 58%、京都系 17%、讃岐系約 5%、南都系 1%弱である。軒平瓦についても播磨系 73%、京都系 8%、讃岐系 5%であった。軒丸瓦・軒平瓦ともに播磨系瓦が軒瓦出土総数の半数以上を占めることが判った。

丸瓦・平瓦については播磨系・讃岐系に二分されたが、京都系の丸・平瓦は出土していない。京都系軒瓦が、播磨系軒瓦に次いで多く出土している状況とは対比的である。また、京都系軒瓦は寸法も他の瓦より小型であり播磨系や讃岐系の瓦と一緒に使用することは難しいように思われる。こうした状況からすると、京都系の軒瓦は釈迦堂や九体阿弥陀堂などの瓦葺き建物に使用されたとは考えにくい。むしろ、寝殿などのような桧皮葺き建物の葺棟に用いられたと考えるのが妥当であろう。

軒瓦の瓦当文様は、軒丸瓦は 23 型式 40 種、軒平瓦は 21 型式 51 種に分類できたが、播磨系軒丸瓦 HM1 型式（複弁六弁蓮華文）は軒丸瓦出土総数の約 52%を占める。軒平瓦については、播磨系 HH1 型式（均整唐草文）が出土総数の約 66%を占めている。このことから金剛心院の主要建物は、HM1 型式の軒丸瓦と HH1 型式の軒平瓦がセットになって葺かれていたことが判った。次に多く出土した軒丸瓦は播磨系軒丸瓦 HM5・6 型式（三巴文）と讃岐系 SM2・3 型式（三巴文）であるが、いずれも瓦当文様は珠文のない大振りの三巴文を飾っている。これらの軒丸瓦とのセットが考えられる播磨系軒平瓦 HH9・10 型式（三巴文）や讃岐系 SH3 型式（三巴文）は共に三巴文を 5 個横に配する連巴文である。こうした状況は、これらの軒瓦についても生産地は異にするが、瓦当文様はなるべく統一しようとする意識が働いていたことが窺われよう。

ところで、軒丸瓦 HM1 型式は A から E までの 5 種に細分できるが、いずれも文様の寸法・細部表現・文様の彫りなどは大変良く似通っている。これとセットになる軒平瓦 HH1 型式は A から J までの 10 種に細分できるが、文様表現や彫りはいずれも非常に共通している。さらに、軒丸瓦 HM1 型式と軒平瓦 HH1 型式の文様表現や文様の彫りは共に類似しており、瓦当文様や瓦当范は同一場所で製作した可能性が極めて高い。瓦当文様の種類が多いのは、造営に必要な瓦を短期間に生産するために、複数の瓦生産窯に同時発注を実施した結果と想定できる。三巴文を飾る軒平瓦も、それに近い状況で生産されたことが窺えよう。そのためかこれらの軒瓦は、鳥羽離宮跡以外の院政期の遺跡からはあまり出土していない。

付 表

表 8 出土瓦一覧表

番号	出土地	種類	番号	出土地	種類	番号	出土地	種類
1	池 16	軒丸瓦	48	池 14	軒平瓦	95	その他	鬼瓦
2	土壇 65	軒丸瓦	49	土壇 42	軒平瓦	96	土壇 45	丸瓦
3	池 14	軒丸瓦	50	土壇 65	軒平瓦	97	土壇 45	丸瓦
4	池 14	軒丸瓦	51	池 16	軒平瓦	98	その他	丸瓦
5	池 14	軒丸瓦	52	池 16	軒平瓦	99	土壇 44	丸瓦
6	池 16	軒丸瓦	53	溝 38	軒平瓦	100	池 15	丸瓦
7	池 16	軒丸瓦	54	溝 37	軒平瓦	101	池 16	丸瓦
8	溝 40	軒丸瓦	55	溝 33	軒平瓦	102	池 16	丸瓦
9	池 14	軒丸瓦	56	溝 33	軒平瓦	103	池 16	丸瓦
10	建物 3	軒丸瓦	57	土壇 42	軒平瓦	104	池 16	丸瓦
11	溝 33	軒丸瓦	58	堤 69	軒平瓦	105	溝 32	丸瓦
12	土壇 45	軒丸瓦	59	池 16	軒平瓦	106	溝 32	丸瓦
13	築山 67	軒丸瓦	60	建物 2	軒平瓦	107	溝 32	丸瓦
14	土壇 44	軒丸瓦	61	建物 1	軒平瓦	108	土壇 50	丸瓦
15	土壇 44	軒丸瓦	62	その他	軒平瓦	109	溝 32	丸瓦
16	池 16	軒丸瓦	63	溝 33	軒平瓦	110	井戸 28	平瓦
17	池 16	軒丸瓦	64	池 16	軒平瓦	111	井戸 28	平瓦
18	土壇 65	軒丸瓦	65	築山 67	軒平瓦	112	井戸 28	平瓦
19	土壇 64	軒丸瓦	66	土壇 44	軒平瓦	113	井戸 28	平瓦
20	土壇 65	軒丸瓦	67	築山 67	軒平瓦	114	井戸 28	平瓦
21	池 14	軒丸瓦	68	建物 2	軒平瓦	115	井戸 28	平瓦
22	建物 3	軒丸瓦	69	雨落溝 57	軒平瓦	116	池 16	平瓦
23	その他	軒丸瓦	70	建物 1	軒平瓦	117	池 16	平瓦
24	池 14	軒丸瓦	71	その他	軒平瓦	118	池 16	平瓦
25	溝 36	軒丸瓦	72	土壇 50	軒平瓦	119	池 16	平瓦
26	土壇 65	軒丸瓦	73	その他	軒平瓦	120	池 16	平瓦
27	その他	軒丸瓦	74	建物 3	軒平瓦	121	池 16	平瓦
28	その他	軒丸瓦	75	土壇 65	軒平瓦	122	池 16	平瓦
29	池 14	軒丸瓦	76	建物 6	軒平瓦	123	池 16	平瓦
30	その他	軒丸瓦	77	溝 33	軒平瓦	124	池 16	平瓦
31	池 14	軒丸瓦	78	土壇 44	軒平瓦	125	その他	平瓦
32	土壇 45	軒丸瓦	79	土壇 65	軒平瓦	126	池 16	平瓦
33	その他	軒丸瓦	80	建物 2	軒平瓦	127	その他	平瓦
34	土壇 66	軒丸瓦	81	土壇 42	軒平瓦	128	その他	平瓦
35	土壇 65	軒丸瓦	82	土壇 44	軒平瓦	129	井戸 28	平瓦
36	土壇 65	軒丸瓦	83	土壇 42	軒平瓦	130	井戸 28	平瓦
37	土壇 65	軒丸瓦	84	池 14	軒平瓦	131	井戸 28	平瓦
38	土壇 66	軒丸瓦	85	建物 5	軒平瓦	132	井戸 28	平瓦
39	土壇 65	軒丸瓦	86	溝 36	軒平瓦	133	井戸 28	平瓦
40	雨落溝 57	軒丸瓦	87	土壇 65	軒平瓦	134	井戸 28	平瓦
41	池 14	軒丸瓦	88	池 16	軒平瓦	135	井戸 28	平瓦
42	土壇 42	軒平瓦	89	池 16	軒平瓦	136	井戸 28	平瓦
43	土壇 65	軒平瓦	90	土壇 44	軒平瓦	137	建物 3	軒丸瓦
44	池 16	軒平瓦	91	その他	軒平瓦	138	第 1 層	軒平瓦
45	池 14	軒平瓦	92	雨落溝 60	軒平瓦	139	石組 23	平瓦
46	池 16	軒平瓦	93	その他	軒平瓦	140	土壇 45	軒丸瓦
47	池 14	軒平瓦	94	その他	鬼瓦			

表9 遺構別瓦出土点数表

次数	遺構	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	鬼瓦	小計	合計
74	溝 33	6	15				21	
	土壇 64	29	16	5			50	
	その他	2	16				18	89
75	土壇 66	44	23			2	70	
	築山 67	7	6				13	
	築山 68	2	2			1	5	
	建物 1	5	4			1	10	
	建物 3	52	37		1		90	
	雨落溝 57	13	5				18	
	雨落溝 60	3	3				6	
	その他	10	8		2	1	21	233
76	その他		2				2	2
79	建物 1	11	8			1	20	
	建物 3	50	30	3	4		87	
	建物 4	2	1				3	
	柱列 47	7	6				13	
	土壇 42	47	45	1	1		94	
	土壇 65	199	113	1		5	318	
	池 14	76	46	1	1	2	126	
	井戸 27		2				2	
	井戸 28	5	4		46	1	56	
	溝 41		1				1	
	その他	40	24		4		68	788
80	溝 38		4				4	
	溝 39	1				1	2	
	土壇 50	2	3				5	
	土壇 51	1	7				8	
	暗渠 52	1	1				2	
	その他	11	30			1	42	63
89	溝 31		2				2	2
90	溝 31	1					1	
	その他	2					2	3
92	建物 1		1				1	
	土壇 44		2				2	
	池 14	3	1				4	
	池 15	1					1	
	その他	23	9				32	40

次数	遺構	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	鬼瓦	小計	合計
97	土壇 43	22	15			1	38	
	土壇 44	113	80	6		8	207	
	土壇 45	111	65	10		1	187	
	建物 1		1				1	
	建物 6	5	1	1		1	8	
	池 14	75	76	4		4	159	
	池 15	101	50	1		3	155	
	堤 69	38	27				65	
	溝 43	1	2				3	
	その他	47	17	2		1	67	890
99	溝 32	1	6				7	
	溝 33		1				1	
	その他	3	4				7	15
100	建物 8		1				1	1
101	溝 35		2				2	
	溝 36	2					2	
	その他	1					1	5
102	溝 40	1	2				3	
	池 14	25	22			3	50	
	池 14 土取穴	4	2			1	7	
	その他	6	5				11	71
103	溝 37	1					1	
	溝 38	3	3				6	
	その他	1	4				5	12
107	池 14	2					2	2
109	建物 1	1	1				2	
	建物 2	6	11				17	
	建物 2 上層	12	6			1	19	
	建物 5	1					1	
	井戸 29	8	1				9	
	井戸 30	2			4		6	
	池 16	152	86	10	18	8	274	
	橋 17	5	1				6	
	その他	19	8	1	4	1	33	367
合計		1,425	977	46	85	49	2,583	2,583

表 10 軒丸瓦計測表

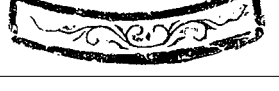
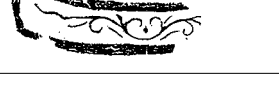
	型式 番号	番号	文様	全長 (cm)	瓦当 直径 (cm)	中房径 (cm)	蓮子数	内区径 (cm)	外区径 (cm)	文様深 (cm)	瓦当厚 (cm)	点数	点数 (%)
	HM1A	1	複弁六弁 蓮華文	37.0	14.9	5.0		11.4	2.0	0.7	1.9	162	12.1
	HM1B	2	複弁六弁 蓮華文		14.8	5.1		11.7	1.8	0.4	2.3	105	7.9
	HM1C	3	複弁六弁 蓮華文	36.0	14.6	5.1		11.3	2.3	0.5	2.1	198	14.9
	HM1D	4	複弁六弁 蓮華文	35.0	14.7	5.0		11.3	2.5	0.6	1.8	134	10.1
	HM1E	5	複弁六弁 蓮華文	33.0	14.5	5.2		10.9	2.2	0.5	1.9	136	10.2
	HM2A	6	複弁八弁 蓮華文		14.5	5.2	1+5	12.0	1.7	0.7	3.0	4	0.3
	HM3A	7	単弁八弁 蓮華文		14.0	5.5	1+8	11.2	1.4	0.5	1.2	2	0.2
	HM3B	8	単弁八弁 蓮華文		13.2	6.0		10.3	1.5	0.6	2.7	5	0.4
	HM4A	9	三巴文		13.7			8.6	2.7	0.5	2.1	1	0.1
	HM5A	10	三巴文					13.0		0.4	2.7	37	2.7
	HM5B	11	三巴文		15.8			13.0	1.1	1.2	2.4	15	1.1

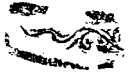
	型式 番号	番号	文様	全長 (cm)	瓦当 直径 (cm)	中房径 (cm)	蓮子数	内区径 (cm)	外区幅 (cm)	文様深 (cm)	瓦当厚 (cm)	点数	点数 (%)
	HM5C	12	三巴文		14.7			12.1	1.1	1.1	1.7	10	0.8
	HM6A	13	三巴文		15.1			12.9	1.1	0.6	2.4	12	0.9
	HM6B	14	三巴文		15.0			12.9	1.0	0.6	2.4	4	0.3
	HM6C	15	三巴文		14.9			13.0	0.9	0.5	3.3	5	0.4
	SM1A	16	単弁蓮華文			6.0			1.3	0.8	1.5	1	0.1
	SM2A	17	三巴文		15.7			12.5	1.2	0.8	2.8	34	2.5
	SM2B	18	三巴文		16.1			13.8	1.2	0.5	2.8	28	2.1
	SM3A	19	三巴文		15.6			13.4	1.0	0.8	1.5	2	0.2
	SM3B	20	三巴文		15.9			13.4	1.2	1.2	2.3	3	0.2
	KM1A	21	複弁八弁蓮華文		13.6	4.9	1+8	8.8	2.5	1.2	2.9	2	0.2
	KM2A	22	複弁六弁蓮華文		13.2	5.3	1+6	10.3	1.4	1.0	1.8	11	0.8

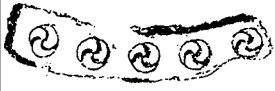
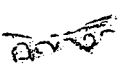
	型式 番号	番号	文様	全長 (cm)	瓦当 直径 (cm)	中房径 (cm)	蓮子数	内区径 (cm)	外区幅 (cm)	文様深 (cm)	瓦当厚 (cm)	点数	点数 (%)
	KM3A	23	複弁六弁 蓮華文		13.8	4.2	1+4	8.2	3.1	1.1	1.8	1	0.1
	KM4A	24	単弁四弁 蓮華文						3.6	0.4	1.7	2	0.2
	KM5A	25	単弁蓮華 文						2.2	0.3	1.4	1	0.1
	KM6A	26	単弁七弁 蓮華文		12.1	5.0	1+4	10.1	1.0	0.5	1.7	54	4.0
	KM7A	27	蓮華文			4.1	1+4		0.9	0.4	1.6	3	0.2
	KM8A	28	蓮華文						0.9	0.3		8	0.6
	KM9A	29	三巴文		14.5			11.5	1.5	0.6	1.8	72	5.4
	KM9B	30	三巴文						3.0	0.4	1.3	1	0.1
	KM9C	31	三巴文							0.5		1	0.1
	KM10A	32	三巴文						2.9	0.3	1.6	1	0.1
	KM10B	33	三巴文									11	0.8

	型式 番号	番号	文様	全長 (cm)	瓦当 直径 (cm)	中房径 (cm)	蓮子数	内区径 (cm)	外区幅 (cm)	文様深 (cm)	瓦当厚 (cm)	点数	点数 (%)
	KM11A	34	四巴文		13.4			10.0	1.7	0.7	1.5	4	0.3
	KM12A	35	三巴文		13.5			10.1	1.7	0.5	2.0	45	3.4
	KM13A	36	三巴文		14.6			12.3	1.1	0.5	2.4	8	0.6
	KM13B	37	三巴文		13.2			10.8	1.2	0.6	2.0	4	0.3
	KM14A	38	三巴文		12.0			9.7	1.2	0.5	2.5	1	0.1
	KM14B	39	三巴文		11.2			8.9	1.2	1.1	2.7	12	0.9
	KM14C	40	三巴文		11.6			8.6		1.1	2.1	6	0.5
	NM1A	41	複弁蓮華 文								1.9	1	0.1
—	不明											181	13.6

表 11 軒平瓦計測表

	型式 番号	番号	文様	全長 (cm)	横幅 (cm)	高さ (cm)	瓦当厚 (cm)	内区幅 (cm)	外区幅 (cm)	文様深 (cm)	点数	点数 (%)
	HH1A	42	唐草文		25	5	1.8	23	1.3	0.5	99	10.6
	HH1B	43	唐草文		24	2	5.6	22.0	1.3	0.4	35	3.8
	HH1C	44	唐草文	35	24	6	1.6	22	1.2	0.3	100	10.7
	HH1D	45	唐草文	34	25	5	2.1	23	1.0	0.3	77	8.3
	HH1E	46	唐草文	35	25	6	2.0	22	1.3	0.5	73	7.9
	HH1F	47	唐草文	34	25	6	2.1	22	0.8	0.3	70	7.5
	HH1G	48	唐草文	34	25	6	1.9	22	1.2	0.3	25	2.7
	HH1H	49	唐草文		25	6	2.2	23	1.1	0.5	143	15.4
	HH1I	50	唐草文		24	6	1.8	22	0.9	0.4	9	1.0
	HH1J	51	唐草文		25	6	2.2	22.0	1.1	0.4	9	1.0
	HH2A	52	唐草文		23	5	1.8	22	0.5	0.4	5	0.5
	HH3A	53	唐草文		24.0	5	2.1			0.5	1	0.1
	HH4A	54	唐草文		24	5	2.3	20	1.2	0.7	3	0.3
	HH4B	55	唐草文			5.0	2.1		1.8	0.7	11	1.2

	型式 番号	番号	文様	全長 (cm)	横幅 (cm)	高さ (cm)	瓦当厚 (cm)	内区幅 (cm)	外区幅 (cm)	文様深 (cm)	点数	点数 (%)
	HH4C	56	唐草文			5	2.5		2.5	0.4	10	1.1
	HH4D	57	唐草文			5.0	2.5			0.7	1	0.1
	HH5A	58	唐草文		20.0	5	2.6	17.0	1.0	0.5	1	0.1
	HH5B	59	唐草文			5	2.2		1.0	0.5	1	0.1
	HH6A	60	唐草文			4	1.9		0.8	0.3	1	0.1
	HH7A	61	唐草文				1.7			0.6	1	0.1
	HH8A	62	唐草文			5	1.6		1.1	0.5	2	0.2
	HH8B	63	唐草文			5	2.1		0.8	0.4	2	0.2
	HH9A	64	連巴文		25	5	2.1	22	2.0	0.4	7	0.8
	HH9B	65	連巴文		24	5.0	2.1	21	2.0	0.6	4	0.4
	HH9C	66	連巴文			5	2.2		1.5	0.4	4	0.4
	HH9D	67	連巴文			5.0	1.5		1.5	0.6	3	0.3
	HH10A	68	連巴文		26	5	2.2	20	2.9	0.5	8	0.9
	HH10B	69	連巴文			5	2.6		3.0	0.5	6	0.6

	型式 番号	番号	文様	全長 (cm)	横幅 (cm)	高さ (cm)	瓦当厚 (cm)	内区幅 (cm)	外区幅 (cm)	文様深 (cm)	点数	点数 (%)
	SH1A	70	唐草文			6.0			1.0	0.3	3	0.3
	SH2A	71	唐草文			5.0			0.6	0.3	2	0.2
	SH3A	72	連巴文		27	6.0		21.0	2.7	0.5	27	2.9
	SH3B	73	連巴文		27	6.0		21.0	2.7	0.5	14	1.5
	SH3C	74	連巴文			5.0			2.2	0.5	3	0.3
	KH1A	75	唐草文			4.0	1.6		0.7	0.2	6	0.6
	KH2A	76	唐草文							0.2	1	0.1
	KH3A	77	唐草文			3.0	1.5			0.3	1	0.1
	KH4A	78	連巴文			4.0	1.6			0.2	7	0.8
	KH5A	79	劍巴文		22	2.0	4.2	19	1.6	0.3	4	0.4
	KH5B	80	劍巴文			4.0	1.4			0.2	1	0.1
	KH6A	81	劍巴文		23	5.0	1.9	21	1.1	0.3	13	1.4
	KH6B	82	劍巴文			6.0	2.3			0.4	8	0.9
	KH7A	83	劍巴文		24.0	5.0	2.2	22	0.9	0.3	3	0.3

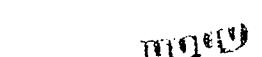
	型式番号	番号	文様	全長 (cm)	横幅 (cm)	高さ (cm)	瓦当厚 (cm)	内区幅 (cm)	外区幅 (cm)	文様深 (cm)	点数	点数 (%)
	KH7B	84	剣巴文	31	24	5.0	2.2	22	0.9	0.3	2	0.2
	KH7C	85	剣巴文		22	5.0	1.8	20	0.8	0.4	2	0.2
	KH8A	86	剣頭文		17	4.0	1.6			0.3	1	0.1
	KH8B	87	剣頭文		22	5.0	1.8			0.3	17	1.8
	KH8C	88	剣頭文			4.0	1.9			0.4	1	0.1
	KH8D	89	剣頭文			3.0	1.8			0.4	1	0.1
	KH8E	90	剣頭文			4.0	3.8			0.3	5	0.5
	KH8F	91	剣頭文			4.0	1.5			0.3	2	0.2
	KH8G	92	剣頭文			3.0	1.3			0.2	1	0.1
	KH9A	93	唐草文							0.5	1	0.1
	不明										140	14.33

表 12 土製円塔計測表

番号	残存直径 (cm)	復原直径 (cm)	残存高 (cm)	重量 (g)	調査次数	出土地点
1	2.9	3.6	1.3	9.594	79 次	建物 1
2	2.9	3.8	1.2	9.356	79 次	土壌 42
3	3.7	3.8	1.4		79 次	土壌 42
4	3.2	3.6	1.3	12.420	79 次	池 14
5	3.7	3.6	1.4		79 次	池 14
6	3.3	3.8	1.3	9.628	79 次	池 14
7	3.5	3.5	1.4	12.701	79 次	池 14
8	3.0	3.7	1.2	9.695	79 次	池 14
9	2.9	3.5	1.3	8.670	97 次	土壌 44
10	3.3	3.4	1.3	9.970	97 次	土壌 44
11	3.4	3.4	1.3	11.418	97 次	土壌 44
12	2.6	3.7	1.2	6.121	97 次	土壌 44
13	2.9	3.3	1.4	10.843	97 次	土壌 44
14	2.8	3.3	1.4	70.418	97 次	土壌 44
15	3.1	3.3	1.5	10.062	97 次	土壌 44
16	2.9	3.2	1.3	9.205	97 次	土壌 44
17	3.1	3.3	1.4	10.852	97 次	土壌 44
18	3.1	3.3	1.4	11.544	97 次	土壌 44
19	3.5	3.6	1.4	11.148	97 次	土壌 44
20	3.8	4.2	1.8	18.337	97 次	土壌 44
21	3.4	3.4	1.3	11.317	97 次	土壌 44
22	3.2	3.4	1.2	9.577	97 次	土壌 44
23	3.3	3.3	1.4	12.568	97 次	池 15
24	3.4	3.4	1.5	12.633	97 次	池 15
25	3.3	3.3	1.4	12.131	97 次	第 2 層
26	2.5	3.2	1.5	7.010	97 次	土壌 45
27	4.0	4.0	1.7	19.659	97 次	土壌 45
28	3.5	3.5	1.3	12.223	109 次	第 1 層
29	3.1	3.5	1.2	9.680	109 次	池 16
30	3.4	3.4	1.3	11.317	109 次	池 16

表 13 仏教遺物・木製品計測表

番号	名称	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)
1	垂飾	20.3	5.5	－
2	垂飾	21.6	5.0	－
3	垂飾	14.4	4.5	－
4	宝相華葉	9.8	5.0	0.5
5	宝相華葉	11.4	4.7	0.8
6	蓮弁	8.4	4.6	0.5
7	蓮弁	8.5	4.6	0.7
8	蓮弁	10.5	5.3	0.7
9	蓮華座残片	16.0	7.7	1.5
10	蓮弁	5.3	5.3	0.6
11	宝相華蔓	9.6	2.6	0.8
12	宝相華蔓	6.7	2.1	0.8
13	宝相華蔓	7.8	2.1	1.1
14	宝相華蔓	9.4	2.6	0.7
15	宝相華茎	20.3	4.3	3.7
16	漆製品	5.5	1.7	－
17	漆製品	10.5	2.2	－
18	漆製品	5.3	2.0	－
19	漆製品	22.8	3.1	1.0
20	八葉蓮華	直径 31.9	－	0.9

表 14 金属製品計測表

番号	名称	高さ(長さ)×幅(cm)	厚さ (cm)	調査次数	出土地点
1	鴛鴦文金具	12.2 × 25.7	0.10	109 次	建物 2
2	唐草文金具	1.3 × 15.6	0.10	97 次	池 15 第 2 層
3	金具	4.6 × 1.8	0.10	79 次	建物 1
4	金具	9.1 × 1.6	0.40	79 次	建物 3
5	金具	4.4 × 1.6	0.20	97 次	第 2 層
6	金具	4.4 × 2.6	0.20	109 次	池 16 第 2 層
7	金具	2.5 × 2.4	0.20	97 次	第 2 層
8	珠文金具	3.4(直径)	0.10	97 次	池 15 第 2 層
9	珠文金具	3.5(直径)	0.10	97 次	第 2 層
10	珠文金具	3.4(直径)	0.10	97 次	池 15 第 2 層
11	珠文金具	3.6(直径)	0.10	97 次	池 15 第 2 層
12	珠文金具	2.8(直径)	0.10	109 次	池 16 第 2 層
13	方形金具	9.1(一辺)	0.30	92 次	池 14
14	瓔珞	8.9 × 7.3	－	101 次	溝 35
15	瓔珞	4.7 × 4.3	－	109 次	池 16
16	瓔珞	4.6 × 2.4	－	97 次	池 15 第 2 層
17	瓔珞	4.7 × 2.6	0.10	97 次	池 15 第 2 層
18	瓔珞	3.5 × 3.2	0.10	97 次	池 15 第 2 層
19	瓔珞	2.6 × 1.1	0.10	97 次	池 15 第 2 層
20	鈴	2.5 × 1.9	1.40	109 次	池 16 第 2 層
21	風招形	2.1 × 5.4	0.02	97 次	池 14
22	風招形	3.6 × 6.0	0.20	97 次	池 15
23	銅製小型釘	1.1		109 次	池 16
24	銅製小型釘	1.1		109 次	池 16
25	銅製小型釘	1.0		109 次	池 16
26	銅製小型釘	1.1		109 次	池 16
27	銅製小型釘	0.4		109 次	池 16
28	銅製小型釘	3.2		109 次	池 16
29	銅製小型釘	2.2		109 次	池 16
30	銅製小型釘	2.1		109 次	池 16
31	銅製小型釘	1.8		109 次	池 16
32	銅製小型釘	1.6		109 次	池 16
33	銅製小型釘	1.6		109 次	池 16
34	銅製小型釘	1.6		109 次	池 16
35	銅製小型釘	1.6		109 次	池 16
36	銅製小型釘	1.5		109 次	池 16
37	銅製小型釘	1.5		109 次	池 16
38	銅製小型釘	1.4		109 次	池 16
39	銅製小型釘	1.3		109 次	池 16
40	銅製小型釘	1.4		109 次	池 16
41	銅製小型釘	1.2		109 次	池 16
42	銅製小型釘	1.3		109 次	池 16

番号	名称	長さ (cm)	短幅 (断面) × 長幅 (cm)	頭部の長さ (cm)	重量 (g)	調査回数	出土地点
43	鉄製釘	17.6	0.9 × 1.1	2.1	67.1	97 次	土壙 44
44	鉄製釘	12.8	0.4 × 0.5	—	11.7	97 次	土壙 44
45	鉄製釘	9.4	0.4 × 0.6	1.2	21.9	97 次	土壙 44
46	鉄製釘	9.6	0.9 × 1.0	1.7	44.6	97 次	土壙 44
47	鉄製釘	8.3	0.6 × 0.7	1.5	26.2	97 次	土壙 44
48	鉄製釘	7.3	0.6 × 0.6	1.4	10.2	97 次	土壙 44
49	鉄製釘	6.7	0.4 × 0.5	1.2	7.7	97 次	土壙 44
50	鉄製釘	8.6	0.5 × 0.6	—	37.2	97 次	土壙 44
51	鉄製釘	8.6	0.6 × 0.8	—	20.2	97 次	土壙 44
52	鉄製釘	3.5	0.3 × 0.5	—	4.0	97 次	土壙 44
53	鉄製釘	3.6	0.5 × 0.6	—	3.4	97 次	土壙 44
54	鉄製釘	5.2	0.4 × 0.6	0.9	4.9	97 次	土壙 44
55	鉄製釘	7.2	0.4 × 0.6	—	13.6	97 次	土壙 44
56	鉄製釘	8.0	0.5 × 0.6	—	24.5	97 次	土壙 44
57	鉄製釘	7.1	0.4 × 0.5	—	20.2	97 次	土壙 44
58	鉄製釘	7.0	0.3 × 0.4	0.6	5.4	97 次	土壙 44
59	鉄製釘	6.1	0.4 × 0.6	—	15.2	97 次	土壙 44
60	鉄製釘	12.0	0.7 × 0.7	4.0	104.6	97 次	土壙 44
61	鉄製釘	5.5	0.5 × 0.6	—	10.5	97 次	土壙 44
62	鉄製釘	4.5	0.5 × 0.7	—	4.2	97 次	土壙 44
63	鉄製釘	4.8	0.6 × 0.7	—	4.6	97 次	土壙 44
64	鉄製釘	6.2	0.3 × 0.4	1.2	14.7	97 次	土壙 44
65	鉄製釘	8.5	0.4 × 0.5	—	9.1	97 次	土壙 44
66	鉄製釘	7.8	0.6 × 0.7	—	16.9	97 次	土壙 44
67	鉄製釘	6.6	0.5 × 0.6	—	9.8	97 次	土壙 44
68	鉄製釘	3.2	0.5 × 0.6	—	2.6	97 次	土壙 44
69	鉄製釘	3.6	0.4 × 0.5	—	5.9	97 次	土壙 44
70	鉄製釘	7.2	0.4 × 0.5	—	8.4	97 次	土壙 44
71	鉄製釘	10.5	0.3 × 0.4	1.2	17.5	97 次	土壙 44

表 15 銭貨計測表

番号	名称	直径	厚さ (cm)	調査回数	出土地
72	銭貨 (祥符通寶)	2.4	0.1	79 次	建物 1
73	銭貨 (天聖元寶)	2.4	0.1	79 次	建物 1
74	銭貨 (天聖元寶)	2.4	0.1	79 次	建物 1
75	銭貨 (紹聖元寶)	2.3	0.1	79 次	建物 1

表 16 調査地一覧

番号	調査次数	旧住所	新住所
1	74 次 I	伏見区竹田小屋ノ内町 22、56、59-1	伏見区竹田西小屋ノ内町 23、24
2	74 次 II	伏見区竹田小屋ノ内町 64-3	伏見区竹田西小屋ノ内町 21
3	75 次	伏見区竹田田中殿町 42-1、 竹田小屋ノ内町 63-1、64-1、66-1	伏見区竹田西小屋ノ内町 17、19、20、18
4	76 次	伏見区竹田小屋ノ内町	伏見区竹田西小屋ノ内町
5	79 次	伏見区竹田小屋ノ内町 66-2、67	伏見区竹田東小屋ノ内町 9、10
6	80 次	伏見区竹田小屋ノ内町 55-2	伏見区竹田西小屋ノ内町 26
7	89 次	伏見区竹田田中殿町 29	伏見区竹田東小屋ノ内町 2
8	90 次	伏見区竹田小屋ノ内町 80	伏見区竹田東小屋ノ内町 3
9	92 次	伏見区竹田小屋ノ内町 45-1、46 ～ 48-2 竹田浄菩提院町 42-1	伏見区竹田東小屋ノ内町 61、59 ～ 58、60
10	97 次	伏見区竹田浄菩提院町 42-1、 竹田小屋ノ内町 6、26、33-3、34、 45-1、46 ～ 48-2	伏見区竹田東小屋ノ内町 60、63、64、65、 62、61、59 ～ 58
11	99 次	伏見区竹田小屋ノ内町 53-1、54-1	伏見区竹田西小屋ノ内町 28、33
12	100 次	伏見区竹田小屋ノ内町	伏見区中島鳥羽離宮町
13	101 次	伏見区竹田小屋ノ内町 44	伏見区中島鳥羽離宮町 16
14	102 次	伏見区竹田小屋ノ内町 68-1・2・3	伏見区竹田東小屋ノ内町 12・15・16
15	103 次	伏見区竹田小屋ノ内町 61-2	伏見区竹田西小屋ノ内町 12
16	106 次	伏見区竹田小屋ノ内町 77	伏見区竹田東小屋ノ内町 7
17	107 次	伏見区竹田小屋ノ内町 43-1・2	伏見区竹田東小屋ノ内町 67・86
18	109 次	伏見区竹田浄菩提院町 79、 竹田小屋ノ内町 49	伏見区竹田西小屋ノ内町 32・31

付章 1 鳥羽離宮跡出土の仏教遺物

伊 東 史 朗

はじめに

数次にわたる鳥羽離宮遺跡の発掘調査により仏像・仏具、あるいは建造物の一部が出土しているが、小断片が多く全貌が把握できないものがほとんどである。以下はそのような遺品を木製品と金属製品に分けて形状や技法の記述をし、さらに可能なものは考えられる復元案を述べようとするものである。大きさの単位は cm。

1 木製品

1) 金剛心院跡（図版 63）

垂飾（1～3）3 旒

1 長 20.3 幅 5.5 2 長 21.6 幅 5.0 3 長 14.4+12.0 幅 4.5

釈迦堂の南、九体阿弥陀堂東の池堆積土から検出された帯状の垂飾である。三旒がまとまって出土しているので、一連の遺物と判断される。二旒は途中で折れ曲がっているが、残る一旒（2）は根元が委縮し、少々湾曲しているもののほぼまっすぐである。いずれも同形・同大の同じ規格のようで、大きさの現状最大値は、長さは（3）で 26.4cm、幅は（1）で 5.5cm あり、もう少し長かったともいえようが、幅はこの程度かと推定される。意匠は宝相華唐草を透彫りするもので、側面花形が下向きに等間隔に置かれ、その間を蔓・葉でつないでいる。これは院政期の仏教美術によくある模様だが、本例では透かされた空間が広く、また唐草相互の絡みや重なりなどの立体的表現がないという特徴がある。久寿元年（1154）の峰定寺千手観音像光背の透彫光背文様に近い。

厚さは 2～3 mm 程度できわめて薄い。漆をへうで盛り上げ整形して薄浮彫りとし、漆箔仕上げとする。あまりに薄いので、胎として

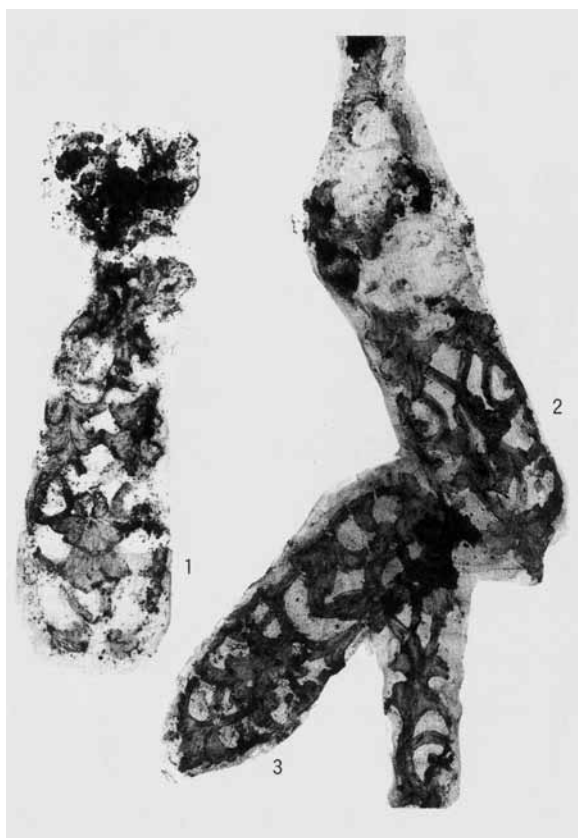


図 37 垂飾の X 線透過写真

何が使われているか判別困難だが、わずかに木片が窺え、また X 線透過写真（図 37）は出土の際のネットがともに写って分かりにくいけれど、かすかに写っている木目からやはり木胎かと思われる。

この形状に合致する出土遺品はなく、伝世品でもこのような形態（垂飾）のものは見出せない。垂飾という観点から強いて挙げれば幡足であろうが、類似した形のものがあるわけではない。ほかに考えるものとして、院政期仏画によく描かれる天蓋からの垂飾ともいえようが、これも類品がないので推測の域を出ない。

光背・台座等断片（4～15）

上記と同じ場所からまとめて出土しているが、大きさに統一性がないのでお互いに関連するものとは必ずしもいえない。複数の遺品が一定範囲内に出土していることから、意図的に遺棄された印象がある。いずれも木造（針葉樹〈ヒノキか〉材）、漆箔仕上げである。

宝相華葉（4） 1 個 表裏に彫刻あり。薄手で同一方向にのびるので、光背周縁部の宝相華唐草の一部か。長 9.8cm。

宝相華葉（5） 1 個 表裏に彫刻あり。上に比べて彫りは深いが、菩薩の持物（蓮華）というほどの立体感がないので、やはり光背周縁部の宝相華唐草の一部か。長 11.4cm。

蓮弁（6） 1 個（一枚分） 基部が少し減損しているが、ほぼ完形。薄手で緩い湾曲あり。蓮華座の蓮弁。長 8.4cm。

蓮弁（7） 1 個（一枚分） 基部が少し減損しているが、ほぼ完形。薄手で緩い湾曲あり。蓮華座の蓮弁。長 8.5cm。

蓮弁（8） 1 個（一枚分） 完形品。薄手で緩い湾曲あり。蓮華座の蓮弁。10.5cm。

蓮華座残片（9） 1 個 輪郭は緩い曲線を描き、面には照りむくりがある。蓮華座の華盤の一部か。最大長 16cm。

蓮弁（10） 1 個（二枚分） 少し重なって左右に隣り合う蓮弁二枚。横木一材から彫出されており、かつ湾曲して裏面にも彫刻がある。これに続く蓮弁とともに蓮華（間隔からして八葉でない）の一部と推定される。蓮華座の一部か。長 5.3cm、幅 5.3cm。

宝相華蔓（11） 1 個 蔓の先端。裏面を窪ませるが蔓自体は平面的にのびるので、宝相華唐草の一部と考えられる。長 9.6cm。

宝相華蔓（12） 1 個 蔓の先端。裏面を少し窪ませる。宝相華唐草の一部と考えられる。長 7.4cm

宝相華蔓（13） 1 個 蔓の先端。宝相華唐草の一部。長 7.8cm。

宝相華蔓（14） 途中で割損し、現状 2 個 蔓の先端。裏面を少し窪ませる。蔓の方向に対して木目が直角方向の横木を使っているので、広がりのある透彫りの一部分であろう。宝相華唐草の一部と考えられる。長 9.4cm。

宝相華茎（15） 1 個 相對する二枚の葉の間から出る茎の一部。表裏均等に彫刻されて丸彫りといってよいが、茎が平面上にのび、かつ木目がその方向に合っていないので、広がりのある

透彫りの一部分であろう。仏具や仏像持物（蓮華）でなく光背周縁部の宝相華唐草の一部と考えられる。長20.3cm。

以上のうち、4・5・11～15は宝相華唐草の透彫りで光背の一部を構成していたと推測される。小断片だが、中には丈六像用の光背とみて良いものもある。文様の種類は宝相華唐草だけで、雲や飛天のないことに注目される。この時代の光背の意匠は、雲と植物（宝相華）を主要な構成要素とし、そのうち定朝が創めた「飛天光」は、二重円相部が雲か植物（宝相華唐草）で、周縁部が飛天と雲からなる。一方、雲や飛天を伴わない「唐草光」の場合は、二重円相部・周縁部ともに植物（宝相華）だけで構成される。したがって、ここに挙げた遺物は同一形式の光背ではなかろうが、雲や飛天のまったくないことからして、「唐草光」が多くを占めていたらしいといえ、考察にあたって重要な視点である。

「唐草光」の典型例である奈良県円成寺阿弥陀如来像（平安時代後期）の光背は、二重円相部・周縁部ともに宝相華唐草で構成されており（図38）、本遺品を復元的に考える際の参考となる。

6～9は台座連弁だが、かなり小さいので、三尺立像の程度の仏像台座所用であろう。

10は連弁二枚を連続して彫り出しており台座所用としてもかなり小さい。このように連続する蓮弁として中尊寺伝来の三連のもの（図39）があり、これも重ねて行けば蓮華が構成されるが、一段三方なのであまり大きなものでない。

八葉蓮華(20) 1枚 直径31.9 厚(最大)0.9

金剛心院池の上記垂飾の近くから出土した。周囲の減損がはなはだしいが、八方に蓮弁が出ているようなのでこのような名称が考えられ、さらに弁の間には間弁があつて八方二段である。弁の広がりがなく、その表面にあるのは子葉ではなく花の浮彫りとみられるので単弁であろう。針葉樹材、一材製、漆箔仕上げ。



図38 光背の唐草文様 阿弥陀如来像所用 円成寺

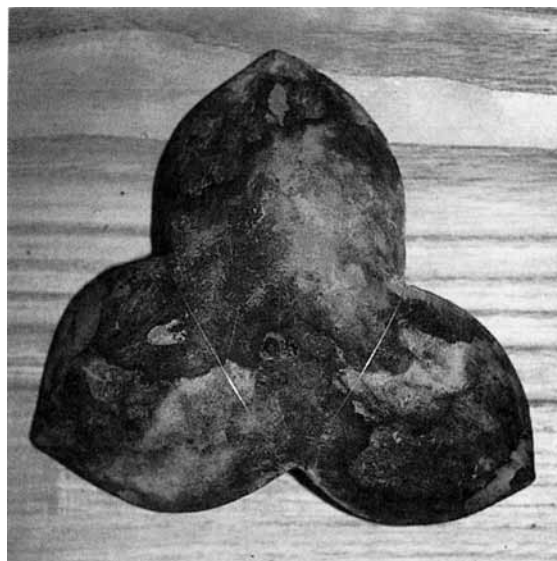


図39 三連蓮 中尊寺弁

大きさからして丈六像用の光背頭光の中心にある八葉蓮華とみるのが至当であろう。しかし、平等院鳳凰堂、法界寺、法金剛院、円成寺（いずれも平安時代後期、十一～十二世紀）など丈六阿弥陀如来像所用の光背頭光にある八葉蓮華はすべて複弁八方一段であり、これが本例と相違する重要な点である。小型の像では、峰定寺の千手観音像（久寿元年・1154）は単弁八方一段である。ところが、金剛峯寺の丈六大日如来像（平安時代後期、十二世紀。谷上大日堂伝来）はのちの奈良仏師（慶派）の系統に属する康助作の可能性が考えられている像だが、その光背頭光の中心は弁の間隔が開いて単弁四方二段となり、また七寺の丈六阿弥陀や両脇侍像（仁安年間・1166～69）、円成寺の等身大日如来像（運慶作、安元元～二年・1175～76）など奈良仏師作の場合は、単弁八方二段（図40）となって本例と一致する。これらを統合すれば、丈六像を中心にこの時代、光背頭光は複弁八方一段が定式だったらしいが、奈良仏師作の場合、単弁八方二段または四方二段となることがあったようである。したがって本例は奈良仏師の造立になる丈六像の光背頭光の可能性が出てくる。事実、金剛心院の造像では、康助・康朝など奈良仏師の参加があったのである。

念のためにほかの部位も想定しておく、天蓋の中心の八葉蓮華が考えられよう。この時期の天蓋の構造は、中心の八葉蓮華が周縁部と同材のものと別材のもの二通りあるが、後者の例として上記の金剛峯寺大日如来像（谷上大日堂伝来）の天蓋がある。蓮弁はその基部を蓮肉に挿込むのだが、裏面をみるとこれを支えるべく別の八葉蓮華形があり（図41）、単弁二段のそれは本例の形に近い。

2 金属製品

1) 金剛心院跡（巻頭図版3・図版60・152）

鴛鴦文金具(1)1枚 長25.7 幅12.2

九体阿弥陀堂の基壇から検出された。銅製、鍍金。向って左方が折損しその先が失われるが、ほかの三辺は内側に少し折り曲げられ、上下に各2、左右の中央に各1の釘孔があるので、須弥壇の框などの幅に合わせ、三辺の折り曲げの分



図40 光背の頭光中心
勢至菩薩所用 七寺

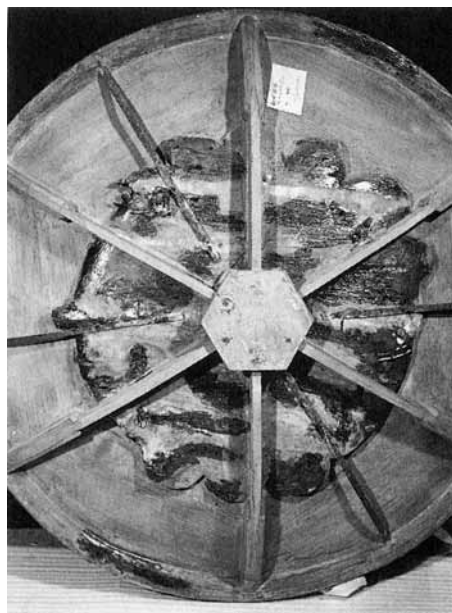


図41 天蓋の八葉蓮華（裏面）
大日如来像所用 金剛峯寺

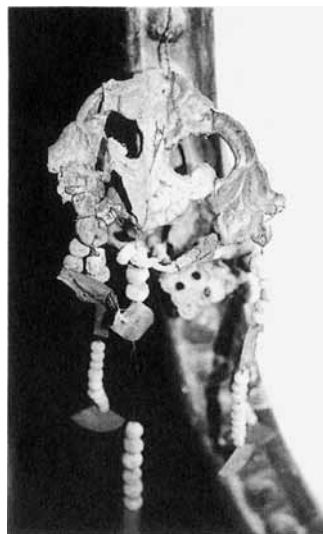


図42 天蓋の垂飾 大日如来像
所用 金剛峯寺

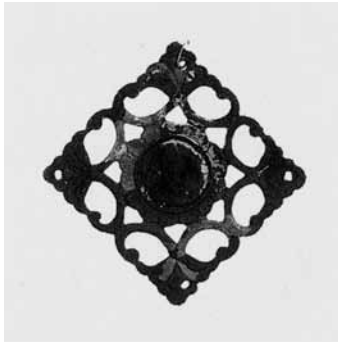


図 43 方形金具



図 44 瓔珞

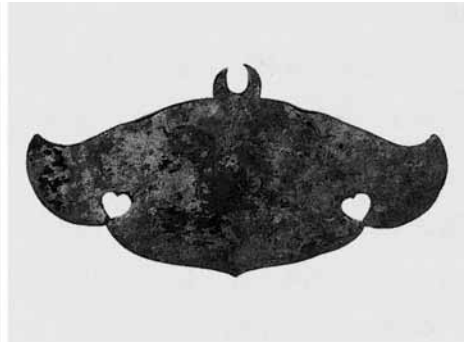


図 45 舌

だけ厚みを持たせて打ちつけられたものと考えられる。右方に猪目を二つ穿ち、中央に二羽の鴛鴦を向かい合わせに毛彫りし、空隙に魚々子を打つ。院政期には仏教的な意匠の中に動物の出ることはあまりないのだが、鴛鴦は鳳凰、孔雀、鶴などとともに比較的多い。鴛鴦の尾の先が宝相華に変化するなど、動物と植物が渾然一体となるのはこの頃よくある文様構成上の傾向であるが、その頸部に植物が巻かれるのは珍しい。鳥の頸部に布帛を巻き付けるという意匠が古代の西アジアや中国で行われたが、本例の遠い起源はおそらくそこにあるのだろう。

方形金具 (13) 1枚 各辺長 9.1

釈迦堂跡から検出された。銅製、鍍金、中央に菊花形（中にガラス珠）、ガラス珠は裏から入れられ、銅板を当てて鋳（3個）で留める。周囲に蓮華と蔓からなる文様を四方に配し、全体の形を方形にする。四隅に釘孔を開けるが、そのほかに二隅の同じ方向寄りのところに別の孔が穿たれ、そのひとつに針金が残っている。火を受けてガラス珠は本来の色を失っている。



図 46 鈴

垂飾 (14) 1個 長 8.3 幅 7.2

蔓で釣鐘形を二枚造り、内を同形に透かす。二枚を上下に割り込みを入れ合割きに二枚をつなぐ。上方に2個の孔、釣鐘形先端の四方に各1個の孔を開ける。先の八葉蓮華の項で述べた、高野山金剛峯寺大日如来像（谷上大日堂伝来）付属の天蓋に、本例によく似た垂飾（図 42）の付いていることが参考になる。

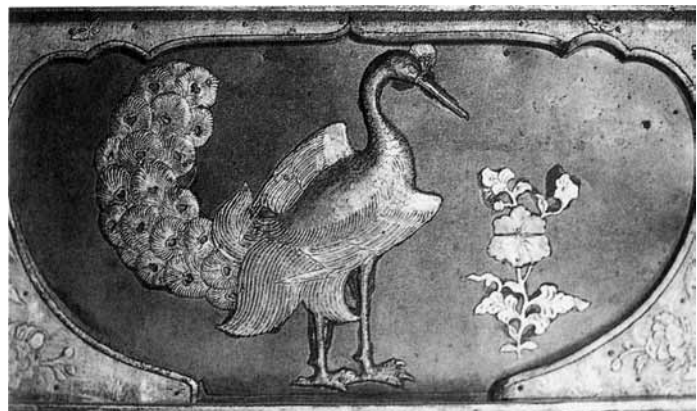


図 47 須弥壇の格狭間文様 金色堂（中央壇） 中尊寺

2) 成菩提院跡（図版 61・152）

方形金具（図 43） 1 個 各辺長 4.3

銅製、鍍金、中央に菊花形、周囲に蓮華と蔓からなる文様を四方に配し、全体の形を方形とする。金剛心院跡出土の方形金具より小さいが同形である。ただし菊花形にガラスを嵌入しない。四隅に釘孔を開ける。

瓔珞（図 44） 1 個 長 4.6

花形の垂飾、銅製、鍍金、各花形に孔各一を開ける。

舌（図 45） 1 個 長 0.3 幅 16.2

下方に尖頭形をむける舌。銅像、鍍金。厚さ 2mm。

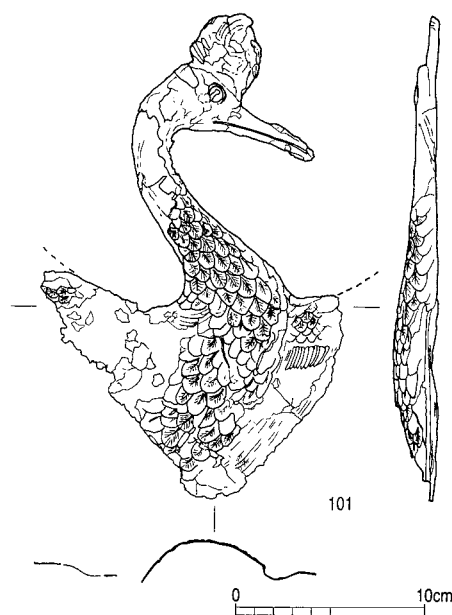


図 48 孔雀 第 118 次調査出土金具

3) 勝光明院跡（図版 156）

鈴（図 46） 1 個 長 5.9 張 4.9

銅製、鍍金。

孔雀文金具(101) 1 個 長 26.8 張 15.8

向って右方を向く孔雀。冠毛の付く頭部、胴と翼の半ばから上のほぼ全容と、翼・尾羽が部分的に残る。銅造で肉厚に造り（厚 2.3cm）、表面を毛彫りする。中尊寺金色堂須弥壇（特に中央壇）の格狭間にあらわされた同種の文様（図 47）に比べると、冠毛や翼、尾などが同形・同大で、格狭間との釣り合いをも考えると、向かい合う二羽の孔雀でなく単独の像である。両肢はのぼしているのか片肢で立っているのかは分からない。金色堂中央壇を天治元年（1124）の設置とすれば、勝光明院阿弥陀堂は供養が保延二年（1136）なのでそれより後になるが、両者にあまり時代的な開きはない。須弥壇格狭間にさまざまな姿態をあらわす単独の孔雀文が白河・鳥羽院政期の頃から京都で行われ、それが地方にまで広まった一例が中尊寺のそれだったのだろう。

まとめ

康和三年（1101）、鳥羽離宮の南殿に建てられた証金剛院に、丈六阿弥陀如来像（円勢作）が安置された。

泉殿の成菩提院には、天仁二年（1109）に三重塔、天永二年（1111）に多宝塔、翌年別の多宝塔がそれぞれ建立、供養された。これら三基の塔が中心だったのだが、天承元年（1131）七月八日に御堂が設置された。その翌日、三年前に崩御した白河法皇の遺骨が三重塔に葬られる。御堂には九体阿弥陀如来像（半丈六一体と等身八体）が置かれ、仏後壁に九品曼荼羅図（知順筆）、その裏面に補陀羅山（補陀落山）図（頼俊筆）が描かれた。

北殿の勝光明院は長承二年（1133）に阿弥陀堂の建設が始められ、保延二年（1136）三月二十三日に供養された。ほかに、史上著名な宝蔵が付属していた。平等院鳳凰堂を模した阿弥陀堂は、丈六阿弥陀如来像（賢円作）を本尊とする。その光背は「飛天光」で、大日如来、十二光

仏、二十五菩薩が付けられるものである。堂内庇の間に普賢菩薩など七体とそのほかの諸菩薩二百二十三体が、二階には法・利・因・語四菩薩と伎楽菩薩三十二体がそれぞれ置かれた。本尊を囲む四柱は金胎の両部諸尊、四面扉は極楽九品往生と迎摂（来迎）の図、そして仏後壁の表裏には二十五菩薩と極楽九品の儀が図絵された。

東殿の安楽寿院は保延三年（1137）、御堂に阿弥陀三尊像（長円・円信作）が安置された。同五年、鳥羽法皇の葬塔として三重塔が建てられ、またこれに近接して美福門院の葬塔としてもう一基の塔も準備された。後者は実際には近衛天皇の陵となる。同六年炎魔天堂が建てられた。久安三年（1147）建立の九体阿弥陀堂には丈六九体阿弥陀如来像と一丈両脇侍（長円・元円作）が置かれ、久寿二年（1155）建立の不動堂には半丈六不動像、二童子、五部夜叉、虚空蔵（いずれも康助作）が安置された。

田中殿の金剛心院は釈迦堂、九体阿弥陀堂、寝殿からなり、仁平三年（1153）に木作始めがあり、翌四年八月九日に供養された。釈迦堂には丈六釈迦如来像、八尺普賢・文殊菩薩像（以上康助・康朝作）、および四天王像が安置され、仏後壁に虚空会・靈鷲山、四面の扉には八相成道という釈迦関係の図が描かれた。一方の九体阿弥陀堂は丈六阿弥陀如来像九体（賢円、院尊作）が置かれ、母屋柱に極楽曼荼羅、四面扉に九品往来が図絵された。

このように御所附属の寺院があいついで建てられ、仏像の製作はいずれも宮廷仏師が担当している。しかし、近衛天皇陵多宝塔、安楽寿院、北向山不動院など現在の仏教的施設に残るものを除いて、仏像・仏画・仏具といった伝世品は確認できず、遺跡からの出土品に頼るしかない。

遺物のうちまとまって検出された、金剛心院庭園の苑池から出土の垂飾や八葉蓮華は、類似の伝世品がないかまたは希少で、美術史的にもきわめて貴重である。また同じ場所から出土の宝相華葉、蔓、蓮弁などは断片が多いとはいえ、当時の仏像等荘嚴のありさまを彷彿とさせるものがある。いずれの堂のものか決め手がないとはいえ、北の釈迦堂、西の九体阿弥陀堂から至近等距離なので、いずれかの仏像や壇の荘嚴具が含まれると推測される。

付章 2 鳥羽離宮跡出土の自然遺物

1 第 79 次調査洲浜 21 植物遺体の分布と植生の復元

発掘調査の結果 Y674 の南北ライン付近は東に池をのぞむ汀線付近にあたるということである。そこで、ライン上の堆積物中の大型植物遺体である木本や草本の種実の分析を行うことで、池周囲の植生の復元を試みる。

1) 試料と方法

Y674 上で、北から X529・X532・X540・X548・X550・X552 の 23m 間の 6 地点で約 4ℓ (縦 20cm × 横 20cm × 深さ 10cm) の土を試料として遺構面から採取した。池の汀線の様子が X542 付近を境として南北で異なっているため、北側で 2 ヶ所、境界付近で 1 ヶ所、南側で 3 ヶ所を選び、試料の信頼度を高めた。持ち帰った試料を屋内で 1mm メッシュのフルイで水洗いし、バットに展開して中から種実、葉、枝を拾い出し、同定を行った。

2) 結果

分析の結果、木本 10 科 14 種、草本 15 科 25 種を得た。(表 17・18)

木本では、センダンが各地点から出土した。サクラ・エノキは、地点により集中して出土している。アカマツ?・クリ・ウメ・キイチゴ属、カラスザンショ・ブドウ属は 2 地点以上から出土した。ナシ・ガジノキ・アカメガシワ・ガマズミ属は、1 地点で確認できただけであり、出土量も少ない。

草本では、シソ・オモダカ・ヘラオモダカ・アゼガヤツリ?が地点によって 100 粒以上出土した。ミゾソバ・タデ属・キツネノボタン?・ヘビイチゴ属?・セリ・チドメグサ・イボクサが 10 粒から 100 粒の範囲で出土した。イヌビユ・ミドリハコベ・コハコベ・タガラシ・カタバミ・ナス・ウリ・カラスウリ・ゴキヅル・コムギ(炭化)・ホタルイ属・ツユクサは 10 粒以下の出土であった。

なお、参考として第 81 次調査(推定北殿)の池内の土を分析した結果を表 19 に示す。

分析方法は第 79 次調査と同じであるから省略する。全体として種実の出土量が少ないが、内容をみると第 79 次調査の分析結果とよく似ている。木本ではマツ・サクラ・センダンが共通種としてあげられる。草本は、水辺や湿地に生育する種が多いが、種実の総数がタカサブロウを除いて少ない。

3) 考察

種実の供給範囲

木本の種実は、カエデのように翼を持つものを例外とすれば、母樹のごく周辺に落下し、その後ほとんど移動しないのが普通である。種実が1地点に集中していたり、枝や葉、幼果を伴う場合は、それらを供給した母樹が周辺に生育した可能性が高いといえる。

一方草本の種実は、木本のそれと比較して小さく軽いものが多いので、その供給範囲は広いと考えられる。しかしながら母草が遠ざかることは、一般的に供給量は距離の2乗に反比例して減少することを意味するから、母草から離れて一定量の種実が出土する確率は低くなる。したがって一定量の種実が出土するためには、付近に母草が存在するか、あるいはやや広い範囲に同一種が群生している必要がある。実際は、後者の場合が多いと考える。

木本

調査地点は、東に大きな池をのぞみ、西に建物が存在するごく限られた空間である。そこに生育する木本は、原則として植栽され、管理されていたと考える。

X529・X532ではクリの完熟した果皮や未熟果、総苞（イガ）が出土している。果皮が大型なので、シバグリではなく、タンバグリなどの栽培種である。

X540ではエノキが集中しており、ほかの地点ではほとんど出土していない。

X548ではウメが集中しており、2m離れたX550ではほとんどなく、4m離れたX552ではまったくなく。ウメの核はやせて貧弱である。

X550付近ではサクラが特に集中しているほか、センダンやマツも多い。マツは、毬果や葉（二様である）からアカマツではないかと考える。センダンがX548、X550が多いのに対し、サクラはX550、X552に多いことから、センダンの方がサクラよりも北に位置していた可能性が高い。ここで取り上げた木本の種実の出土状況は、分析地点の中の限られた地点でのみ出土する傾向がある。このことは種実の母樹が分析地点のごく周辺に存在したと考える上で大変有利である。そこで、仮に付近に母樹が存在したならば、その存在は、発掘調査の結果にも当然現れていても良いはずである。発掘調査では、残念ながら木本の株はまったく存在しなかったのであるが、Y678-Y680付近には汀線に平行するかのように北からX552・X540・X544・X548・X550・X552付近に土壌状の落込が点々と存在している。X544以外の地点（X544からは試料を採取しなかった）のすべてに対応して、これら落込から東4m付近で木本種実が出土している。この事実から、株こそ残っていないものの種実を供給した母樹の存在した地点であった可能性が非常に高いと考える。樹種の特定を地点ごとに試みると、X532・Y678付近にクリ、X540・Y678付近にエノキ、X548・Y678付近にウメ、X550・Y680付近にセンダン・アカマツ？、そのやや南にサクラがあったものと考ええる。

同定した木本の中で、通年緑を保っていたのはアカマツ？だけである。ナシ・ウメ・サクラ・センダン・ガマズミなどは、花や実を鑑賞するために植栽したものであろう。前述で特定した地点にそれぞれの母樹が存在したと仮定すると、種実の供給範囲が少なくとも4m近くに及ぶもの

が多いので、高木が多かったかもしれない。以上は、庭園樹としても現在も普通に用いる木本である。

草本

草本は、環境条件によって大きく生育条件を支配されている。草本の種実を分析することで単に種を決定するばかりではなく、草本が生育した環境を評価することが可能となる。分析を行った6地点で、種実が10粒以上出土した草本は12種、その内の8種までが湿地や水辺に生育する性格を持つことから、主として分析地点付近が水辺や湿地であったことを示すものといえる。しかし、分析結果では無視できない量のイヌビユ・ハコベ・タカバミがあることから、分析地点の環境が変化しつつあることを示している可能性がある。地点ごとに最も多く出土した種実を中心として環境を復元する。

X529・X532では、オモダカを主とする水辺の草本が多く、この地点が普通冠水しており両地点が互いによく似ていたことが認められる。

X540では、ヘラオモダカがオモダカよりもずっと多くなり、両者の出現率がX529-X532と逆転していることで、X540の方が水深は浅かったのかもしれない。

X548では、ヘビイチゴ?やチドメグサなどの陸性で葡萄性の草本が目につくほか、シソもほかの地点よりずっと多く、アゼガヤツリ?もここだけ多い。これは、この地点が水辺からやや離れ、陸上であることが多かったことによると考える。

X550では、セリ、キツネノボタンなどの多年草で、湿地に生育する草本がほかの地点と比べ、多くなっており、水辺の近くであることが多かったようである。

X552では、種実の出土量がほかと比較してずっと少なく、種実の内容はこの地点が湿地状であったことを示している。

ナス・ウリ。コムギなどの栽培種がごくわずかに出土している。草本の中で、明らかに植栽したと考えられるのは上記の種のみで、量がごくわずかであるから、池の存在した時期のものと考えられるよりは、カタバミやイヌビユなどと共通する時代のものと考えられる。

* 文中のX529・Y678などは、座標系(VI)のX=-116,529・Y=-22,678などの一部を略したものである。

表 17 第 79 次調査 Y674 ライン上木本分析結果

番号	科名	和名(属名)	学名	出土部位	性質	花期 (月)	X529 (個)	X532 (個)	X540 (個)	X548 (個)	X550 (個)	X552 (個)
1	マツ	アカマツ(?)	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.	毬果・葉	常緑針葉樹	4・5			葉○	1	6	
2	ブナ	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. Et. Zucc.	総苞・果皮	落葉広葉樹	6	5	8				
3	ニレ	ムクノキ	<i>Aphananthe aspera</i> Thunb.	核	落葉広葉樹	5	1	1.5	1			
4	ニレ	エノキ	<i>Celtis sinensis</i> P.	核	落葉広葉樹	4		1	40			
5	クワ	カジノキ	<i>Broussonetia papyrifera</i> L.	核	落葉広葉樹	5				1		
6	バラ	ウメ	<i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核	落葉広葉樹	2・3				12	1.5	
7	バラ	サクラ(亜属)	<i>Prunus</i> sp.	核	落葉広葉樹	4		3	3	1	142	35
8	バラ	ナシ	<i>Pyrus pyrifolia</i> Nakai	種子	落葉広葉樹	4			1			
9	バラ	キイチゴ(属)	<i>Rubus</i> sp.	種子	落葉広葉樹	6	1	1	1	5	1	
10	ミカン	カラスザンショ	<i>Fagara ailanthoides</i> Sieb. et Zucc.	種子	落葉広葉樹	7・8			3	1.5	3	
11	センダン	センダン	<i>Melia azedarach</i> L.	核	落葉広葉樹	5・6	3	6	2	13	14	2
12	トウダイグサ	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> Muell.	種子	落葉広葉樹	7			2			
13	ブドウ	ブドウ(属)	<i>Vitis</i> sp.	種子	落葉広葉樹	5・6			1	5	4	1
14	スイカズラ	ガマスミ(属)	<i>Viburnum</i> sp.	核	落葉広葉樹	5・6		1				

表 18 第 79 次調査 Y674 ライン上草分析結果

番号	科名	和名(属名)	学名	出土部位	生育環境	性質	X529 (個)	X532 (個)	X540 (個)	X548 (個)	X550 (個)	X552 (個)
1	タデ	ミゾソバ	<i>Polygonum Thunbergii</i> Sieb. et. Zucc.	果実	水辺	1 年草	5	46	5		24	15
2	タデ	タデ属	<i>Polygonum</i> sp.	果実	水辺	1 年草	10			6		
3	ヒユ	イヌビユ	<i>Amaranthus lividus</i> L.	種子	畑・庭	1 年草	5	5				
4	ナデシコ	コハコベ	<i>Stellaria media</i> Villars	種子	畑・庭	越年草		1				
5	ナデシコ	ミドリハコベ	<i>Stellaria neglecta</i> Weihe	種子	畑・庭	越年草		3		1		
6	キンボウゲ	キツネノボタン	<i>Ranunculus quelpaertensis</i> N. (?)	果実	湿地	多年草			4		51	2
7	キンボウゲ	タガラシ	<i>Ranunculus sceleratus</i> L.	果実	田や溝	越年草	4	6		4	7	
8	バラ	ヘビイチゴ (属)?	<i>Duchesnea</i> sp. (?)	果実	陽地	多年草			10	89		
9	カタバミ	カタバミ	<i>Oxalis comiculata</i> L.	種子	庭	多年草	8	1		6	4	1
10	セリ	セリ	<i>Oenanthe javanica</i> DC.	果実	湿地	多年草	2	5	2	2	26	3
11	セリ	チドメグサ	<i>Hydrocotyle</i> sp.	果実	日陰の庭	多年草				34	12	2
12	セリ	?	<i>Umbelliferae</i> (?)	果実	湿地?	多年草				37		
13	シソ	シソ	<i>Perilla frutescens</i> Brittonvar <i>acuta</i> Kudo	果実	栽培植物	1 年草	76	65	120	364	202	6
14	ナス	ナス	<i>Solanum melongena</i> L.	種子	栽培植物	1 年草		1		4	2	
15	ウリ	ウリ	<i>Cucumis melo</i> L.	種子	栽培植物	1 年草		1			1	1
16	ウリ	カラスウリ	<i>Trichosanthes cucumeroides</i> Maxim.	種子	荒地	多年草					1	
17	ウリ	ゴキツル	<i>Actinostemma lobatum</i> Maxim.	種子	水辺	1 年草			1		1	1
18	キク	タカサブロウ	<i>Eclipta prostrata</i> L.	果実	湿地・水田	1 年草	1		4	3		
19	オモダカ	オモダカ	<i>Sagittaria trifolia</i> L.	果実	池・水田	多年草	279	352	68	2		
20	オモダカ	ヘラオモダカ	<i>Alisma canaliculatum</i> A.	果実	浅い水中	多年草	28	18	360	4	3	28
21	イネ	アゼヤホタルイ	<i>Triticum aestivum</i> L.	果実	栽培植物	越年草					1	
22	カヤツリグサ	アゼガヤツリ?	<i>Pycnens globosus</i> Reichb. (?)	果実	湿った平野	1 年草	2	9		509	20	4
23	カヤツリグサ	ホタルイ(属)	<i>Scirpus</i> sp.	果実	湿地	1 年草		1				
24	ツユクサ	ツユクサ	<i>Commelina communis</i> L.	種子	庭	1 年草	7	2	2			
25	ツユクサ	イボクサ	<i>Murdannia Keisak</i> Hassk	種子	水田・沼地	1 年草	75	14	3	35	55	64
	種実総数	—	—	—	—	—	501	529	579	1139	411	127

表 19 第 81 次調査 池 植物遺体分析結果

	科名	和名	出土部位	D8 茶灰色粘土	D8 茶褐色腐植土	西半 茶褐色腐植土
木本	マツ	二葉マツ	毬果・葉	1 葉○	1 葉○	葉○
	マツ	ツガ?	葉	葉		葉
	バラ	サクラ	核	2	1	
	バラ	キイチゴ	種子	1		
	ミカン	サンショウ	種子		2/1	
	センダン	センダン	核	3 1/2	1	3
	トウダイグサ	アカメガシワ	種子			1
草本	タデ	タデ	そう果		34	1
	タデ	サナエタデ	そう果		3	
	キンボウゲ	タガラシ	そう果	33		
	アブラナ	—	種子		4	
	カタバミ	カタバミ	種子	3		
	ヒシ	ヒシ	果皮			破片 1
	シソ	シソ	果実	14		
	ナス	ナス	種子		1	
	ウリ	ウリ	種子	2/1		
	キク	タカサブロウ	そう果	1,737	58	5
	キク	—	そう果	10		
	オモダカ	オモダカ	そう果	28	3	
	オモダカ	ヘラオモダカ	そう果	5	4	
	イネ	コムギ	果実(炭化)	1	1	
	カヤツリグサ	カヤツリグサ	そう果	9	5	5
	ツユクサ	イボクサ	種子	14	5	

- * 文献 牧野富太郎(1977) 『新日本植物図鑑』北隆館
堀田満(1978) 『水辺の植物』保育社
北村四朗他(1978) 『原色日本植物図鑑』木本編Ⅰ・Ⅱ、草本編上・中・下 保育社

2 第79次調査池内（洲浜21・石組22）の石材の岩石学的検討

発掘調査によって出土した池内の石材のうち、大きな39個について岩石の特徴を肉眼によって観察を行った。（表20）

岩石名

チャート・頁岩～粘板岩・砂岩・脈石英・ホルンフェルス・黒雲母花崗岩・緑色片岩などの7種類である。その分布を、図49に示す。

岩石種ごとの数は、チャート17個・頁岩～粘板岩5個・砂岩6個・脈石英5個・ホルンフェルス3個・黒雲母花崗岩1個・緑色片岩2個である。

大きさ

石材は、池中の泥土に埋まっているため、鉄棒を泥土中に押し込んでおおよその大きさを求めたが、数量としては不正確になるので省略する。

円磨度

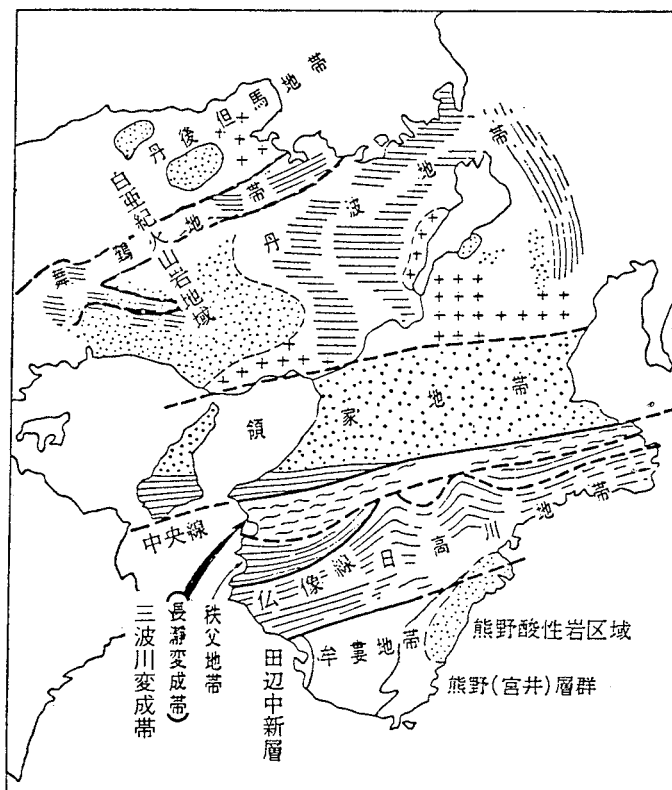
KRUMBEIN(1941)による円磨度の段階表を使用して測定を行った。岩石種ごとにみると、チャート・頁岩～粘板岩・砂岩・脈石英・ホルンフェルスは0.1～0.6の角礫～円礫を示すが、ほとんどのものは、0.1～0.4であり、黒雲母花崗岩は0.6の円礫を、緑色片岩は0.4～0.5の亜円礫を示す。なお、黒雲母花崗岩は、たまねぎ状風化をなしているため、河川による円磨は少なく、その露頭での風化によってかなり丸くなっていたと考えられる。

風化度

肉眼観察では、ほとんどの岩石は風化しておらず新鮮である。4個は少し風化が進んでいる。

石材産地の推定

チャート・頁岩～粘板岩・砂岩・脈石英・ホルンフェルス・黒雲母花崗岩は、地質構造区分では、中～古生層の丹波層群が分布する丹波地方に普通にみられるものである。これらの岩石のうち、チャート・頁岩～粘板岩・砂岩は、全体的にごくわずかであるが熱変成を受けており、近くに花崗岩の分布が考えられる。熱変成によるホルンフェルスの存在、黒雲母花崗岩もみられる。こ



近畿地方の地質構造図 a 古い構造
現在の地形を直接支配していない地殻変動による構造
= 古生層または中世層の発達地域
+ または × 花崗岩の発達地域
v 火山岩の発達地域

図49 近畿地方の地質構造図

松下進(1971)「近畿地方」による

これらの岩石の円磨度は、0.1～0.4が最も多く、まれに0.5～0.6のものがみられるので、これら岩石の採集地は露頭からの崩落石か、急流域の河床礫の分布する場所が考えられる。また、鳥羽離宮の地形や交通などをも考慮すると、宇治、醍醐地域、亀岡の行者山周辺、高野川流域などが候補としてあげられるが、これらの岩石の特徴を総合的に考えると、高野川の支流の急流をなす谷川の岩石を採取し運搬したのではないかと考えられる。

緑色片岩は、三波川変成帯に産する岩石である。三波川変成帯は、九州の佐賀関半島から関東山地北部に至る総延長1,000km、最大幅約30kmに分布している。近畿地方では、図49に示すように紀ノ川本流沿いに分布する。三波川変成帯の緑色片岩分布地域の河床礫が採集されたことが円磨度から考えられる。この岩石は、水に濡らすと濃い緑色を呈し、細かな平行線のようにみえる片理が発達する珍しい岩石なので、このような遠方から運搬されたのではなかろうか。

岩石の据え付け

池内の岩石のそれぞれについて、どのように据え付けられているのか、向きと角度を地質調査用のクリノコンパスを用いて測定した（図50）。角度は長軸と中軸の水平面からの下方への傾きの程度を示した。短軸は、長軸と中軸がなす面に直交することになる。

短軸の傾斜を高角度にしているものは、37・36・33・34・17・32・16・15・12・10・11・30?・28?・29・9・8・3・2・27?・1・25?・23であり、いわゆる岩石を寝かせた状態で据え付けている。

長軸の傾斜を高角度にしているものは、19・20・21・24・22であり、中軸が高角度のものは、38?・14・13・26・7・6・5であり、これらは岩石を立てた状態で据え付けている。

これらの岩石の種類や種々な特徴、据え付け状態などの個々のものと全体的な配置などを、今後とも考察を継続していただきたい。

* 引用文献

松下 進 「近畿地方」『日本地方地質誌』5（改訂版）、朝倉書店、1971年

表 20 第 79 次調査 石材の岩石学的特徴

番号	岩石名	円磨度	注記
1	チャート	人為的割れ	白黒・脈石英多い
2	チャート	人為的割れ	白黒・脈石英多い
3	砂岩	0.3 ～ 0.4	表面は弱風化、細～中粒砂
4	砂岩	0.4	中粒砂
5	チャート	0.4	赤白
6	チャート	人為的割れ	赤白
7	貢岩～粘板岩		表面が、少し欠ける。節理面が発達
8	ホルンフェルス	0.4	黒色 緻密
9	脈石英	0.2	
10	チャート	0.2 ～ 0.3	黄灰色
11	含砂質貢岩	0.2	不規則に砂が混ざる。
12	脈石英	0.2 ～ 0.3	
13	チャート	0.2 ～ 0.3	黄黒色、きれいな層状
14	チャート	0.3	黄黒色、きれいな層状
15	脈石英	人為的割れ（一部）	
16	砂岩	0.4	中粒砂
17	脈石英	人為的割れ（一部）	
18	チャート	0.3	黄白、赤白
19	チャート	0.3	赤白
20	脈石英	人為的割れ（一部）	
21	泥質砂岩	人為的割れ（一部）	
22	黒雲母花崗岩	0.6	一部にたまねぎ状風化、弱風化
23	チャート	人為的割れ（一部）	シェアーが発達
24	ホルンフェルス	0.1、一部に人為的割	岩石は、貢岩～粘板岩？
25	含砂質貢岩～粘板岩	0.1	
26	緑色片岩	0.4 ～ 0.5	典型的、新鮮
27	緑色片岩	0.4 ～ 0.5	典型的、弱～中風化
28	チャート	0.1	白黒、脈石英多い
29	チャート		黒灰、脈石英入る
30	ホルンフェルス	0.5 ～ 0.6	原石は、砂岩？
31	貢岩～粘板岩	0.2 ～ 0.3	熱変成を少し受けている
32	貢岩～粘板岩	0.1	
33	チャート	0.1 ～ 0.2	脈石英多し
34	チャート	0.1	白黒
35	チャート	0.1	脈石英多し、節理面が発達
36	砂岩	0.2 ～ 0.3	弱風化、中粒砂
37	チャート	0.1	
38	チャート	0.2 ～ 0.3	黒灰色
39	砂岩	人為的割れ	中風化、中砂

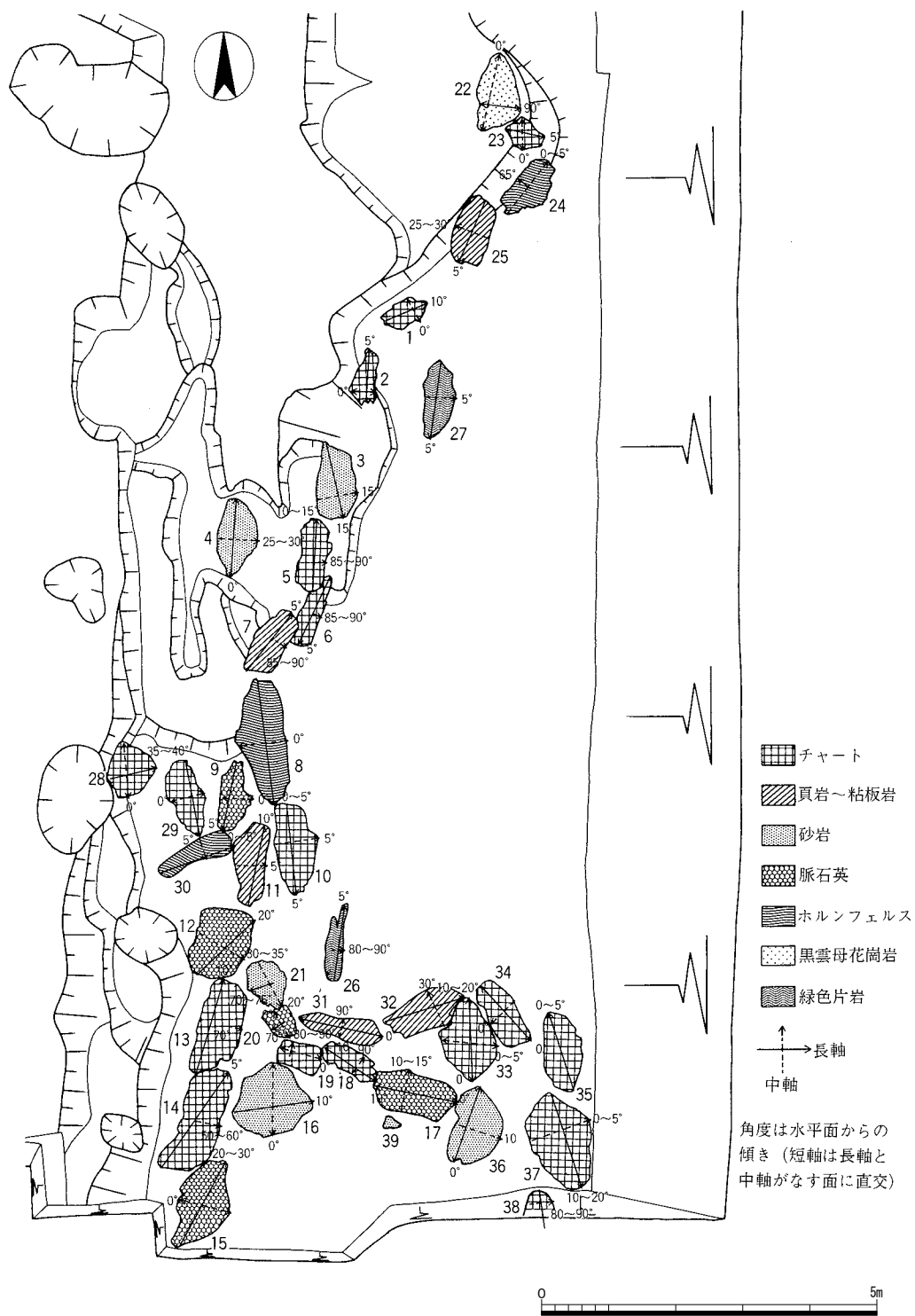


図 50 池 14・石組 22 石材の岩石種類分布と据え付け図 (1:100)

付章 3 鳥羽金剛心院の堂舎の規模について

平信範の日記『兵範記』によると、仁平三年（1153）四月二十日の記事に、明日二十一日鳥羽で、新御堂の木作始事があり、信範がその奉行を命じられたこと、そしてその建設の地と御堂の構成、規模は、

馬場殿北樹北、田中南北六十丈、東西五十丈点定、其所其 九間四面、阿弥陀堂、六丈御仏
播磨守可被安置、一字、備後守家明朝臣造営、三間四面積迦堂一字、丈六、並寢殿御所舎屋
十余宇、播磨守顕親朝臣奉之、備後所課中納言家成卿、播磨所課宇治入道殿御沙汰也、任勘
文、午刻始木作、木工時次、備後、則経、播磨

として、鳥羽殿のうちの馬場殿北、田中に決められ、その敷地の規模は南北六十丈、東西五十丈であり、そこに九間四面の阿弥陀堂と三間四面の釈迦堂が造営されることになり、その木作始めの行事が行われた。そして阿弥陀堂は備後守家明が、釈迦堂と寢殿ほかの舎屋十余宇は播磨守顕親が造営を引き受けたこと、そして造営の大工は阿弥陀堂が時次、釈迦堂は則経が担当したことなどが知られる。

また『本朝文集』の顧文によると、
釈迦堂は、

瓦葺、二階三間四面堂舎、一字

奉安置皆金色一丈六尺釈迦如来像一軀、同八尺普賢文殊二菩薩像各一軀、五尺五寸四天王像各一軀 仏後抄障表裏図絵虚空会並靈鷲山四面扉図絵八相成道儀式

九軀阿弥陀堂は、

瓦葺、二階九間四面堂舎一字

奉安置皆金色一丈六尺阿弥陀如来像九軀、母屋柱図絵極楽界曼荼羅、四面扉九品往生式とある。前出の『兵範記』の記事にほぼ等しいが、それ以上に各堂が二階造りであり、室内は仏画を画き華麗に装われていたことに注目される。この二階とは二階建てを意味するのではなくて、裳階が付くことで一見したところ二階造りにみえる形式のもの、その類例に宇治平等院鳳凰堂の中堂や日野法界寺阿弥陀堂にみる裳階つき堂の形式をいうのであろう。

そこで釈迦堂は三間四面堂の外回りに裳階が付くことによって、桁行七間、梁行六間になる。これは発掘調査で検出した南面の建物1の桁行、梁行の各柱間数に一致している。

また、九軀阿弥陀堂は母屋桁行九間、梁行四間、その四周に庇を回し、さらにその外回り一間通りに裳階が付いて、総体が桁行十三間、梁行六間の大堂を想像できる。発掘調査では建物1の南西で検出された建物2が長大な規模のもので、東の池に面していた。桁行柱間は北で孫庇一間が加わり十四間で、梁行柱間は六間、そのうちの外回りの柱間一間通りは柱の出が12尺で庇の13.7尺より浅く、この柱間を裳階と考えれば妥当の大きさといえる。

『兵範記』仁平三年十月十八日の記事に、この日、鳥羽東新御堂の棟上げが行われていたこと

を記し、

件所、馬場殿北、田中新御所南、大路南、往古田中也、去春点定其所、四月被始木造、夏秋之間弘四箇築壇、整池山、居礎、今日属吉曜、被行棟上事也、点定之中央南面三間四面、釈迦堂、同間数寢殿、東西渡殿、北面以下、宇数十五宇也、是播磨国所課、入道殿御沙汰、寢殿西頭、東面九間四面、阿弥陀堂併中門廊、是また備後国所造

とあり、前出の記事と同じであるが、寢殿が三間四面の規模で東西に渡殿をそなえていたことがみえる。発掘調査では建物1の北方に規模がもうひとつ、明白でないが建物3の遺構を検出しており、これが寢殿に相当するものであろうと推定している。

同記の久寿元年八月七日の記事に、

御堂名号僉議、可号金剛心院者、寛信法存日令撰申云々

とあり、この鳥羽東新堂は金剛心院と名付けられている。

八月八日 早旦、参鳥羽殿、新御堂、(中略)釈迦堂三尊、阿弥陀堂九軀皆丈六像、当日可被奉居、而予今日自仏所仮屋、移御堂庇、明朝鎮壇、了可安仏壇なり、(中略)今日己移渡了、翌日の供養儀式にそなえて八日に両堂の各本尊が堂内に渡されている。

八月九日に鳥羽金剛心院の供養が行われていて、釈迦堂の南東と橋南頭に幄を立て左方衆僧座、阿弥陀堂東庭に幄一字を立て右方僧衆座、池東畔に御誦經幄を立てていることから、釈迦堂の南東に橋があり、阿弥陀堂の東庭に池が造られていたことを知れる。また、同日に造営関係者に鑑賞されていて、藤原隆能に扉絵賞、法印智順は両方絵仏師として、釈迦仏を奉造した大仏師法眼康助の譲りで康朝が、阿弥陀九軀を奉造した法印賢円の譲りで法橋印尊が、そして木工時次、則経が各賞を受けている。

同記、久寿二年二月二十五日の金剛心院修二月記事に釈迦堂の舗設で、東庇に公卿座を西面南上にしつらえ、北庇の東一、二間に紫帖三枚を敷き殿上人座とし、西庇を御所とすること例の如しとあり、東北の殿上子午廊の東庇に二行に帖を敷き僧の漬菓子を据え、仏後又庇大導師座を設けていた。

この中で堂の北東に南北行の殿上廊が付属し、また釈迦堂内の仏後方に又庇が造られていたことが知られる。

また、西庇に、院の御所が当てられ、その西北の子午廊に尾張守が仰せにより褻御所を儲け、其西に三間廊を造り加えてその一間に棚を立て、中間を塗箆に用い、第三間を御桶殿に舗装し、それは美を尽くし善を極めたものでつづさに記すことはできないという。

ここにみえる釈迦堂東北の殿上子午廊は、発掘調査で建物1の北、東端に堂と柱筋を揃え、南北に柱間5間の建物4を検出している。また、西北の子午廊に相当するものに、建物1の西、建物の北東に東西柱間5間の建物5があり、その北方に東西柱間10間の建物9が検出されていて、この両者を南北柱間六間の廊でつないでいた。この廊が記録に褻御所に舗設されているものであろう。

以上のように『兵範記』の記事や『本朝文集』などの願文から金剛心院の施設の配置、規模そ

して形式などを知ることができる。南面して中心仏堂を置き、その東西に面して九躰阿弥陀堂を配した伽藍の構成は、藤原道長の法成寺や白河天皇の法勝寺の先例があり、これらの整備された大伽藍では薬師堂、五大堂などを加えて左右対称の配列構成を持つところに特徴がみられるが、その構成を要約して中心に釈迦堂、西脇に九躰堂を配したのが金剛心院の構成といえる。

これらの御堂群の正面に入江や出入りの多い変化に富んだ池庭を配置し、その畔は洲浜を造り景石が組まれあるいは滝組を造り植栽を添えるなどして建築群の造る景觀に一層に興味を助長する演出もまた見応えがする。

こうした特色をそなえた金剛心院が今日では鳥羽の地の何処に所在したのか、わずかに土地の小字名から推定するだけで具体的な遺構が残されていない。そのためこれまで想像の範囲を出なかったが、多年次にまたがる発掘調査を通じて多くの建物遺構を検出し、文献との比較から知られる以上にその所在と規模を明らかにすることができた成果はきわめて大きい。

釈迦堂は裳階を含めた規模は桁行 22.5m、梁行 21.4m であり、日野法界寺阿弥陀堂の裳階を含めた桁行、梁行各 18.48m に比較すると、前者ははるかにオーバーする大規模建築であることが窺える。

また、九躰阿弥陀堂の例に浄瑠璃寺本堂があり、その桁行 24.8m、梁行 9.09m に対して、金剛心院の九躰堂は裳階を外して桁行 44.6m、梁行 16.6m でおおよそ前者の 1.8 倍の規模になり、裳階を加えると一層大きいボリュームを誇示したものになる。この長大な堂の東正面を、平等院鳳凰堂の中堂とその左右翼廊を合わせた正面幅の大きさと比較すると、前者の方が少し上回るところにその規模のユニークさを理解できよう。

白河天皇に始まり鳥羽院にひきつがれて多くの御堂と御所が並び立った鳥羽殿の中でも、金剛心院は鳥羽院が晩年に総力を挙げて造営された御堂御所であっただけに、類例を越えて壮大な規模を誇示するものであり、保元の乱を間近にした院政期末を記念した存在であったといえる。